『まア、こッちへ、はいンなせえ』

『有難う』

德内は、遠慮なく門番小屋へ、はいつた。

これから、門番の内職を手傳ひはじめたが、百姓の子だから、この位の事は、何でもない。門番は、頗る感心した。

こんな調子であるから、屋敷の人には、非常に可愛がられて、何一ツ不自由なく、その日を送つて居た。

甘利は、少しでも暇があると、德内を呼んで、讀書、習字、何くれとなく教へてやる。記憶のよいことは、また驚く可きほどで、一度教へれば、大概覺えてしまふ。

道場へも通はせてくれたから、劍術は、いよ〳〵強くなつた。書物も、一と通りのものは讀めるやうになつたので

やがて、藩儒の許へ通はせてくれた。

かくて、二年餘りを過した。

文武の道からすれば、立派な一人前にはなつたが、さて侍となるには、その頃の情實で、百姓の子はナカ〳〵むづかしかつた。

甘利は、いろ〳〵心配はしてくれたが、その事は、容易に運びがつかないので、德内の心には、それ一つが不滿であつた。

八

侍になることの容易でない、といふ事情は、よく判つて來た。武家制度の上からすれば、或は左樣ある可きが、本統であらう、とも考へたけれど、併し、心のうちには、絶えず其不滿はあつて、面白からず日を送つた。

甘利が、自分の心を知つて、常に勞はつてくれることも、決して知らぬ譯ではないが、さればとて其れが爲めに、

自分の一生は、どうなつてもよい、といふほどに、強い覺悟を、有つことは出來なかつた。

侍になりたいの初一念は、どうしても貫かねばならぬ。之れが爲めには、たつた一人の老父をさへ、他人の手に、托して來たのであるから、德内の決心は、いよ〳〵堅くなるばかりであつた。

劍術は、免許を得たし、讀書も、一と通りは、修業が出來て、もう其點に就ては、少しの心配なく、普通に世渡りを爲るのに、何の懸念もない、といふほどに、自信も出來た。

日本は廣い、六十餘州のどこかに、自分を買つてくれる人もあらう。幸ひに歳も若いのだから、猶ほ此上に、文武の修業をし乍ら、侍になる可く、全國の遍歷も、やつて見たい、それを爲るには、甘利の許しをうけるのが、先づ第一である。

全くの不見不識で、只だ往來の行違ひに、圖らずも救ひ上げられ、長い間の教をうけた、高恩は、深く感謝して居るのであるから無斷で走るやうな、不心得は持つて居らぬ。公然、その許しを得て、仙臺を離れたい、と、堅い覺悟が出來たので、甘利の前へ出た。

『オー、德内か』

『ち、、、御願ひの次第がありまして……』

『うむ、どういふことかな』

『永の御暇を、戴き度う存じます』

此一言に、甘利は、意外の感を有つた。

『それは、どういふ仔細で……』

『全國の遍歷を、いたし度いのであります』

『ふふーむ』

『御蔭を以て、文武の修業も、一と通りは出來ましたが、猶ほ此上に、修業も積み度く、全國の遍歷を、思ひ立ちましたので、いくたびか考へての覺悟、決して御高恩を、忘却しての事ではありませぬ』

『かねて聞いて居る、其方の希望も、どうかいたして、叶へさせても遣はさうと可成り苦心はいたして見たが、何事も心にまかせず、其方に、滿足を與へられなかつたのは、拙者の無力が、いたす所ぢや、其方の氣性としてはそれを、もどかしくも思つたであらうが、永い間の習はしで、何分にも考へ通りに運ばなかつた。此上に、希望ある其方を、引留めることはいたさぬから、隨意にいたしてよからう』

『左樣の仰せでは、却て恐縮いたします、決して御高志に背いて、斯樣の事を、願ひ出でました次第ではありませぬ。いづくの端へ、まゐりませうとも、必ず音信はいたしまして、今日までの御高恩に、酬ゐますつもりで居ります』

『其方の心は、よく知つて居る。また、斯樣な考へになつたことも、拙者には、よく解つて居る。決して懸念なく、出かけるがよい』

どこ迄も、溫情を有つて、やさしくいはれる丈け、德内は、辛く思つたが、今は、覺悟を飜へす氣にもなれず、此人の恩に酬ゆる道は、自ら他にもある、と考へて、德内は、いよ〳〵甘利の手から、離れる事になつた。

『これは僅少ながら、餞別のしるしぢや』

と、いくらかの金包みを、德内の前へ出した。重ね〴〵の厚意は、涙の外に、感謝の辭も、出ぬ位であつた。

『長い間、御世話をいたゞいて、何一つ御報恩も仕らず、我儘に立去るものに對し、お叱言もないのみか、重ねての御厚意は、何と御禮の申しやうも、ありませぬ』

『イヤ、それほどの事ではない。ほんの寸志ぢや』

『有難く頂戴いたします』

『行く先きは、知らぬ他國で、未だ見ぬ人ばかりぢや。ずゐぶん心して行くがよい』

『はツ、それでは御機嫌宜しう』

『これで、別れる』

慈父に、別れる思ひして、德内は、甘利の屋敷を出た。此旅行を機會に、大江戸の繁昌を見よう、と、先づ、江戸を志した。

どこの藩士といふ肩書もなければ、また扶持に離れた、浪人といふのでもなく、百姓の子が、大小帶して、侍らしい姿をして居るといふ丈の事である。それでも、德内の身になると、一廉の武士になつた氣がして、何となく心嬉しいのであつた。

此遍歷は、三年餘りであつた。その間に、少なからぬ修業も遂げ、立派な侍として、世に立つ實力は有つたけれど、家門なき百姓の子といふことが、いつも妨げをなして、思ふやうに、身を起す事は出來なかつた。

どことといふ當もなく、めぐり歩くうちに、再び仙臺の地を、ふむ事になつた。

すぐに、甘利を尋ねると、これは又意外千萬、甘利は、昨冬、此世を逝つた、と聞いて、驚くこと一方ならず、遺族に逢ふて、以前の恩を謝し、墓前に行つて、故人の靈を弔ふた。此時、德内の感慨はさぞ深いものがあつたらう。

九

久振で、故郷の最上へ歸つた。

例のはね屋を訪ねると、父は、未だ丈夫で、よく働いて居た。はね屋の主人も、德内の姿が見違へるばかり立派になつて居るので、只だ其れ丈けを見て、嬉しさが先であつた。

『お前さんも、よく達者で居て下された。而も、立派な侍姿。わしは、それを見た丈けで、すつかり嬉しくなつち

まつたよ』

『親分には、昔から一と通りならず、御厄介をかけて相すまぬ。殊に、斯うして父親までが御世話になり、眞身も及ばぬ御親切は、何と御禮を申す可き辭もない。此上とも、何分お願ひ申上げる』

『そんなことは、さう氣にかけないでも宜しい。親の無いわしの事だから、この上ともに、老爺さんの面倒は見てやる。それよりも、お前さんの出世が、第一だよ』

『まことに恥かしい次第で御座る。斯うして、故郷の土をふむにも、侍らしい貫錄は、何一つ持たず、只だ大小帶して居る、といふ丈けの案山子も同樣、その上に、未だ身の落ちつきもない始末で、すぐにも旅をしなければならぬ、といふのは、親分に對して、何とも相すまぬ次第、どうかゆるして下さい』

はね屋の主人は、只だ涙を拭ふばかりであつた。嬉しくて出る涙か、それとも、悲しくて出る涙か、留め度もなく出る涙を、どうしても、抑へ切れなかつた。

『父上、どうぞゆるして下さい。まだ私の身が定まらないので、一二年は、旅をつゞけることになりませう。萬事は、親方に賴んでありますから、私の音便を、待つて下さるやう、ひとへに願ひます』

『ア、、いゝとも、わしの事なんぞ、心配するには及ばない。お前さへ、出世の出來る事なら、わしはどんな苦勞も平氣だよ。それに親方さんが、わしを、よくいたはつて下さるから、わしはすつかり安心して居るだ』

やがて、酒肴が出た。

一問一答、諸國遍歷中、面白い話に、はね屋も、父も、喜んで聞き入るのであつた。

七日餘り居て、それから德内は、再び旅の人となつた。

此處は、津輕領の靑森、未だ其頃は、やうやく漁村に、毛の生へた位にすぎぬ、貧弱な土地であつた。

函館へ渡るには、たとへ風波は荒くとも、此處からする外なく、鰺寳から來る船の大半も、此處へ着く、といふ爲めに、それを宛込んでの商店も少しは在り、旅宿も幾軒か在つて、荷物船の出入には、存外の賑はひを見せて居た。

『且那樣、また風で御座います』

『やうやく凪になつて、喜ぶ間もなく、また吹き出すとは、何といふ事だらう』

『今年は、風廻はりが惡い、とでもいふのでせう』

『まア、そんな事でもいつて、あきらめる外はあるまいよ、ハツハ、、、、、』

松前の海產商としては、可成り人にも知られた、渡島屋五作と、從者の源助が、斯うして話込んで居た。その隣り座敷に、昨日から泊つて居る、一人の侍は、これも風待ちの人らしく、渡島屋主從の話を、聞いて居るうちに、すツと立上つて、廊下へ出ると、障子の外から聲をかけた。

『渡島屋の御主人に、ちと御意を得度い』

『ハイ、どなた樣ですか』

『隣り座敷の浪人者で、御座る』

『えツ』

忌な奴に聲をかけられて、迷惑とは、思つても、此處では居留守も使へず、源助に目配りをしたから、源助は、委細を心得て、しづかに障子を開けた。

『何ぞ、御用で……』

『餘りの徒然に、ちよいと御意を得たい』

『主人は、只今……』

『イヤ、決して御心配のものではない。只だ御目にかゝつて、松前の事を、少しお尋ねいたしたいのぢや』
『へへ、、左樣で……』
源助には、斷わり切れなかつた。
渡島屋は、立つて來て、
『さア、どうぞお通り下さいませ』
『ヤツ、ゆるして下さい』
ずツと、座敷へ通つてから、
『拙者は、最上德内と申すもの、お見知り置かれたい』
『これは〳〵、申遲れまして、わたくしは、渡島屋五作と申します、つまらない商人で御座います』
これで、しばらくは無言、互ひに手持無沙汰の態であつた。

德内の蝦夷入

一

幕末の頃は、どこへ行つても、浪人が、跋扈跳梁して、良民を虐めたので、浪人とさへ見れば、善良の町人は、先づ敬遠する、といふ風になつて居た。
渡島屋も、德内を、初めて見た時は、惡い奴に見込まれた、と思つたに違ひない。成可くは面會もしたくなかつたのだが、どうしても、逢はねばならぬやうになつて、さて話をして見ると、思つたほどに惡い人でもない、と判つたから、少しは安心したが、それでも猶ほ、幾分の警戒はして居た。
『拙者は、かねて蝦夷地へ渡つて見たい、と永い間考へて居たが、その機會を得ずに、空しくして居た次第で御座る。然るに昨日來、隣座敷に泊り合せ、貴下の容子を見て、急に思ひつく所があり、拙者の心中を打明け、御一考を願ひ度く、押付けがましくも、面會を申入れた次第で御座るが、拙者を、彼の地へ、お連れ下さることは出來ませいか』
突然の事で、渡島屋も、ちよツと返辭に苦しんだ。
『貴下は、松前の海産商と承知いたすが、左樣で御座らうな』
『仰せの通り、海産物を商なふて、居るもので御座います』

『渡島屋五作殿といへば、拙者の故郷、最上に迄、聞えた御方、貴下の御助力を得れば、蝦夷地の探險も、さまで困難であるまい。ぜひ御承知を願ひたい』

『……』

『あまりに突然の儀で、御不審も御座らうが、決して怪しい者では御座らぬ』

と、いつて、懐裡から金財布を出して、渡島屋の前へ置いた。

『僅少なれども、使ひ殘りの金子、これはお預け申す。猶ほお疑ひも御座らば、此大小も差出して宜しい』

『ちよツと、おまち下さいませ』

と、徳内を、抑へて置いて、

『これには、深い仔細があるやうに、失禮ながらお察しいたしますが、その次第を、くはしくお語り下さることは、出來ますまいか』

『何も、彼も、打明けて語らう』

『徳内は、生れてから今日に至る迄の事情を、くはしく物語つた。

『ははア、さうした譯で御座いますか』

『渡島屋殿、百姓の子に生れたものは、一人前の侍になることさへ、斯樣に、面倒なもので御座る。それに引換へて、貴下のやうに、幸福なお方も、御座るのぢや』

『私なぞは、果敢ない町人の身の上、ほんの海の仕事に、明け暮れ、苦勞をいたし居る丈けの事で御座います』

『それが羨ましいのぢや。ぜひ福山へ、おつれ下さい』

『あなたは、何を爲さらうと考へて、私のやうな町人へ、おすがりなさる』

『貴下の持船に乗つて、蝦夷地の奥深く、はいつて見たいのぢや』

『船に、乗れますか』

『乘る』

『見渡す限り、陸地も見えぬ大海原、その眞ツ只中へ、小さい船で乘出せば、風雨の難もあり勝で、ずゐぶん苦しいものですが、それでも、宜しう御座いますか』

『覺悟の上で、御座る』

『それほどの苦しみを堪へても、要が、海産商のことでありますから、どうせ碌な儲けにはなりませぬが、それも、宜しう御座いますか』

『いかに窮すればとて、利益の多少で、爭ひは起さぬ』

『併し、あなた樣のお話によりますれば、お國元には、未だ親御も御座るとやら、そのおくらし丈けは、私の方から仕送りをいたしますゆゑ、御心配下さるな。海の上の仕事とて、どういふ不時の災難が、ないとも限りませぬ。左樣な場合には、渡島屋の暖簾にかけて、お引受けいたしませう』

『それは忝けない。その保證さへあれば、萬里の荒浪を乘切つて、目ざましい働きを、いたして見せる』

『幸ひ、近日のうちに、新造の船卸し、二百石ばかりの小さい船ではありますが、國後島へ、初の航海、この船長を願ひませう』

『ふふーむ』

人生知己に感ず、といふ諺がある。今逢ふて話したばかりであるのに、どこへ見込みをつけたか、是れ迄に、信用を置いてくれる、その一言は、徳内の身に取つて、どれほど嬉しいか判らない。

同じ海産商でも、よほど太ツ腹の人であるに違ひない、斯ういふ男の爲めになら、働き榮もあるであらうし、これから先き、いかなる相談も出來る、と思つて、徳内は、心から喜んだ。

『何事も不馴れのものゆゑ、宜しくお引廻しを願ふ』

『船のことについては、松前へ着いてから、くはしく申上げませう』

『然る可く、御教示を、願ひたい』

『お侍の姿では、渡航が面倒でありますから、失禮ながら私の從者として、お連れいたしますから、お承知下さい』

『萬事は、宜しく』

相談は極まつた。徳内の蝦夷行きは、斯うした事情からであつた。

二

渡島六郡のうちに、松前郡といふのが在る。北は、檜山、上磯の二郡に聯なり、東西南の三面は、全く海に、臨んで居る。

福山町は、昔の松前であつて、上及部、大澤、荒谷、炭燒澤、吉岡、福島、赤神、札前、根部田、茂原、雨垂石、原口、江良、清部の十四ケ村を以て成り、山岳多くして、耕地は、極めて少なく、沿岸は、到る處、絶壁をなして、岬角多き爲め、松前十二岬の稱へがある位だ。

白神、矢越、玄島、女郎、立待、二越、元前等の岬は、最も名を知られて居る。函館よりすれば、尻内川に沿ふて濱中を經、松前に行くを、順路としてあつた。

今の松前郡は、津輕、福島の二郡を、併せたものであるから、昔の松前郡よりは、よほど廣い譯である。

傳説に依れば、蝦夷人の謂ゆる、マトマイといふ詞の轉化したものが、松前である、といはれて居るが、マトマイとは、婦人が居る所といふのであつて、大松前町に、蝦夷人の妻妾が、多く居た爲めに、起つた稱へだ、といふことである。

函館から江差へ、海路を取るものは、先づ此地に寄る所から、頗る賑はつたのであるが、土地のものは、多く漁業に從事して、富商と稱するものゝ大概は、漁場の持主、又は、網持といはれるものであつた。

明治の前は、松前三千軒といはれて、蝦夷唯一の都會であつたが、開拓使廳の設けられてからは、函館へ、繁昌の株を奪はれて、札幌小樽の方へ、移るものも多くなつたので、昨今は、人口も著しく減つたのである。

福山といふのは、元は城の名で、慶長五年の頃、蠣崎慶廣が城主となつて、松前を姓とした所から、福山が、城名となり且地名になつたのである。

蝦夷行記には、斯ういふことが、載つて居る。

『松前と蝦夷は一國にて、松前領六十里、關所ありて、蝦夷地へ、往來を禁ず、城下は海邊にて、後に山を負ひ、東西一里ばかり、家續きにて、南北狹し。

城は柵にて、櫓二つあり。大手口の兩邊に、家臣の第宅あり。武士は、豊かにしてせはしからず、國法ゆるやかなれば罪科も、國を追拂ふまでにて、死罪に及ぶことなし。是によりて、近年は邪曲のもの入込、騒動の事もありて土地のもの迷惑す。

城下の商賣は、殘らず他國人にて、江州の大溝、八幡、薩摩、また、加賀、能登、出羽のものも多し。百姓は、松前産、又は南部、津輕の者も半あり、而も百姓の業、田作をせずして、唯鯡をとりて、十五の一を運上し、餘分を以て衣食とす。是松前中の收納物なり、誠に天下一の大獵なり、さればこそ、此鯡をこやしに用ふる、國々（奥羽、北國は用ひず）一同なれ。此魚の來る、凡そ二十日程の内に、三度獵すれば、翌年までの渡世ゆたかに濟ますとぞ。

蝦夷地數百里の海岸は、領主持の場所の外は、殘らず家臣に割渡され知行とす。故に尺地も餘すところなし。商人專ら場所を請負て、運上を城下へ入れ、場所の得物を、船にて諸國へ廻すを業とす、皆旅商人なり。

此運上金、即ち武家の知行收納物なれば、松前に、田畑積りの知行なし。米は、津輕、秋田、酒田より入津す。領主は、四千五百俵御買上、其他は相對にて買取、下賤の者まで米を用ひ、他の糧あるを知らず、鹽、茶まで買入澤山なり、敦賀へは、順風六七日に着船する故に、思の外に、京都の風俗まじり、江戸へは、通船少なき故に、却りて遠くおもへり』

千島志料、蝦夷秘鑑にも、面白き事が載せて在る。

『松前の町人、古來、土人と交易して、利を營むに、先づ地頭へ、蝦夷ともを介抱いたしたき旨訴訟し、やがて運上金の多少を擇まれて、請負を許容あるなり。町人、其介抱場所へ、米酒などを我土産とし、其外品々を、大船に積んで送り、土人の取置ける物と交易いたし、其船にて松前へかへり、亦之を諸國へ賣拂ひ、金銀にするなり。介抱とは、實は交易の業なり』

猶う一つ、蝦夷草紙の拔書をしよう。

『松前と箱館とエサシ、松前地に於て、三個の湊なり。諸國の商船輻輳して、艫をならべ碇をおろして宿る處也。此三ケ所ともに、沖を堅むる口番所とて、諸國の廻船を糺明す。凡そ船入津すれば、有司之に臨み、道心、遊僧武士、廻國體のものは、決して上陸を許さず、此外、藝者諸職人等、松前地に好みなければ徘徊をゆるさず、他國者の入込居るは、獵業雇の日かせぎばかりにて、それも松前に越年すれば、越年役といふ事有て、改めて課役錢一貫二百文を出させ、又正月より五月まで、蝦夷松前地に、稼ぎ居るものは、半役とて六百文の課錢を出さするなり。六月より以後は、他國の人を拂ふ事、定法也。六月より末、秋冬は、獵漁の稼も不定なれば、無益の人滯留すれば、國窪を費して惡しといひ、百姓家の繁殖するを、嚴しく停止し、毎年觸渡せども、兎角に百姓家數も增殖するゆゑに、米穀の價も高直になり、止む事なきよし有司の邊より承りき』

二

蝦夷へ對して、深い注意を有つやうになつたのは、幕府の中期からで、その以前に於ては、餘り注意はして居なかつた。

汽船の便を知らず、風波の難の多い、といはれた、北海の往復は、容易な事でなかつた。福山の城下にこそ、松前家の城廓もあり、小さい乍ら、町らしい臭もして居たが、それから進んで、少し奥へ行けば、蝦夷土人の勢力範圍であつたから、内地人の居住には、甚だ不適當であるのみならず、多少の冒險は、覺悟して行くにしても、奥行の知れぬ、森林を伐りひらき、一畝の耕地すら無い所へ、住む家を設けることは、決して易しい事ではなく、假りに家は出來たとして、食物は、どういふことになるか、殊に、土人との折合も、相當に面倒なものであつて、一つ間違へば、生命を捨ることになるのだ。

それ等のことを考へて、猶且つ行かう、とするには、よほど大きい慾を有つたものか、或ほ役目の上、止むを得ない、といつたやうな人でなければ、いかに生活の爲めでも、容易に行けるものではなかつた。

さうした事情の爲めに、幕府の方でも、長い間、松前家に、支配權を與へて、萬事を、一任して置いたのであらう。之れが爲めに、うまいことをして居たものは、獨り松前家であつた。海上から取れる、無限の産物を、自分の收入として居たのであるから、武鑑の上では、無高としてあつても、その實は、十萬石以上の收穫があり、而かも、他の大名の如く、つまらぬ交際費も要からず、浮世放れのした月日を、すまして送る事が、出來て居たのである。

どこの大名でも、他領のものが、多くはいつて來ることは、ひどく嫌つたが、その點から見ても、松前は、天險の取締りがあつて、人爲の見張りに、多くの手數を必要とせず、頗る好都合であつた。

從つて、隣國との交渉もなく、何時侵されると、いふ恐れもなかつた。唯だ他國から、入込んで來るものに、いた

づらを、される事さへ防いだら、それでよかつたのである。從つて、士籍に在るものが、入込んで來ることは禁物で、その取締丈けは、嚴しく行はれた。

渡島屋五作は、大きい漁場の二ケ所も有つて、その上に、松前家の漁場まで、預つて居たから、藩との關係も深く、役方のものとは、殊に親しかつた。

福山の城下へ行けば、五作の向ふを張つて、いかに商賣をしよう、としても、それは、無駄な事である、といはれたほどに、その勢力は、認められて居るばかりでなく、大きい資本を、有つて居る點からいふても、一二を爭ふほどの財産であつた。

投げ出された財布は、德内へ返へし、大小は預つて、荷物のうちへ秘して、どこまでも、五作に使はれる、店員の一人として、德内の名は、其儘にして置いたが、頭髮も、すつかり結ひ直し、衣服も、町人らしいものに變へて、船へ乘込む時分には、全く見違へるほど、その風采は、只の町人といふても、疑ふものゝないやうになつた。

大きい荷主の旦那だ、といふので、船に乘つてからも、待遇は、非常に良かつた。從いて居るものにも、その影響はあつた。

風向きの惡い爲めに、航海は、少し遲れて、三日目に、福山の港へはいつた。

口番所の調べをうけてから、港内へはいるやうに、なつて居た。昨今の航海でも、それと同じやうに、港の繫留所から、一里位ゐの沖合で、稅關のランチや、衞生掛りの役人を載せた船を、待合せるやうになつて居るが、調べの性質や方法に、多少の違ひはあつても、入港の手續きは、昔も今も變らない。

『オー、渡島屋か』

と、聲をかけたのは、番所の取締をして居る、役人等であつた。

『ヘイ、只今戻りました』

『今度は、大分長かつたやうだが、しツかり儲かつたか』

『どういたしまして、碌な用事もなかつたのですが、毎日の風都合が惡く、つい歸りも遲れましたやうな譯で、儲けどころの話では御座いません』

『町のものも、待つて居るやうであつたが、相變らず土産物も、澤山の事であらう』

『少しばかり持つてまゐりましたが、あなたさまのは、おやしきの方へ、お屆けいたして置きませう』

『イヤ、それは毎時ながら、氣の毒だな』

役人は、不圖眼を外らして、五作の背後に居る、德内を見付けたのである。

『那のものは……』

『私の店のもので御座います』

『あまり見馴れぬものだが、いつ頃から居るのか』

『新らしく雇入れたもので御座います』

四

口番所の松村權平といふたら、評判の難物で、此奴に、睨まれたが最後、容易に見遁してはくれぬ。熊よりも恐ろしいのが、權平旦那だ、といはれたほどである。

平生から、餌を與へてあるから、一時はギョツとしたが、五作の胸のうちでは、他の人ほど、困つては居ないが、それにしても、役目の上で、斯ういふ風に出られては、一と通りの辯解は、爲る必要があつた。

『旅先から、連れては參りましたが、元は、私の遠緣のもので御座いますが、いづれ御番所の方へは、それ〴〵に御屆けもいたしまして、漁場御掛りの旦那樣へも、私が、同道の上で、御挨拶をいたさせるつもりで御座います』

『なる程、それは、能く相解つたが、一應は、御禁制の次第もあるから、取調べをいたす』

何時の間にか、手代の源助は、權平の背後へ廻つて、

『オヤ、旦那の御袴が……』

と、いつて、袴の腰板へ、手をかけ乍ら、紙包みを、腰板と帶の間へ、そつと挾み込んだ。

『お尋ねの儀は……』

『いづれ、後刻といたさう』

『はツ』

『名は、徳内と申したな』

『左樣で御座います』

權平は、他のものを、しらべはじめた。その間に、五作と徳内は、持荷の傍へ引取つた。徳内は、此始末を見て居たので、心のうちに憤慨した。

『先生、いかゞです、ひどいものでせう』

『只だ、驚き入つた』

『私どもは、こんなことで年中、苦勞をいたして居るのです』

『お察し申す』

『徳川樣の御政治は、袖の下を使はなければ、どうしても通れません』

『併し、今日は、袖の下でなく、袴の下でしたな、ハツハ、、、、、』

番所のしらべがすむと、船は、灣内へはいり、陸に近付いて、錨を下ろした。すぐ艀に移つて、棧橋へ漕寄せる。渡島屋の風人夫は、多く棧橋へ集まつて、主人を迎へた。源助と徳内は、その跡から續いた。

流石に、評判の渡島屋丈けあつて、派手な家構へではないが、しつとりと落付きのある、奥深い建物であつた。風雨のはげしい土地であるから、屋根は、低く組まれて、窓も少く、何となく陰鬱な氣分はあるが、大家らしい趣は、隨分に現れて居た。

徳内の興へられた一室は、中庭を前にして、割合に、光線も通つて、晴々しい氣分のする、良い座敷であつた。

五作は、役所廻りや、役人の御馳走に忙しく、三四日といふものは、殆んど徳内と、顔を會はす間もなかつた。

『先生、いかゞです』

と、いつて、五作は、廊下から聲をかけた。初めは、食詰もの〻浪人位に、低く視て居たが、よく話込んで見ると、却々しつかりした所もある、存外に學問も深く、百姓の家に生れて、これ迄に仕上げで來た丈けあつて、浮世の苦勞は積んで居るし、用ひやうに依つては、大に役立つ男だ、といふ見込みもついたので、世間體は『徳内さん』で通しても、對座の時は、『先生』と呼んで居た。

『目の廻るほどの忙しさで、一つ家に居り乍ら、すつかり御無沙汰になりました』

『拙者は、御當家へまゐつてから感心いたした。これ丈けの家を構へて、多くの人を使ふ身分になれば、此苦しみに堪へる覺悟がなければならぬ。お骨の折れることぢや、と思つて、深くお察しいたす、と同時に、あなたの氣力には、驚き入りました』

『他人さまが御覽になつたら、莫迦々々しく思はれる事でせうが、私の商賣は、何しろ役所を、對手にいたすのですから、その方の附合が、ナカ〳〵面倒なのです』

『自身を殺してかゝるのだから、ずゐぶん骨が折れませう』

『それを、資本と心得て居りますから、左迄に、苦勞とも思ひませぬが、時としては、厭になることもあります』

『左樣でせう』

五作は、聲をひそめて、

『時に、先生の事を、重役の一人に、實は打明けて置きました』

『口番所の役人へ、申出たのと違つては、御迷惑になりませぬか』

『それが爲めに、打明けて置いたのです』

『どういふ、理由ですか』

其處で、五作は、膝を進めた。

五

『口番所は、無事に通つても、彼の松村權平といふ人が、存外の腹黒で、どんなことを爲るか判りませんから、そこで、捨石丈けは入れて置かないと、他日の面倒も起らう、と存じて、昨夜は、番所の役頭と、訴訟取扱の役人方へ、先生の素性を打明けて、今後は、私の手代又は相談役として、召使ふ旨を、申上げて置きましたから、此上は、御安心下さるやう、願ひ度い』

『松村といふ役人は、左樣に悪い奴かな』

『悪いといふほどの人ではありませんが、只だ慾の深い人で、いつも餘計な金を、絞り上げられて困るのです。尤も其れは、私ばかりといふのでなく、町の物持ちは、皆な左樣なのですから、あきらめはよい譯で御座います』

『併し、怪しからぬ事ですな。泰平が、長く續いて、内地の方でも、各藩ともに、左樣した傾きはあるが、この邊までがそれでは、下々のものは、さぞ困ることでせう』

『その代り、また都合のよい事もあります』

『どういふ事について……』

『面倒な事は、金で片付くのですから、筋を通して、理窟をいひ張られるよりは、却つて都合はよいのです、ハツハヽヽヽヽ』

『武家の政治も、そこ迄になれば、もう終末に近づいたやうなものだ』

德内の憤慨するほどに、五作は、重く視て居ないらしい。資本家といふものは、何時も左樣した氣分で、天下の事は、金さへ出せば濟むものと、心得て居る。

『そんなことよりは、もつと困つたことがあるのです』

『そりや、何事で御座るか』

『船の出來上りが、存外に遲れて、もう二た月位は要かる、と思ひますが、これには困りました』

『出來ぬものは、止むを得ないでせう』

『それ迄、先生を、空しく待たせて置くことが、いかにも、お氣の毒でなりませぬ』

『イヤ、その御配慮には及びませぬ。拙者は、その間に思ふさま、地理の取調べでも、いたすことにしよう』

『さう願へれば、此上もない事で、役所の方の地圖も、こつそり借りてまゐりませうから、ゆるりと調べて、おいて下さい』

『國後島までは三百里、あまり近いとはいへぬ。初めての海上乘切りである以上、充分の支度も要るで御座らうから、却て船のおくれたのは、幸であるかも知れぬ』

『まア、左樣考へれば、そんなものでせう』

所へ、例の源助が、やつて來た。

『原田の旦那が、見えました』

『オー、左樣か』

『どの御座敷へ、お通しいたしませうか』
『離れがよいだらう』
『承知いたしました』
源助は、すぐ引返した。
『先生、丁度よい機會ですから、あなたも、一度お逢ひ下さい』
『原田といふ人は……』
『漁場掛りの頭で御座います。先生が、船長と極まれば、どうせ一度は、逢ふことになるのですから、今から逢つて置く方が、よいでせう』
『どういふ性質の人物かな』
『この御方は、學者肌の立派な御人物です』
『さういふ人には、こちらから進んでも、逢つて見たい』
『それでは、私が、とに角、お目にかゝりまして、先生の事を申上げてから、迎ひをよこすことにいたしませう』
『どうか、左樣願ひ度い』
五作は、これから、離れ座敷へ行つた。
今、訪ねて來た原田は、名を惣兵衞といふて、五代つづいて世襲的に、漁場の掛りをして居るので、表面の知行は、あまり多くもないが、存外に内福で、生活のゆつたりして居る所から、讀書に凝つて、藩中では、屈指の物識であつた。
内地に、志を得ずして、蝦夷へ、乘込んで來た、德内は、非常な決心を以て、國後行きの船に乘る可く、松前へ來たのだが、彼の胸は、五作に語らずにあるから、その辭の如く、思ふさまに、見えない、と、考へて居たが、それよりも、自分は、蝦夷人の頭

持つて居た。
蝦夷の奥地を究める、といふことが、日本の爲めにもなる、と考へては居たが、それよりも、自分は、蝦夷人の頭になつて、北門の堅めを引受け、松前家の如き、地位を得たならば、内地に居て、只の侍で、一生を送るよりは、頗る意義のある事だ、と、深く思ひ込んで居たのである。
其志の一端は、船の中で、五作にも漏したが、幸ひに、五作は、それを受け入れてくれたから、船長たることも、進んで引受けたのであつた。

六

『一見如舊』といふことがある。德内と原田は、初對面から打解けて、語り合ふた。その後は、毎日のやうに德内は、原田を訪ふて、蝦夷の奥地に就て、大に研究することを得た。
内地と違つて、此邊りの侍は、強い刺戟をうけないから、何事にも遲れ勝ちで、文武にすぐれたものは、多く居ないが、それでも修業の道丈けは、開けて居るから、道場には、竹刀の音も聞え、藩校にひとしい塾もあつて、咿唔の聲は、外へ洩れることもある。
道場破りの修業者は、絶えて來ないから、師範役も、頗る氣樂にはして居るが、飛放れて技のすぐれた、門人は、さらに無かつた。讀書の方は、割合に進んで居て、相當に力を有つものは、可成りに在り、そのうちに於て、原田は、殊に篤學の士であつた。
蝦夷の鎭臺として、長い年月を、送つて居た丈けに、松前家の記錄には、探險の參考となる可き書類は、澤山にあつた。
德内は、それ等の書類に依つて、詳細のしらべを、なし得たのである。之れは偏に、原田の厚意からであつた。

今日も、原田の書齋に居て、しきりに調査して居ると、原田は、すぐれぬ顔付きをして、しづかにはいつて來た。

『オー、お歸りか』

『只今、歸りました』

原田は、座に着いたが、何の詞もなく、その儘默つて居た。

『どうかなされたか』

『否、別に……』

『併し、お顔色がよくない』

『……』

『實に顔色ばかりでなく、すべての御容子が、平生と異つて居る。どうなされた』

德内から、再度訊かれて、原田は、やうやく口を開いた。

『實は、弱つた事が出來たのぢや』

『それは、何事ですか』

『君は、渡島屋の手代等に、劍術を、指南して居られるか』

『えッ』

『匿さずお話し下さい』

『指南といふほどのことではないが、渡島屋の若者等は、徒然の餘り敎へてくれ、といふので、先日から竹刀を、取つて居ります』

『何故、左樣いふ事をなさる』

『惡い』

『ははア、惡いのですか』

惡いといふ理由が、德内には解らないらしく、不審の態であつた。

『城下には、道場がある。町家のものは自儘に、劍術指南は出來ぬ事になつて、居るのぢや』

『劍術指南といふほどの事でなく、只だ初めは、書物を敎へて居たのぢやが、不圖したことから、劍術の事になり、それから一同の希望で、一と手、二た手の敎はいたしたが、荷物庫の内で、ほんの店のもの丈け集つての事ゆゑ、別に差支へはない、と思つて居たのぢや』

『それを、大袈裟に、密訴いたしたものがあつて、而も、貴殿と拙者が、斯く親しい事まで、書込んであつた所から本日は重役の前にて、ひどく戒められ、頗る弱つたのぢや』

『それは、さぞ御迷惑であつたらう』

『未だ其ればかりでなく、御抱への指南役から、貴殿との試合を、望んで來たのぢやが、之れには、重役の一二も同意して、猶ほ拙者へ、その事を申付けられて、只今立ち歸つた所で御座る』

餘りに、莫迦々々しい事であるから、德内は、ぢつと考へ込んだ。

『これには、何か仔細があるらしく思はれる。お心當りはありませぬか』

『拙者の失策を申立てゝ、御役御免を願ひ出させるが爲めと考へて居る』

『そりや、何故で御座る』

『漁場の取締は、拙者の祖父より、打ちつゞいての役目で御座るが、それを希望して居る、二三のものは、何かにつけて拙者へ、つらく當るのであつたが、此たびの事も、大概は其れが爲めであらう』

『貴殿に、試合を申込んで、萬一にも失敗いたしたら、それを口實に、何事か、たくらむといふなら、或は左樣した

事もあらうか、と思へるが、拙者と試合をいたしたのでは、勝負ともに貴殿へ、何のさはりも起るまいが、どういふ次第ぢやらう』

『たくみの筋道が、立つ立たぬといふのではない。何でもよいから、拙者の手落ちを、といふのぢやらう』

『町家のうちで、劍術の指南と申した所で、それ等の事は、申披きも出來るが、併し、貴殿の御迷惑とあつては、何とも相すまぬ次第ぢや』

『試合には、出て下さるか』

『それは、何の事も御座らぬが、再び御迷惑をかけるやうになつては、いよ〳〵恐縮致すが……』

『事の結末は、いかゞ相ならうと、今では試合をする外に、いたし方は御座らぬ』

『宜しい、御引受けいたさう』

此時、五作が、やつて來た。

七

『渡島屋か』

『ヘイ』

『よく參つたな』

『只今、お役所からの戻りで御座います』

『左樣か』

徳内に向つて、

『蛇に蹈りました』

『劍術稽古の一條か』

『左樣で御座います』

『いかましいことを、いふて居たかな』

『ひどく、お叱りをうけましたので、お詫をいたしてもらひました』

『何といふて、叱られたか』

『私は、ほんの店の若い者が、面白半分に、やつて居たことで、いはゞ戯れにも、ひとしい事でありますから、別に差支へはないものと、存じて居りましたが、お役所の方では、店の若い者丈けならよいが、そのうちに浪人がはいつて教へるのが、甚だ宜しくない、との仰せでありますから、徳内は、私方の雇人でありまして、元は、どういふ身分でも、只今では、渡島屋の手代の一人で御座います、と申上げましたる處、それが、宜しくないのぢや、浪人が身分をかくして町家に立入り、劍術の師範を致すのは、甚だ以て怪しからぬ、と斯樣に仰せがありまして、つまりは、私も、お役所と爭ふことは、なりませず、お詫をいたして歸りましたのですが、原田樣、これはどういふことになりませうか』

始終を聞いて、原田は、太い息を吐いた。

『どうも、困つたことになつたのは、師範役が、徳内殿と試合をいたしたい、と申出られて、重役は、それを許されたので、只今、徳内殿に、相談いたした處、心よく承知された所ぢや』

『へー、それでは試合をなさるので御座いますか』

『辭退いたしては、却て原田殿に、御迷惑もかゝらうと、存じて、承知いたした』

『どういふ理由で、さういふことになつたのでせうか、私には、少しも解りませぬ』

原田は、笑ひ乍ら、

『徳内殿が、試合に打ち負けたら、未塾の腕前を以て怪しからぬ、直ちに當所を立退け、とでもいふのぢやらう』
『もし、徳内樣が、勝つた時はどういふ事になまりせうか』
『その時は、拙者から願つて、御召抱へに相成るやういたすつもりぢや』
『左樣いふことになれば、結構でありますが』
『それは大丈夫、拙者が引受ける』
五作は、徳内に向つて、
『先生は、どう御考へになりますか』
『勝負の見込か』
『へー』
『師範役の技倆を見ぬから、はつきりいへぬが、大概は負けぬつもりぢや』
斯ういふ以上、徳内には、確信があるのだらう。とも思はれる。殊に、徳内が、存外平氣で居るから、五作も、少しは安心した。
夜遲くなつて、徳内は、五作と共に、歸つて來た。翌朝は、原田が、重役に面會して、試合の御請をした。
此事は、忽ち家中の評判になつてどこへ行つても、その噂さで、持ち切るの有樣であつた。
いよ〳〵重役、河原仁左衞門方で、試合を爲る事になり、當日は、それ〴〵に傳手を求めて、參觀に來るものも多く、殿樣も、お忍びで來られる事になつたから、武術に勵んで居るものは、非常に緊張した氣分で、續々集まつて來た。
師範役は、大川軍之丞といふ人で、一刀流を、よく使つたが、何しろ鳥なき里の蝙蝠で、ナカ〳〵慢心して居たから、徳内の事を聞いて、自分から藩役へ、試合を願つて出たのである。

原田の役目、漁場の取締を、目がけて居たのは、佐久間平助といふものであつた。大川を煽りつけて、徳内を、打負かした後ちは、それに因緣をつけて、原田を押込めてしまはう、との考へから、此一と芝居をうつたのである。
徳内も、軍之丞も、ともに顏を合すのは、今日が始めてであつた。双方支度を整へ、東西の幌を擧げて、現れて出たのを、一同は、ぢつと見る。
徳内は、身長も五尺六寸近くあり、筋骨逞しく、容貌は、割合にやさしいが、眼の光りは、肱しいほどであつた。一見して、普通のものでない、とは知れた。軍之丞も、體格の方では、引けを取らない。修業も積んで居るから、充分の確信はあるらしい。
挨拶がすむと、双方は、竹刀を引いて、軍之丞は、上段に構へ、徳内は、下段を取つた。

八

最初は、徳内が、美事に小手を取つて、勝利を得た。その早技は、目にも留まらぬほどであつた。
二度目の試合には、相打で勝負なしとなつたが、どうも、徳内が、大川へ、花を持たせたやうに噂さするものもあつて、徳内の評判は、頗る良かつた。
渡島屋は、固よりいふ迄もなく、原田も、その噂を、耳にし乍ら、徳内のすぐれた技を、見て居るのであるから、その愉快は一と通りでない。
三度目の時には、大川の疲れが見えて、二三合するうちに、もう勝負の數は、大概のものに判つて居た。
『那の際に打込めば』と、思ふ人があつても、徳内は、さらに攻勢を取らず、努めて行司役が、制止の聲をかけるのを待つて居るらしかつた。
大川は、自分から申出た試合である丈けに、重い責任を、感じて居るので、飽迄も疲れをかくして、打込まう〳〵

として焦る。それを徳内は、ほどよく扱らつて、勝を取らうとしなかつた。
行司役になつて居た、小林孫太郎といふ人は、江戸の修業で、可成りに使へるから、兩人の呼吸がよく判る。
『しばらくッ』
と、聲をかけて、兩人の間へ、體を差込むやうにした。
徳内は、しづかに竹刀を置いた。大川も、息を切り乍ら、跡へさがつた。
『大川殿は、さすがに御師範役丈けあつて、立派な技倆を持たれるが、また徳内殿の腕前にも、驚き入つて御座る。此上の勝負は、必要も御座るまいから、此儘に、本日の試合は、中止いたしたい』
之れを聞いて、徳内は、輕く頭を下げたが、大川は、頬を膨らして、竹刀を突いた儘、立つて居る。
今迄、片唾を呑んで、見て居た重役は、いづれも、小林の裁に、感心の態であつた。
『それは、餘計な斟酌で御座る』
と、調子外れの聲で、怒鳴つた奴がある。一同の眼は、其奴の方へ集まつた。怒鳴つたものは佐久間平助であつた。
『武藝者が、互ひに覺悟して、試合をいたす以上、勝負を決けぬ、といふ法はない。小林氏の裁には、拙者、不服で御座る』
『然らば、いかがいたさう、との御所存か』
『もう一本、試合ふて然る可く存ずる』
小林は、此一言に、甚だ不快を感じたが、今は爭ふも、無益と考へた。
『大川殿、いかゞなさる』
『最後の試合、いかにも承知いたした』
小林は、さらに、徳内に向つて、

『足下は……』
と、訊ねた。
『大川先生には、とても及びませぬ。此儘、御勘辨を願ひ度い』
徳内の謙遜には、一同も感心したが、佐久間は、いよ〳〵莫迦の正體を現して、膝を乗り出した。
『小林氏、只今の一言で、勝負は決したも同樣、恐れ入つたとあれば、それで、宜しからう』
今度は、小林が承知しない。
『未だ勝負は、決いて居らぬゆゑ、此儘何となく、引分けるといふのなら宜しいが、佐久間殿の申さるゝ詞は、ちと妥當でない』
『何故か』
『技の上にては、徳内殿が、最初に、一本取つて御座るゆゑ、負けとは申されませぬ。從つて、大川殿の勝では御座らぬ』
『然らば、試合をつゞけて勝負を決けなさい』
事、茲に至つては、もはや致し方がないから、小林は、徳内に對して、
『御聞き及びの通りぢや。もう一本……』
さらに、大川に向つて、
『御異存は、御座らぬか』
と、尋ねた。
『勿論、望む所で御座る』
口では、立派に答へても、心のうちでは嘸ぞ、迷惑な事であつたらう。

試合は、再びはじまつた。

『エイ』

『ヤツ』

と、互に構へをつけた。

大川も、今は絶體絶命、眞に命懸けである。竹刀の先きに、全身の力がはいつた。

『やツ』

と、はげしく打ち込んで來た。

ポン〳〵と、二三合したかと思つたら、德内が、ふみ込んで、打ち下ろした。大川は、受け損じて、面を取られ、よろ〳〵として、倒れかゝつた所へ、飛び込んで來た德内が、大川の小手を取つて、支へてやつたから倒れなかつたが、大川の負けは、甚だ見苦しいことであつた。

技は、まさに段違ひである。

九

大川は、顏色を、土の如くして、すぐに姿をかくした。佐久間も、苦蟲を嚙み潰したやうな、不味面をして引退つた。

此日の試合は、今迄に行はれたのと違つて、よほど風變りの試合であり、見て居たものも、何の爲めの試合であるか、といふことを、知らぬものが多かつた。

殊に、殿樣までが忍びで、御覽になつて居られたのであるから、全體どうした譯か、と、疑ひを抱くものも、少なからずあつた。

『どうです、今日の試合は……』

『驚き入りました』

『那の德内といふ御仁は、どこのものか御承知か』

『よくは存ぜぬが、最上生れといふ丈けは、聞いて居ります』

『大した腕前ですなあ』

『まア、天下の名人でせうな』

『無性に強いものは、いくらでもあらうが、那の迫らざる態度が、いかにも立派でした』

『左樣々々、一本打ち込んで、二本目は相打にいたして、大川先生に、花を持たせた所は、よほど心得のある人物で只だ恐れ入りました』

『それを、出過ぎ者の佐久間が、何で那アいふことを、いひ出したのか、私等には、佐久間の所存が、どうしても解りかねる』

『佐久間には、平生から那アいふ調子があつて、まことに困り者であるが、今日のは、少し念入りでしたな』

『それにいたしても、大川先生が、三度目に辭退いたさなかつたのは、生涯の不覺で御座つた』

『併し、那の場合は、辭退もなるまい』

試合見物の歸りに、自分勝手な噂はするが、誰れ一人として、德内を非難するものはなく、渡島屋に居る、と聞いて、わざ〳〵訪ねてゆくものさへあつた。

德内と渡島屋は、志摩守から、内謁を仰付けられて、御前へ出た。只だ一通りの内謁ではあつたが、兩人は、頗る面目を施して、御前を退つて來た。

内謁は、重役一人と原田の案内で、德内の身の上は、原田から詳しく申上げて置いた。すぐ其場で、召抱へるとい

ふやうなことは、いはれなかつたけれど、結局は、そこへ落ち付くらしいので、徳内は、その點について、像め防禦線を、張つて置いた。

渡島屋へ、歸つて來ると、待ちうけて居る家中の侍が、五六人も居て、それから小宴が開かれた。

五作は、只だ嬉しいが先きで、何も考へて居なかつたが、徳内は、萬一にも召抱へる、といはれたら、どう申立てて辭退しようか、と、そればかりを、考へて居た。

大川の姿は、その晩のうちに、見えなくなつた。人の噂には、折柄の出船に、こつそり乘込んで、内地へ戻つた、といひ傳へられたが、いづれにしても、行方不明になつたことは、事實である。

三四日して、原田が、訪ねて來た。

『徳内先生、今日は御相談があつて、急ぎ推參いたしたのぢや』

『何御用ですか』

『御召抱への御使が、あるやうに思はれるが、先生は、どうなさる』

『御辭退申します』

『いかにいたしても、仕官は爲さらぬか』

『左樣』

『强ひて御沙汰が、あつても……』

『止むを得ざれば、當地を立退きます』

『堅い御決心ちやが、それには何か仔細が御座らう』

『實は、奥蝦夷の探險、それが望みで御座る』

『ふふーむ』

『當家の主人に縋つて、當地へ參つたのも、それが爲めで御座る』

所へ、五作が、はいつて來て、徳内の望みを果させるやうと原田へ、いろ〳〵と賴み込んだ。

そこで、原田は、とに角、重役へ先手をとつて、何事か願ひを出して置かう、となつた。

『何事も、繕ふて申上げるには及ぶまいから、近く出來いたす船の長として、奥蝦夷へ、探險にまゐる事を ぜひ許していたゞき度い。その目的を果した上は、御召抱への御沙汰にも應じませう』

と、徳内は、思ふたまゝを答へた。

之れについては、五作からも、懇々賴み込む。原田は、快く承知して歸つた。

斯うした事情から、徳内は、奥蝦夷の探險を許された。松前家の墨附き迄、貰つて行けるやうになれば、此上もなき都合で、徳内と、五作の喜びは、非常なものであつた。

決死の船出

一

鎖國令の爲めに、大船の製造は、堅く禁止されてある。航海業をするものゝ惱みは、此一事丈けでも、ずゐぶん大きかつたが、その上に、遠く海外へ乘出して、異國との交渉は、反逆以上に、視られて居たから、海國男子の魂を有つものは、只だ徒らに、壯志を抱いて、腕を扼して居るのであつた。

尤も、伊達、島津、黑田、鍋島、前田の如き、大きな諸侯は、密貿易の禁を犯して、海外へ、力を展して居たから、大船の製造も、行つて居たし、領内の富豪が、それ〴〵に密貿易を爲ることさへ、視て視ぬ振りはして居たのである。

その代り、幕府の眼が、ピカリと光れば、すぐに犧牲者を出して、表面の申譯は、爲る事になつて居た。

たとへば、錢屋五兵衞と、前田家の關係の如きは、その一例であるが、前田家が、錢屋へ手入れをして、國禁を犯した罪を數へて、極刑に處したのは、どう考へても、腑に落ちない點がある。

五兵衞といふ快男子が、あれ迄に海外へ、手を延ばして居たことを、前田家が、少しも知らずに居た、とは思へぬが、錢屋沒落の跡について視れば、前田家は、どこ迄も知らなかつたことに、なつて居るのだから、甚だ不思議であるのみならず、その財産の全部を、前田家へ、取上げてしまつたなぞは、惡辣な遣方であつて、前田家の財産の一半は、錢屋の財産であつた、ともいへる譯だ。

『泣く子と、地頭には、勝たれぬ』といふ、此諺は、武家時代の町人百姓が、いかに哀れなものであつたかを、證明し得て餘りある。

蝦夷の地は、いづれへ行くにしても、海を渡るを以て、最も便利としてあつたから、どうしても、造船の事は、もつと進んで居る可き筈であるが、此處にも、幕府の鎖國主義は、嚴重に行はれて、大船をつくることは、容易に許されなかつた。

五百石以下の船は、領主の許しを得て、自由につくり得たので、渡島屋は、小さい乍ら、造船所の如きものを、はやくから設けて置いた。

今度の船は、國後の端に迄、押渡らうといふのであるから、若し出來る事なら、思ひ切り、大きい船を、造つて見たい、と思つて、五作は、その掛りの役人へ、可成り運動をして見たが、やうやく二百石船を許されたにすぎなかつた。

けれども、造船監督の志田平造が、萬事を心得て、實際は、三百石に近い船をつくらせてくれたのである。

『先生、おはいり下さい』

五作は、席をゆづつて、德内を、上座へ招じた。

例の試合がすんでから、德内は、松前家の重役にも、よく知られて、家中の氣受けも、頗る良くなつて來た。

新造の船へ乘つて、國後へ行くのだ、といふことが、何時か判つて、一段と信用も加はり、それに援けるものさへ、そろ〳〵出て來るやうになつた。

今宵は、志田が、渡島屋へ來ることになつて、德内には、改めて面會する、といふのであつた。德内としては、豫ての目的が、心の儘に、運んで來たのであるから、非常に喜んで居る譯だ。

『種々と御配慮をうけて、拙者も、實に嬉しく思ふ。此上とも、然る可く願ひ度い』

『それは、私の方から、申上げることであります。あなたの御蔭を以ちまして、御役所の首尾もよく、町方の評判も大したもので、私は、その噂を聞くたびに、嬉しくてなりませぬ』

『而て、船の方は、どうなりましたか』

『もう出來上りましたが、只今は、外廻りのお化粧と、内部の繕ひばかりで、それがすめば、船下ろしといふことになりませう』

『思つたよりも、早く出來て、此上もないが、乘込の人數は、どういふ手配になつたか』

『何しろ、生命がけの事ですから、いくら海坊主のやうな船頭でも、二の足をふむものが多く、それには弱りました』

『水先案内に、しつかりしたものが一人あれば、跡は、どうでもよいやうなものだ』

『水先は、留藏といふものを抑へてありますから、それは御安心下さい』

『その外は……』

『善吉、政右衞門、平太郎なぞいふもので、總勢は十人、外にアイヌが一人加はりまして、人數も、略ぼ揃ひました』

『それ丈け居れば、もう充分だ』

話の半ばへ、志田が來た、との知らせがあつたから、兩人は、ひとしく席を放れた。

一

志田は、江戸の生れであるが、松前家には、譜代の家來であつた。歳は、既に五十路を越えて、謂ゆる老成の人物であつた。造船の監督といふのは、餘り上級の役ではないが、誰れでもよい、といふやうな、やさしい職務でもなかつた。

漁場取締の役に比べたら、よほど上級の方で、氣骨は折れるが、勞力をせずにすむから、可成りの歳まで、務まる譯だ。

渡島屋の新造船に就て、いろ〳〵の取沙汰はあつたが、志田が、すつかり呑込んで居たので、何の故障もなく、今日までの運びに、なつたのである。

五作は、志田の爲人を信じ、殊に、このたびの取扱ひは、五作をして、深く感激せしむるほど、志田は、親切な監督振りを、示してくれた。

併し、志田は、潔白な人であつて、之れが爲めに、何一つ求むる所なく、只だ役目を重んじつゝ、造船の監督をして居たのであるから、五作が、深く感激したのも、無理のない事である。

『さア、どうぞ、此方へ……』

丁寧に、志田を迎へて、五作は、設けの席へ案内した。その跡に尾いて、德内も、席に着いた。

『初めて御意を得ます。拙者は、最上德内と申しまして、まことに不束の者ではありますが、今後は、何分宜しくお願ひいたす』

『これは申遲れて、甚だ失禮、志田平造で御座る』

五作は、ずツと下席から、挨拶する。

『このたびは、何かと御配慮を蒙りまして、有難く存じます』

『思つたよりは、早く出來さうぢやな』

『ハイ、職方のものも勵んでくれますから、存外に仕事も運びまして、もう四五日で、落成と存じます』

『國後には、藩廳の出張所もあつて、役方のものも行つて居るから、不自由な事もなからう』

『今日までに、知られて居ります所は、別に視る必要も御座りますまいが、このたびは、ずツと奥の方まで深入りし

て、思ふさま探つて見たい、と思ひますので、人知れぬ苦心をいたして居ります』

『それは、左樣であらう。併し、最上氏の如き、有爲の人物を得た以上、左迄の心配にも、及ぶまい』

と、いふて、德內の方に向つた。

『貴殿の御奮發、只だ敬服いたして居りますが、よく御覺悟をなされた』

『何事も、皇國の爲めと存じまして……』

『たとへ、皇國の爲めとは申せ、一般の武士は、泰平に馴れて、斯かる奮發をするものは、容易にあるものでない。公儀の御沙汰か、藩命の上では、止むを得ず、御請いたすとしても、自ら進んで、斯樣な事は、爲し得るものでは、御座らぬ』

『左樣の御詞では、却つて恐縮いたします』

そのうちに、酒肴が運ばれて、美しい酌人も出て來た。

盃は、しきりに獻酬された。

『時に、最上氏』

『はツ』

『貴殿が、武士の格式を捨てゝ、一個の船長となり、人跡未踏の地へ赴かるゝことが、藩侯のお耳に入つて、殊の外に、御感心遊ばされ、出發前には、拜謁を賜はる、といふ噂が御座るぞ』

『それは、意外千萬、無名の野人が、これしきの事を、いたせばとて、それが、上聞に達して、拜謁を賜はるとは、却て恐縮の至りに堪へませぬ』

『その儀については、原田惣兵衞殿から、改めて御話もあらう、と存ずる』

本人の德內よりは、傍に聞いて居る、五作の方が、どれほどの喜びか知れぬ。

『志田樣始め、御贔負下さる御方の御盡力で、左樣な事に相成りますれば、渡島屋の暖簾も良くなりまして、私の苦心も、世に出る、といふもので御座いますから、何ともいへぬほど、私は嬉しくてなりませぬ』

兩人が喜べば、それを傳へた志田も、自分の事のやうに思ふて、喜ぶのであつた。

『且那ツ、ちよツと……』

廊下に手をついて、支配人の源助が、五作を呼んだ。

五作は、ついと立つて、廊下へ出ると、何か頻りに耳語いて居たが、すぐ座敷へ、はいつて來ると、

『志田樣』

『何ぢや』

『原田樣が、お見えになります』

『ゑツ、原田氏が……』

『ヘイ』

『それは、何よりの事ぢや。こちらへ、御案內いたせ』

二

其後の原田は、德內と親交を續けて、德內の爲めには、可成り踏み込んで、萬事の周旋に努みた。大川との試合には、萬事に打勝つたが、同時に、德內の立退を、ひそかに謀るものもあつて、重役の一二が、之れに雷同したので、德內は、危く松前を、逐出される所であつた。

それを、うまく遮つてくれたのが、原田であつた。熟心な原田の勸說には、終に重臣も動かされて、德內は、其儘留まつてゐることを許された。其上に、原田は、重役へ紹介して、德內の出入を許させ、有志の者は、劍術や讀書を、

德内から敎へられても、敢て差支のないやうに、重役の内諾も得た。

斯ういふ風に、原田が後援してくれたことは、德内の身に取つて、頗る好都合であつたことは、いふ迄もないが、德内は、原田の厚誼に感じて、非常に原田を尊敬するので、爾人は、ます〳〵交際を親しくした。

志田が來て、德内へ語つたことは、全く僞りでなく、その要件の爲めに、原田は、やつて來たのであつた。

先づ別室に於て、原田は、德内と五作に面會した。

『船下ろしは、何日頃に相成るかな』

と、原田から問ひをかけた。

『船は、立派に出來上りました。只今は、外廻はりの裝ひを、急いで居ります最中で、それも二三日内には、すツかり手をひくことに、なつて居ります』

『それ迄に、なつて居れば、もう心配もない譯ぢやが、船下ろしは、可成く早い方が、よいと思ふから、その心得にて、支度にかゝつたら可からう』

『ハイ、萬事は、心得て居ります』

『其處で、最上氏は、いよ〳〵船長として、乘込まれる覺悟か』

『仰せの通り、拙者は、ぜひ乘ることに、定めて居ります』

『いさまし、い事ぢや』

『御屆向き其外は、渡島屋殿が、一切を、引受けて居られるゆゑ、拙者は、只だ其日の來るのを待つばかりで御座る』

『實は、重役のうちに、多少の異見もあつたが、それは追々と、理解も出來て、只今では一人も、故障を申すものはなく、殊に、河原殿は、那れ以來、最上氏の味方となつて、重役のうちを、まとめて下されたばかりでなく、いよ

いよ船下ろしの當日は、君公に於かせられても、其盛況を御覽遊ばされ、特に、最上氏へは、拜謁を御許しあるとの事で御座つた』

『何から何まで、御配慮下され、有難く存じます』

五作も、之れを聞いて居て、その喜びは、一と通りでない。

それから、當日の打合せなどもあつて、話はすんだ。

五作の案内で、原田は、志田の居る座敷へ通つた。德内も、前の席につく。志田も、原田の來たのを喜んで、酒席は、いよ〳〵賑はつた。

すべてが、好都合に運んで、船下ろしの日は來た。造船小屋の附近に、高棧敷を設けて、松前侯を、迎へる支度は、充分に整ふた。

棧敷には、家中の武士ばかりであるが、それにつゞく海岸には、町のものが出て、此盛況を見よう、とするので、非常な混雜であつた。

渡島屋に、使はれて居るものは、殆んど總出になつて、一般の見物を、親切に扱ふて居る。役所の方からも、數名の役人が出張して、非常を警戒するのであつた。

神戸や、横須賀で、大きい軍艦の進水式を視ては、とても、昔の船下ろしなぞは、比較にならぬ事ではあるが、それにしても、昔の船下ろしには、今の進水式に見られぬ野趣があり、特色もあつて面白かつた、といふ事である。

船下ろしは、無事にすんだ。

中央の高棧敷に居る、松前侯の前へ、志田平造は、重役の河原伊左衞門と共に、進み出た。

『本日の船下ろしに就て、親しく御臨場の榮を得ましたることは、造船元の者共は、申す迄もなく、我々一同も、肝に銘じて、有難く存じ奉る』

と、御挨拶申上げた。

新船についてのことは、すべて書いたものを差上げて、式は閉ぢた事になる。

此時、德内は、御前近く案内されて、御辭を戴く。五作も、その跡に尾いて、之れも賞讃の辭を戴いたので、五作は、體の熱くなるほど喜んだ。

群臣は、之れを羨ましさうにして視て居た。

四

根室まで三百里、それから更に進んで、國後の計羅武伊岬迄、三十里の海路を、一週して歸らう、といふ壯擧。二百石餘りの和船に乘つて、北太平洋の横斷を試みよう、とした、此企てには皆舌を捲いて、驚いたといふ事である。

船をつくるには、渡島屋の金力があれば、何でもない事だが、只だ乘込みの船員を、得る一事には、非常の困難があつた。此航海は、生きて歸るか、どうか判らない。十中の七八迄は、死ぬ覺悟がなければならぬ。

風雨の難は勿論、土人の襲擊も、豫め覺悟を要する。無事に探險を終り、歸つて來た所で、別に之れといふて、特別の儲けはないのだから、いかに海の上を、自分の家と心得て居る、赤蜻蛉にひとしい船夫でも、其募集には、容易に應ずるものなく、五作は、之れについて、人知れぬ苦心を重ねた。幸ひにして平生から、眼をかけて置いた船夫のうちに、進んで應じたものが、一人出て來た爲めに、それからは、豫定の人數も、バタ〳〵と極まつて、やうやく安心した。

最初の一人といふのが、留藏といふ男で、青森から、流れ込んで來て、見るも哀れな姿で、働いて居たのを、不圖した事から、五作に、拾ひ上げられ、五人や十人の船夫を、自由に動かし得る身分になつたのを、此上もなき恩義として、渡島屋の爲めには、火水の中へでも、飛び込まう、といふ覺悟を持つて居た。その留藏を見付けて、五作から

相談をかけたので、留藏は、快よく承知した。

留藏の勸誘に應じて、善吉、政右衞門、平太郎の三人が加はつた。以下十人の船夫は、船下ろしの前に、すつかり定つて、アイヌも一人、乘込む事になつて居た。

德内の考へは、ロシア人に、備へる爲め、北方の探險を、充分にやつて置き度い、といふのであつたが、五作は、この探險に依つて、根室、國後の事情が判れば、これから先きの商賣に、有力な足代が出來る譯だ、と考へて、德内の勸めを容れたのである。

今日は、渡島屋の廣い座敷へ、留藏以下のものが招かれて、御馳走になる、といふ事になつた。併し、一同を、改めて德内へ、紹介せるといふことも、招宴の趣意には、なつて居たのだ。

評判には、聞いて居たが、渡島屋の廣座敷へ、十數名のものが、集まつて來て、善美を盡した、座敷を見せて貰つた丈でも、すつかり氣をよくして、喜んで居る。

膳が運ばれて、一同は席についた。床の前に、据ゑられた留藏と、アイヌは、面目惡さうにして、下を向いて居たが、それと並んで、上席を占めたものは、みな恐縮の態であつた。

やがて、五作と德内は、その席へ出た。

留藏始め一同は、之れを視ると、座布團を下りて、席を放れよう、と爲るから、五作は、手を擧げて、

『どうぞ、其儘にして居て下さい。今日は、御一同を御招きいたしたのだから、私の爲る通りに、なつて居て下さらぬと困る』

と、制したが、留藏等は、ます〳〵恐れ入つて、

『とんでもねえ事です。旦那樣を、下に置いてはすまねえ。どうか旦那樣は、こちらへおいで下すツて……』

『それはいけません。今日丈は、私の爲る通りになつて居て下さい。たのみます』

再三の押合があつて、留藏等も、終に往生した。

『さて、御一同へ申上げる。此たびは御苦勞をかける事になつて、早速に御承知下すツたのは、私も、實に嬉しく存じます。世間の人樣には、いろ〳〵と蔭口もあるやうですが、私は、別に考へて居る事もあつて、斯ういふ企てをいたしたのですから、私の覺悟の通り、進んでゆき度いのですが、それにいたしても、御一同の御承知がなかつたら、とても出來る事ではなかつたのです。然るに、御一同が、快よく承知して下すツたので、私の男振りも、よくなつた譯ですから、こんな喜ばしいことはないのです。併し、いよ〳〵乘り出してから、御苦勞は、また一だんの事と、御察しいたしますが、どうぞ、しつかりやつて下さい。就ては、これにおいでなさる御方は、最上德內と申されて、立派な御侍でありますが、自分から進んで、この船へ乘つてゆかうと、御決心なすツたのです。そこで、最上樣を、おねがひいたして、船長といふ事にいたしますから、それも御承知を願ひ度いのです。今日は、まことに不行屆ですが、充分に飲んで下さい』

一同は、只だ恐れ入つて居る。

五

德內の事は、かねて聞いて居るから、

『此人が、劍術の强い、先生か』

と、五作の紹介して居るうちからそツと德內の容子を、視て居るものもあつた。

肥えては居ないが、骨太な體格で、上脊は、充分に在り、眼の光りは、何となく凄い。

『船の事は、極めて素人の方だから、船長とはいふても、萬事は、御一同から、敎をうける譯だ。何分ともに宜しく賴む』

德內の挨拶は、甚だ簡單であつたが、一同の氣に容つた。變に侍風を吹かせないで、あツさりいつて退けた、挨拶振りは、一同も、意外に感じたであらう。

酒宴の間も、五作と德內は、席につかず、酌をして廻はつたから、一同は、ひどく感激してしまつた。

土地で、屈指の富豪から、斯うした取扱ひをうけて、丁寧な挨拶までされては、それ丈けで、生命も捨てる氣になる。況して、大川軍之丞との試合から、德內の武勇は、鬼神の如くいはれて、大した人だと、思つて居たのに、その人の挨拶が、自分等を、同じ格に、視て居るらしい口振であつたから、ます〳〵氣をよくして、初めのうちこそ、愼んで居たが、醉の廻るにつれて、自然と遠慮もなくなつて、節面白く、船歌などを、唄ひ出すものがあり、果は、立つて踊るものもあるやうに、なつた。

『最上の旦那ッ』

『何ですか』

『旦那はゑれえ人だ』

『左樣か』

『何が、さやうかだ、ハツ、、、、、』

『可笑しいことが、あるのか』

『お侍が、船長になるなんて、可笑しいぢやねえか』

『左樣か』

『ハツハ、、、、、、またやつたね』

德內には、何が可笑しいのか、さらに判らないが、留藏は、獨り悅に入つて、笑ひこける。

『旦那のやうな人と、一しよに出かけたら、怖い物なしだ。海坊主でも、怪物でも、片ッ端から、ズバ〳〵斬つてし

まつて、大手を振つて歩けるから、ほんとうに豪氣なもンだ。どうだ、旦那ツ、兄弟分にならうか』

『うむ、面白いな』

『なるかね』

『ならう』

『それぢやア、堅めの盃を、下だせえ』

『よし』

盃の交換がすむと、それを視て居たものも、ひとしく盃を献す。德内は、すべて之れをうけた。

『うめえ〳〵、これで旦那と、兄弟分になツちやツた、ハツハ、、、、、』

五作は、盃を持つて、

『わしも、仲間入りをしたい』

『オツと、旦那の方は、おことわりだ』

『なぜかね』

『船へ乘らねえから、駄目でさア』

『なるほど……』

『ハツハ、、、、、、なるほどだツて、旦那が、いつてるぜ。さツきは、最上の旦那が、左樣だなンて、今度は、渡島屋の旦那が、なるほどツて、いつた。ハツハ、、、、、』

一同も、手を拍つて笑ふ。

德内と五作には、それが何故をかしいのか、少しも解らなかつた。

自分等が、ふだん使はぬ詞を聞くと、斯うした人達は、可笑しがるものだ。けれども、それに依つて、全く打解け

て來るのだから、まことに結構である。

其夜は、すべて首尾もよく、一席の宴會は、德内と船夫の間に、無限の親しみを加へた。翌日は、五作と德内から役所の方へ、出帆の屆けを出した。

さらに、兩人は揃つて、重役の屋敷を、一と廻り歩いた。同情してくれた人の家へは、殘らず禮を返した。

出帆は、天明五年二月十日、春とはいつても、北海の寒さは、今が最中である。山といはず町といはず、一面に雪は在る。

新造船は、辨天島の灣内に、繫がれて在るが、船出を祝ふ催しには、渡島屋が、全力を擧げてかゝつた。

役所の方からも、いろ〳〵の宣傳があつて、町のものも出來る丈けの助力を、爲ることになつたから、當日は、空前の賑はひを豫想されて、その評判は、遠近に高く響いた。

船の上には、紅白の幔を張廻して、旗や幟は、何十本といふ數を知らず、渡島屋の店頭には、酒樽を備へて、道行く人の自由に飲ませる、といふ仕掛けであつた。

松前の町は、二三日も前から、押かけて來た見物人で、どこの旅宿も、一ぱいになつたほどであるから、只だ其れ丈けの狀況から考へても、當日の賑はひは、思ひやられるのであつた。

六

松前港の西端、折戸崎の東方に、圓錐形の小島がある。辨天を惣社として、崇め祀る所から、之れを、辨天島と稱へ、藩制の昔から、燈臺を設けて、舟航の爲めに、便を謀つて居たので、その名は、疾くから知られて居た。

北海の二月は、内地の極寒よりも、その寒さは強く、殊に、外洋の風を、眞面に受けて、寒氣は、一だんと身に沁みる。

新造の船は、風波を避けて、辨天島の蔭に、繋がれて在る。今日は、晴れの船出といふので、思ふさま裝飾して、汐風に煽られる、幾多の大幟、さては、船の四方を纏ふ幔幕、いづれも、人目をひいて、華やかなものであるが、それに向つて、海岸通りの賑ひは、殆んど蟻の群がるにもひとしく、人の山を築いて居た。

高棧敷には、松前家の定紋を染抜いた幕を張廻して、藩侯も、今日の船出を送らう、とするのであつた。

灣内に、無數の小舟を浮べて、それ〴〵に粧を凝らし、骨を刺すほどの寒風も、物の數とせず、ねぢ鉢巻に、赤襌の連中が、時々に吶聲をあげて、その行を壯んにする。

船長の德内は、五作と共に、今、高棧敷へ上つてゆく。藩侯に、拜謁を賜はる、といふので、二人の體は、光榮に輝いて居る。一行の船夫は、棧敷の下に、恐る〳〵控へて居るが、これ等の輩にも、拜謁をゆるされてある、と傳へ聞いたものは、驚きの眼を睜るばかりであつた。

志摩守の左右には、群臣が居流れて、その嚴かなることは、流石である。

河原仁右衞門と、原田惣兵衞は、しづかに御前へ進み出た。

『最上德内、渡島屋五作、兩名まかり出でました』

『德内ッ』

『はッ』

『このたびの壯擧、余は、滿足に思ふぞ』

『恐れ入りまする』

『その成功を祈るぞ』

『有難き御詞、一死を賭して、必ず目的を達しまする』

『うむ、勇ましい事じゃ』

更に、五作に向つて

『利得を離れし、この企では、渡島屋の名に恥ぢぬ。よく奮發いたしたのう』

『只だ、御奉公の萬分一、と心得まして……』

『滿足である。船長に、德内を得たことは、其方の仕合せであつた。船は余が命名いたすぞ』

『はッ、恐れ入り奉りまする』

『辨天丸といたしては、どうか』

『有難き儀に、存じまする』

『船夫一同は、其方より勞はり遣はせ』

それから、御盃を戴いて、御前を退つた。

松前藩に於ても、斯うしたことの前例ない、二人の爲めには、空前の光榮であつた。要するに、五作の財力も、其一因ではあつたらうが、德内に對する、人氣が良く、重役のうちに、贔負するものゝ多く居たことが、松前侯を動かしたものと、視る可きである。

留藏、善吉、政右衞門、平太郎等は、大地に坐つて、只だ嬉し泣きに、泣いて居る。

棧敷から、下りて來ると、德内は、すぐに身支度を改めて、五作と共に、小舟へ乘つた。役人の船には、志田平造が、乘つて居る。合圖の煙火があがると、一齊に、小舟を漕ぎ出した。櫓拍子を揃へて、エッシ〳〵波を切り、辨天丸指して行く。

幾十艘の見送船も、それについて漕ぎ出す。遠くから觀て居る群集は、一時に吶喊をつくつた。辨天丸の胴の間は綺麗に飾り立てゝ、すでに役人の座も、設けて在つた。

德内と五作が、眞ッ先に並んで、この跡には、十數名の船夫が、窮窟さうにして、坐つて居る。

志田は、やがて立ち上つた。

『船長始め一同へ、申渡す事がある。このたびの航海については、殿様に於かせられても、殊の外の御喜びであつた。德内、五作の兩名は勿論、船夫一同へ、拜謁を賜りしことは、今迄になき事である。殊に、船名までも賜はる、といふことは、一同も肝に銘じて、有難く心得てよからう。この上の御報恩としては、一身を抛ちて、御奉公いたすの外あるまい。膽勇並びなき、德内の如き武人を、船長に戴いたのは、一同の仕合せである。よく其命に從つて、必死の働きをいたせ。我等は、やがて一同が、無事に立歸ることを、神かけて祈る』

と、志田の詞が終る。

體を堅くして、船夫一同は、之れを聞いて居たが、德内は、膝を正して、志田に向つた。

七

『謹んで御禮申上げます。身分卑きもの共へ、特に拜謁を賜はりましたのみならず、船名までも頂戴いたし、一同の名譽、此上は御座りませぬ。只だ懸命に働きまして、御高恩に酬ゐ奉るの覺悟、探險の目的は、美事に遂げて、必ず無事に立歸ります。猶ほ、御重役の方々が、これ迄の御厚意に對しましては、深く感銘いたして居ります。只今の御詞は、今日の船出について、一同が、覺悟の臍の緒を堅めるに、此上もなき御訓戒と心得、有難く拜聽いたしました』

と、さすがに、德内の態度は、よく落付きを見せて、莊重な詞に、その貫目を示した。

五作の挨拶がすむと、やがて、酒肴が運ばれた。志田を始め、役人も寛いで、盃を擧げる。

『最上氏、何事も心の儘に運んで、さぞ滿足いたされたらう』

『萬事は、貴下を始めとして、御重役の御心入れと、ふかく感謝いたして居ります』

『いかに、我々が盡力いたしても、所詮は、お手前に、德が無ければ、斯うは運ばぬものぢや』

『恐れ入ります』

『渡島屋の奮發は、やがて酬られる事もあらう。併し、よく是迄、やり通したものぢや、と、みな感服いたして居るぞ』

『わたくしは、只だ有難い事だ、と思つて、その外に、何事も考へては居りませぬ』

『お前が、そのきれいな心を持つて居るので、神に惠みが、このたびのやうな事にも、なつたのぢやよ』

『有難う存じます』

話し合ふて居るうちに、盃は巡つて、醉が出て來た。

『留藏ッ』

『へ――』

『船出を祝へ』

德内に、祝へといはれて、一同は、居坐いを直した。

船の生活をして、海を渡るものは、一種の聲を有つて居る、北海の方では、例の追分節といつて、內地のものには眞似の出來ぬ、哀調を帶びた、さびしいものではあるが、人の心を、引しめるやうな歌がある。

仁王のやうに、赤黑い體の荒男が、櫓を押し乍ら、追分節を唄ふと、風に送られて、その哀調が、聞えて來る時の心は、俗界一切の妄執を放れて、仙境に入るの想ひが爲る。

留藏が、音頭取りになつて、その追分節を、唄ひはじめたのである。

江差照る〳〵　函館くもる
花の福山　花が咲く

野趣は免れぬが、そのうちに、一種の風韻が、籠つて居る。

大島小島の　間通る船は
　　江差通ひか　なつかしや

土地の人は、朝に夕に、之れを聞いて居るのだが、それでも厭きるといふことなく、常に其哀調を、味はふて居るのだ。

盃盤は收められて、役人は、みな引上げて、殘り惜しさうにして、五作も、小船へ移つた。

舳に立つて、空を仰ぎ、雲の動きを見て居た、留藏は、思はず聲を張上げた。

『さア、うめえぞ』

『何だ、兄貴ッ』

『追風だ、變つた』

『しゝゝ、しめたなッ』

『さア、帆を張れ』

『心得た』

一同は、力聲と共に、帆を張り上げる。同時に、錨は捲かれた。

陸には、群集が、最後の吶聲をあげた。灣内には、無數の小舟が、辨天丸を、遠巻きにして送り出す。續け打ちに花火は、打ち上げられて、此壯圖を祝ふのである。

見る〳〵うちに、辨天島を跡に、沖合へ走る船、帆は、風を孕んで、矢を射る如く、駛るのであつた。

間もなく、津輕海峽へ出た。左に、白神岬を見て、右には、龍飛岬の端、髮の毛一筋動けば、航海危しと傳へられて居る。この關門も、無なく乘越して、函館を、背後に見て、北太平洋へ出た。

大間岬、汐首岬、鍬歌、それ〴〵に、名を唄はれる。難場を越えて、四日の間は、航海をつゞけ得た。

德内は、原田から貰つた海圖を披いて、胴の間に、うむと安坐を組む。山國に育つた人らしくもない。

水先は、例の留藏が、受持であつた。アイヌは、留藏に從いて助手の役を勤める。船の運命は、此二人が、背負つて立つのである。

幌泉の快戰

一

松前を船出して、三日の間は、海上平穩であつた。風は、常に追手であるから、船足も、存外に疾く、此調子でゆけば、航海は、無事にすむものとして、一同も喜んで居た。

四日目の晝頃になると、西方の空に、一摑みほどの黑雲が出て、それが追々に、擴がつて來る。冷たい風が、少し荒くなつて來た。

德内は、胴の間に、海圖を披き、磁石を見詰めて居る。その傍には、アイヌが、附いて居た。

水先の留藏が、足音荒く、駈けて來ると、

『船長ツ、大變だよ』

と、叫んだ。

『どうしたのか』

『颶風が、來ますぜ』

『何ぢやツ、颶風が來る』

『へー』

アイヌも立上つて、しきりに空を見て居たが、これも、留藏と同じやうに、不安の色を、顏に現し乍ら、

『冬の航海には、是が一番に恐ろしいのです。この颶風は、可成りひどいでせうよ』

と、颶風の裏書をした。

そのうちに、他の船夫も、騷ぎ始めた。

船の動搖は、大分はげしくなつて來る。波の荒れやうが、異樣に感ずるほどであつて、風の力は、刻々に、强さを增して、百千の猛獸が、一時に吼ゆるか、と思ふばかり、恐ろしいうなりを立てゝ、波を捲き上げて來る。その度毎に、船は、木の葉の如く、搖り上げ、搖り下ろしされて、波に弄ばれる。

多年の海上生活で、斯うした場合に、いくたびか、經驗を持つて居る、船夫等も、この颶風には、頗る弱つたらしく、動もすれば、足を奪られて、よろめき〳〵、働いて居る。

德内が、いかに武勇の人でも、船の上は、全く別である。況して、颶風に經驗のなき船長、氣力一つで、押通して居るのだから、荒れ狂ふ波の上に、船長としては、三文の値打もなく、萬事は、留藏以下の船夫が、爲すにまかす外はなかつたのである。

何しろ、船の動搖が烈しいので、德内の體は、恰で俵を轉ばすやうに、右から左、左から右へと、轉々して居るので、德内も、之れには、頗る弱つた。

水先の留藏は、這ふやうにして德内の傍へやつて來た。

『船長、とても駄目ですぜ』

『何が、駄目か』

『助かりさうもねえ』

『莫迦ツ』

『へー』

『平常のお前にも、似合はぬ事をいふ。この位の颶風が、何で恐ろしいか。もう少しの努力で、乘切ることは出來る。しつかりして、居れ』

『船長は、初めての航海だから、そんなことをいふが、此颶風は、とても乘切れませんぜ』

『イヤ、大丈夫ぢや。己れが保證する』

『風の神の親分ぢやアあるめえし、船長が保證したつて、颶風の方で、承知しませんよ』

日は、全く暮れて、灯一つ無く、ひゅーツと迂鳴つて、吹きつける風、雨も、はげしく降りはじめて、船は、動揺する毎に、海水が浸入して、今は、運を、天にまかす外なき、狀態になつた。

德内も、心ひそかに覺悟した。留藏等に對しては、強いことをいふて居るが、心のうちでは、弓矢神を、祈つて居るのだ。

大小を束ねて、しツかり體へ、縛りつけた。金は、それ〴〵に分けて、一同の體へ、附けさせてしまつた。武運が強ければ、助かることもあらうが、先づ此船と、運命を共にする、覺悟をした。一同を集めて、

『海水を汲出すことは、努めて怠るな。不用な物は、投げ込んでしまへ。各自の體は、船のいづれかへ結びつけて、船と放れてはならぬ。自然の力は、無限のものであるから、それに抵抗してはならぬ。心神の疲れを少なくして、助かつた時の事を、考へて置け。もう此上は、何も爲るな。風雨の儘に、船の運命を、まかせてしまへ。弓矢神は、未だ一同を捨て玉はぬぞ。わしは、慥かに助かる、と思つて居るから、みなも、しツかりして居れ』

と、聲を限りに叫んだ。

『留藏ッ』

『へー』

『わしの體を、帆柱へ括りつけてくれ』

『へー』

『さア、はやくせい』

『へー』

『みなも、同じやうにして居ろ』

勇敢な氣性は、どこ迄も、人を強く爲る。德内の元氣を視ては、一同も奮ひ立つ。

ぴゅーツと、吹く風に、一だんと荒れ狂つた大波が、どツと船へ、衝つて碎けた。

『あツ』

と、聲を擧げて、一同は、ひれ伏した。

德内も、殆んど夢心地になつてしまつた。

二

日高國幌泉は、鰊の漁場として、昔は、有名な所であつた。

『幌泉は、本名ポロエンルンと云ひ、大岬の儀、此處へ出れば、兩方見ゆる處、尖りしと云ふ也。ホロイヅミは、此話の訛りのよし』

『幌泉錨地は、襟裳岬の北西約七浬、南東方の歌別埼と、北西方一陸嘴とに由つて成れる。濶七浬の灣岸中に在り。岸線丘陵起伏し、其背後には、二、三千呎の高山脈聳立し、其前面は、概ね沙濱なれども、距岸一鏈内外の間は、干出岩緣布す。但、村の前面、半鏈の間は、礁脈壁開し、沙底の地となる。村の北西側なる、低丘上に燈臺あり。此より海に斗出するを、住吉埼と云ふ。歌別埼は、南西方に斗出する山嘴にして、埼端より南西方一浬の間、

岸礁擴延し、甚だ危險なり。錨地は、歌別埼を、南東に望み、水深七尋、沙底の處にありて、東乃至北の風浪には、稍安全なり。又西風には、波浪濱岸と殆んど平行するを以て、其勢大ならず、然れども偏南西風の時は、長濤滾入し、船體の動搖甚しく、風力强きときは、錨泊に堪へず。と云ふ』

古い記錄と、新らしい地誌には、斯ういふ風に、書いてある。

松前藩政の頃には、會所を設け、番小屋をつくつて、漁場の監督をする傍、アイヌの取締を、して居た所だ。

日高は、元來、アイヌ種族の祖國、といはれて居た。山低くして、海は淺く、氣候は、頗る溫暖い、歷史的にいへば、源義經が、奥州の高館を遁れて、此地に入込み、沙流別川の岸に、その居城を築き、今でも、其跡には、義經明神として、祀つて在る。アイヌは、之れを稱して、ウキクルミと謂ふて居る。

最近になつて、アイヌ種族の保護が、强く唱へられて來たのは、まことに喜ばしい事である。優勝劣敗の理からすれば、無用の事とも、いはれて居るが、必ずしも左樣ばかりはいへぬ。無智無慾のアイヌ種族は、可愛らしいといふ感じは有たせるが、憎らしいといふ氣は起らぬ。

乍併、優勝劣敗の理は、人間の上に、遠慮なく行はれて、アイヌ種族は、北へ〳〵と、逐ひ捲くられてしまつた。逐はれては退き、退いては逐はれるうちに、だん〳〵人數も減つて來て、今では、旭川の附近に、少しばかりの部落が、殘つて居る丈けである。

寛政の當時には、約二千人と數へられたのが、文政の頃になると、千三百四十二人となり、さらに安政の年度には、激減して、七百十三人に、なつてしまつた。

松前藩が、アイヌ種族に對する、施政方針は、凌虐の外に、何一つとして、仁政らしい事はなく、從つて、會所や番小屋へ、遠く出張させられて居た、藩の役人や、雜役に服する下郎の輩は、殆んど何の考へもなく、アイヌを、虐げて居たのである。

男子は、勞役に服せしめ、女子は、淫慾の犧牲にして、得る所のものは、その大部分を、奪り上げて、藩の收獲とし、己れ等の私服も、肥して居た。

此物語の時代に、幌泉の酋長は、ヘンリウクといふものであつた。

暴風が靜まつて、海も穩かになつた。ヘンリウク部下の二三人は、今海岸へ出て、しきりに海の方を見て居ると、一艘の船が、波にゆられて、はいつて來た。

帆柱は折れて、船體も、大分痛んでゐる。昨夜の颶風に逢ふて、いづれかの沖から、吹きつけられたに違ひない。

一人のアイヌは、すぐ丸木舟に乘つて、その難波船へ、漕ぎ寄せると、すぐに太い綱をかけて、引返して來た。

『船は、どうぢやツたな』

『シヤモのサムライが、乘つて居る』

『シヤモのサムライが……』

『うむ』

『そりや大變ぢや。はやく酋長に、知らせて來よう』

他の一人は、駈け足になつて、ヘンリウクの許へ、しらせにゆく。

その跡へ殘つた、アイヌは、力にまかせて、綱を手繰り、大きな岩角へ、その綱を括しつけた。

忽ちにして駈けつけたのは、ヘンリウクを始め、部下のアイヌが、十人餘りであつた。數隻の丸木舟は、難破船へ漕ぎつけられた。

斯くて、德内以下のものは、九死のうちに、一生を得たが、疲れ果てゝ居るから、碌に口も利けぬ。アイヌ等は、親切に介抱して、ヘンリウクの小屋へ、一同を擔ぎ込んだ。

三

德内の一行には、アイヌが一人、加はつて居たので、應接に不自由はなく、颶風に逢ふて、難波した事情は、明かに判つたばかりでなく、德内の人柄も、充分に知れたので、助けたアイヌの方でも、安心して世話をする。醫藥といふほどのことはなくても、藥草の用意はあつて、德内の手にも、多少の藥は持つて居たから、それに不自由はなかつた。

つまりが、風浪の爲にもまれた、船の醉と疲れであるから、大したことは無かつた。三日ほど經つと、一同の元氣は回復して、附近の探險も、出來るやうになつた。アイヌが、シヤモに對する、尊敬は深く、時には恐怖するものもあるが、それは、此方の出やう一つで、單純な性質のアイヌは、どうにでもなるのだ。

『船の修繕は、どうなつたか』

『へー、何しろ道具が無いので、少し困つて居るのです』

『道具は、一と通り在つた筈ぢやが……』

『那の晩の騷ぎで、流してしまひました』

『左樣か』

『けれども、アイヌが、親切にやつてくれますから、どうか斯うか、繕ひ丈けは出來るでせう』

『アイヌは、道具を持つて居るのか』

『何しろ大いものです、一と通りは持つて居るのです』

『それを借りたら、どうぢや』

『道具を貸くされる、といつて、貸してはくれませんが、その代り、自分達で、やつてくれますから、面白いもんです

よ、ハツハ、、、、』

『それは、却て好都合ぢやな』

『此方で、いふ通りに、よくやつてくれます』

『船の物は、殘らず引揚げて來たか』

『へー』

『酒も在るか』

『あります』

『それを、少し分けてやれ』

留藏は、手を振つて、

『そりやアいけません。アイヌに、酒を呑ませたら、とても駄目です』

『何故か』

『何しろ、酒が好きなんですから……』

『好きなら、猶ほ更分けてやれ』

『呑んだら、何もしなくなります。アイヌは、何よりも酒が好きで、女も呑むのですから、驚いちまいます。醉つてしまへば何もせずに、唄つたり踊つたりして、日を送るのですから、仕事にかゝつて居るうちは、一滴も呑ませちや駄目です』

『然らば、修繕が出來てからに、爲るか』

『それが、いゝでせう』

折柄、酋長の小屋の方が、非常にさわがしくなり、人の駈ける足音が、はげしくなつて來た。

『留藏ッ』

『へー』

『何かはじまつたのか』

『何ですか、少し變ですぜ』

『ちよつと見てまゐれ』

『へー』

留藏は、大急ぎで飛んでゆく。

酋長の小屋には、今數人の負傷者を、擔ぎ込んで、大騷ぎをして居る所であつた。ヘンリウクから、一と通りの事情を聞いて、留藏は、すぐ引返して來た。

『船長、大い事になつたのです』

『どういたしたのか』

『アイヌが、二三人斬られて、今擔ぎ込まれて來た所でした』

『どうして、斬られたのか』

『シヤモのサムライに斬られた、といつて居ます』

『この邊に、日本人が居るのか』

『左樣らしいですな』

『喧嘩でも、いたしたのか』

『よくは判らねえのですが、そのサムライといふのは、松前藩の御役人のやうですぜ』

『たとへ、藩のサムライでも、みだりに斬つては惡い。とに角、行つて見ようか』

『さうですね』

其處へ、歸つて來たのは、一行の連中で、船の修繕から、引上げて來たのだ。

德內は、一同を連れて、酋長の小屋へ來ると、負傷者を取卷いて、女は泣いて居る。男は、熊の油を出して、傷口へ、塗つて居る所であつた。

德內は、持つて居る、氣付藥を與へて、それから傷藥を、つけてやつた。負傷者は、生氣づいて來た。血が留まつて、痛みが去つたので、負傷者は手を合せて、拜んだ。一同は、德內の前へ跪いて、最敬禮をした。アイヌ等は、少し落付いたので、德內は、其事情を、訊ねはじめた。

四

寛文の頃に、シヤグシヤインの變亂が起つた。酋長のうちでは、武勇のすぐれた、此一族の勢力は、非常に强いものであつた。

松前藩でも、此一族の反抗には、殆んど持餘しの態であつた。けれども、それを征服し得ないやうでは、他の酋長を、押へてゆくことが出來ぬから、どうでも、此一族を征服する必要があつた。その時に、附近の酋長に對して、此一族の討伐を命じた。ヘンリウクの祖先は、第一線に立つて、よく働いた。その功に依つて、樣似から幌泉へかけて一帶の地に酋長として、すべての權利を與へられた。今のヘンリウクは、數代つゞいての酋長であつた。

之れを、內地の事にすれば、武功の家柄として、格別の取扱ひをうけて居たのであるが、一年前に、藩から交代して、此邊の支配に來た、松村といふ役人が、樣似の會所へはいると、酋長のミスコナといふものが、うまく松村へ摺り込んで、その愛顧をうけるやうになつた。

どうせ、斯ういふ土地へ來るものは、藩の方でも、一と癖あるものを選んで、寄越すやうに爲る。松村といふ奴、

多少の武術も心得て、いくぶんの度胸もある所から、會所の取締として送られたのであるが、性來の女好きと、慾の皮の厚い所から、ミスコナは、娘のアンネツキを、松村へ送つて、御機嫌取りをやつた。アンネツキは、非常に美しい容貌であつたから、松村は、すつかり悅に入つて、アンネツキのいふことなら、何でも肯くやうになつた。

左樣した關係から、ミスコナの勢力は、俄に大きくなつて、ヘンリウクの領域を、侵して來る。

之れが爲めに、いくたびか訴訟も起して、松村の裁斷を請ふたが、いつも、ヘンリウクの敗けとなつて、その領域は、だん〳〵縮まるばかりであつた。

樣似山道の開通工事が、今はじまつて居る。それに對する夫役は、どこの部落へも、公平に割付けるのが、當然であるにも不拘、獨りヘンリウクの部落にのみ、その夫役を命ぜられたので、その迷惑は一と通りでなかつた。

樣似は、元祿の頃、ウンベチと稱し、後サマニと改め、今ではシヤマニと呼んで居る。藩政の時分には、東海岸要衝の地として、會所、勤番所、通行屋、常備倉、遠見番所・臺場、鍛舍、匠舍、雜庫、屈舍等の設けもあつて、アイヌ部落の都會であつた。

此邊の開發に、シヤマニベツの土人を、多く使つた所から、シヤマニの稱が、起つたものと傳へられてある。

『場所請負人高田屋嘉兵衞の嗣、金兵衞の治罪、苛酷を極めたり。天保二年、高田屋金兵衞の船榮德新造、異國船に行遇ひし旨聞え、松前家より其水手を鞫問せられ、金兵衞兼て與へ置きたる、船標を建て、夷船と旗合せをなせし由、其始末を江戸へ註進す。其口書に、請負御場所、ホロイヅミ幷にネモロ兩所へ、仕入物等を積下の爲め、五月九日、函館山脊泊出帆、十二日大霧、夕八時頃シヤマニ御場所より四里程沖の方、榮德新造より巳午方、凡そ二里程沖に當り、幽に異國船一艘相見候に付、山高印付の小旗相立候て、早速陸の方面へ、船を乘越候所、又陸の方凡そ一里程相隔、異國船一艘相見え、異國船何れも三本檣にて、木綿一反位の細長く赤き物、帆桁へ相下げ有之候、異國船見請候節、山高の印旗相建候事は、金兵衞の兄、隱居嘉兵衞文化中異國へ被捕、被送歸候節、

以後、手船の者、海上にて異國船に出合候ても、決して仇敵申間敷と申合候由、承り候(中略)四年二月、江戸評定所にて申渡、金兵衞旗合の事、年來押隱し罷在候始末不屆きに付、手船一切(凡十隻)所持の小職とも取上げ、攝州兵庫大阪、町構、江戸十里四方、追放申付る』

樣似は、獺の漁れる所として、有名なものであつた。

ヘンリウクは、涙と共に、德内へ物語つたのは、山道開通の工事に、過大の夫役を負はされ、その上にミスコナ酋長の爲めに、侵路を逞うせられて、ホロイヅミの部落は、一日毎にやせてゆく、悲哀な事情であつた。

『負傷者は、その夫役に當てられたもので、幌滿別川の沿岸に、働いて居る所を、不意に襲はれて、此始末であるが、たとへ、會所へ訴へても、取上げてはくれまいから、泣寢入りの外はあるまい。斯ういふ事情の爲めに、此部落はやがて亡びてゆくであらう』

と、くはしく語るを聞いて、德内の義氣は、之れを聞過し得なかつた。

『よし、この仇は、わしが報じてやる。ミスコナを討懲して、會所の政治も、すべて改めて遣はすから、心を安んじて居れ』

之れを聞いて、一同の喜びは、いふ迄もなく、それよりは留藏等が、飛上つて喜んだ。

五

酋長の知らせを得て、遠近の小部落から、追々に集まつて來たものは、六七十人の多きに及んだ。

德内一行の容子を見て、みな驚異の眼を、睜つて居る。ヘンリウクは、一同に向つて、演說をはじめた。

『シヤモのサムライ、最上德内さんは、吾人の爲に、樣似部落のミスコナと、大に鬪つて下さる、といふのだから、一同は、最上さんの前に跪拜して、その有難い御思召を感謝なさい。會所の役人方に對しても、最上さんから、掛

合つて下さると、いふから、今後は、會所の政治に苦しめられることも、なくなるに違ひない。とに角、最上さんは、吾人の救ひの神であるから、深く敬意を表して、その命令には背けぬ。幌滿別川の遭難に、大きい負傷した同胞も、最上さんの藥で、生命を取り留めたから、一同は、それについても、厚く感謝なさい』

之れを聞くと、部落の勇士は、それ〳〵に、武器を高く揭げ跪拜して、敬意を表した。

德內は、それがすむと、嚴かな態度で、一同へ挨拶した。

『わしは、最上德內といふて、日本內地の武士であるが、松前藩の許しを得て、國後へ行く途中、圖らずも暴風雨に會ふて、この海岸へ漂着したものである。殆んど半死の狀態にあつたのを、ヘンリウクさん始め、この部落の人々から、親切な介抱をうけて、再生したものであるから、いさゝか報恩の爲めに、ミスコナと鬪つて、皆さんの害を除き、併せて松前會所の暴政も、改めさせて進ぜたい、と思つて居る。只だ、我一行の人數は、極あて少ないのであるから、皆さんが、一致の力を以て、われ〳〵と共に鬪ふのでなければ、とても勝利は得られまい、と思ふ。皆さんは、われ〳〵を疑はずに、よく信じて下さい。われ〳〵は、皆さんを、同胞と思つて、大に鬪ふ覺悟である』

部落の勇士は、再び聲をあげて、德內の前に、跪拜した。

すぐに、宴會を開いた。部落の妻と娘が、それ〴〵に料理したものばかりである。熊の膰、鹿の脛の隨、ルイベと いつて、鮭の凍漬、延胡索と黑百合を碎いて、それに澱粉を加へ、さらに鹿肉を加へて、天ぷらに揚げたものなぞ、いづれも、アイヌの仲間では、此上もなき美味として、贅澤な御馳走である。

宴の半ばに、妻と娘は、聲を揃へて、ユーカルを唄ひはじめた。アイヌが、得意にする哀歌だ。

別れの風だよ諦めしやんせ
いつまた會ふやら遇はぬやら

アイヌの聲は、一種の哀調を帶びて、その歌の如きも、すべて腸を絞るやうな、悲しいものが多い。亡びゆく民族の唄ふものには、人の心を咬つて、歡樂の興趣を有たせるものは、殆んど無いやうに思はれる。

留藏、善吉、政右衞門、平太郎等の外、五人は、すでに結束して、德內の背後に、附いて居る。殘る五人と、連れて來たアイヌは、跡へ殘して、舟の修繕や、食料の用意を、させる事にした。鬪ひが終れば、再び乘船するのであるから、其用意は、さらに怠らなかつた。

留藏等に向つて、德內は、鬪ひの心得を、申渡した。

『いかなる場合にも、二人一組として、互ひに助け合ふことにしたい。努めて、無益の殺生を避け、降伏するものは親切に取扱ふやうにせよ。併し、鬪ひに臨んでは、滿身の元氣を以て、一歩々々進んで行け。婦女を辱めてはいけない。みだりに分捕をしてはいけない。自分等の思案に餘つたことは、可成くわしに、相談してくれ。萬一にも、鬪ひが不利に陷つて、別れ〳〵になるやうなことがあつても、決して狼狽せず、しづかに落付く所を見付けて、互ひに搜し合ふやうにしたい。笛の音が聞えたら、それを便りに、集まつて來ることを、忘れてはいけない。いよ〳〵行き逢ふこともならず、互に搜し合ふても、見付け出し得ぬ時は、萬難を犯して、此地へ引上げて來ること、いかに絕望しても、死を急ぐことは、愼むやうにしたい』

德內は、この訓示を終ると、蘆笛と名づけた、アイヌの笛を、一人に一つを與へて、吹き法まで敎へてやつた。

留藏等は、勇み立つて、必勝を期する元氣は、その顏にも、現れて居た。

六

春といへど、未だ三月である。

四方の山々、雪を戴いて、眼の及ぶ限り、白布を敷いたやうだ。吹く風の寒いことは、骨を刺すやうに感ずる。

太古からの森林は、未だ其儘に、木立の奧ふかく、晝猶ほ暗い所が多く、幽邃の趣はあるが、行き馴れぬものには

物凄く思はれる。

一隊七十人、決死の覺悟で進みゆく。猿留山から出て、海に注ぐ、ニカンベツ川の流れを渡つて、二日目の夕方である。

、、、、ニカンベツ川は今ま貳漢川といふ。地誌に依ると、襟裳山脈に、水源を發して、西に流れ、ペタヌシリウドル山の南麓を繞り、北方より來る、ポンニカンベツ川と合し、ラーモウンヌツプリの南を流れて、海に注ぐ、と書いてある。

幌泉と樣似の二郡は、此川流に依つて、堺を分つ。幌泉へ寄つた川岸に、ヘンリウクの一族は、多く住んで居たがミスコナの部落民から、逐はれ〳〵て、幌泉の方へ、移つて行つたのである。

一隊の戰士を、草深き所へ憩はせて、德內とヘンリウクは、高い丘陵の上へ登つた。

春の夕日は、今沈みつゝある。その餘光は、四方の山を染めて、美しきこと限りなく、樣似續きの山には、千古消えざる雪、白く輝きて、眼前には、幾多の丘陵が起伏して、名も知れぬ雜草は、夕風に戰ぎ、伏しつ仰ぎつして居る。

樹の間がくれに見える、彼處に二軒、此處に三軒とある家は、ヘンリウクが支配して居た、昔の部落であるが、今はミスコナの支配に、移つて居るのだ。

無限の感慨に打たれて、ヘンリウクは、父祖の事を、語り乍ら、この方面の地理を、くはしく說明した。

日は、全く暮れて、月は、高く昇つた。

配兵の手續きはすんで、戰機の熟するを待つばかり、德內は、しきりに地理を究め、進退の駐引を、考へて居た。

ヘンリウクは、人間の最も善なるものであるが、ミスコナは、それと正反對に、人間の最も惡なるものであつた。

娘を、會所の役人に與へて、それを餌として、部落の勢力を張り、自分の慾を、充たす爲には、いかなる犧牲も厭はぬ、といふ風の酋長であつた。

容貌は怪異、膂力は強く、殊に、半弓と投槍は、最も長ずる所であつた。ヘンリウクの部落民を、だん〳〵逐ひ捲つて、幌滿別川に沿ふた、一帶の地は、今や其勢力圈となり、此方面の酋長としては、最も大きいものに、なつて居たのである。

誓內といふ所へ來て、長夜の宴を張つて居たので、ヘンリウクの來襲は、少しも知らなかつたが、常に注意深い奴であるから、部下の二三人を、川向ふへ出して、警戒の網は、張つて居たのである。

誓內は、チカプナイと呼ぶ。幌滿の東に當り、樣似の領域は、此地に盡きて居るが、地勢の上からすれば、幌泉に屬す可きものである。

部下のものは、ミスコナの前に出て、しきりに其雄を稱し、ヘンリウクを、惡くいふて居る。

『お前等は、ヘンリウクを、輕く視て居るが、彼は、少しも油斷のならない奴だ。忍耐の强い、剛情な奴であるから何時、襲ふて來るかも知れない。お前等は、怠りなく警戒して居れ』

『酋長、それは餘計な、御心配といふものです。ヘンリウクの力は、だん〳〵弱くなつて、部下のものも少なゝ、昨今の狀態では、自滅の外ありますまい。若し、襲ふて來るにしても、酋長の弓と槍が、ありますから、少しも恐れるには及びますまい』

『イヤ、さうでない。油斷は大敵といふこともあるから、敵を、恐れる方が、却て味方の勝になるものだ』

『萬一の事がありましても、こちらには、會所の松村さまが、附いて居ります』

『それは、左樣ぢや』

『まア、大きいので飲んだら、よいでせう』

『うむ、今宵の月は、よく光つて居る』

大きい盃を取つて、酒を注がせた所へ、かねて配置して置いた、物見の部下が、歸つて來た。

『大變ですぞ』
『何だ』
『ヘンリウクが、襲ふて來ました』
ミスコナは、思はず立ち上つた。
『敵が來たか』
『ハイ』
『よし、一同支度しろ』

七

黑狐の皮で造りし、胴服を着て、手槍は、背に負ひ　半弓を携へて、酋長のミスコナは、誓内を離れ、數十名の部下を引卒して、幌滿別川の畔へ出ると、すぐに散兵を敷いて、みな埋伏させた。

地理に明るく、部落戰に馴れて居るから、その指圖には、頗る慧敏な調子が見える。集團した部隊が、それと同じ部隊に向つて、鬪ふのとは違つて、内地人の考へとは、非常に隔たりがある。

德内は、配兵の手續きを終ると、一人のアイヌを、案内者として、誓内に近き、川畔にまで進んで來た。

折柄、蘆笛の音が、物悲しげに聞えた。同時に、吶喊の叫びが、夜の靜寂を破つた。さては、どこかで衝突が起つたものと、氣を沈めて、德内は、考へて居たが、その吶喊は、北の方面に、はげしく聞えるので、ヘンリウクの進んでゆく、それを妨げる、鬪ひに違ひない。

『留藏ッ』
『ヘー』

『お前は、一同と共に、ヘンリウクを、援けてやれ』
『ヘー、船長は……』
『わしは、少し考へがあるから、此處に殘つて居る』
『危ねえと思ふが、よろしうごぜえやすか』
『わしのことは、心配いたすな』
『それでは、行つて來ます』
『負けるなッ』
留藏は、腕を叩いて、
『大丈夫です』
『日本人といふことを、忘れるなよ。はやく行け』
『ヘー』
此一隊は、すぐに駈け出した。
跡に殘つた德内は、アイヌと共に、高い丘の上に立つた。遙かに見ゆる、一團の人影、少しの動搖もなく、只だ一二の人らしい影が、時々うごくのを見るばかりだ。
『ははア、那れが、本營ぢやな』
と、獨り言。
さらに、十數間を進んで、欵冬の葉の下に、姿をかくした。直徑二尺以上、高さは六尺位もあらうか。姿をかくすには、此上もないのである。
しばらく息を呑んで、かくれて居る所へ、ガサ〳〵音をさせ乍ら、雜草を押分けて、一人のアイヌが出て來た。

德内は、それを遣りすごして置いて、

『やツ』

と、拔打ちに斬つた。

血煙り立てゝ倒れる。

續いて現れたのが、五六人のアイヌであつた。

先に進んだ、仲間の一人が、斬り倒されたのを見ると、俄に吶喊をつくつて、德内のかくれて居る所を、取り圍んだ。

一二の奴が、欵冬の葉を、押退けて進み入る。それと見て、德内は、躍り出た。

『わツ』

と、聲を上げて、彼等が襲ひかゝるのを、德内は、左右に斬り倒した。

之れを見ると、一同は逃げ足になつた。德内は、之れを逐ひかけたけれど、その疾いことは、想像も及ばぬほどであつた。

同じことを、いくたびか繰返しつゝ進むほどに、いつか知らず、幌滿別川の畔に出た。德内は、大きい岩の上に、しばらく息をやすめた。

春の夜の朧にかすむ、月影に透かし見ると、靜かに眠る原野、布を敷いたやうに、流れて居る、脚下の流れ、何ともいへぬ風情である。

時々に起る、吶喊が、その靜寂を破り、各所に燃え上る、火の手は、鬪ひのはげしさを、思はせた。

やがて、德内は、岩の上に立つた。刹那に、びゆツと弦音がして、飛び來る矢一筋、咄みに體をもぢつて、その一矢は外したが、續いて飛び來る、二の矢は、德内の肩先きへ立つた。

『あツ』

と、叫んで、德内は、二三歩よろめくと、足を滑らせて、どツと落ちた。下は幌滿別川の流れで、德内の姿は水にかくれて、行方も知れなくなつた。

十數間ほどの上手から、ぬツと、身を現したのは、例のミスコナであつた。

『ニヤリ』

と、笑つて、川の流れを見つめた。

アイヌは、ブシヤと呼んで居るが、矢の根に、毒を塗つたのを、ミスコナは、常に携へて居た。弓術に達した彼は遠く月の光に、狙ひを定めて、美事に德内を、刺貫めたのであつた。

八

ヘンリウクの進んだ方面は、どこも、大勝利であつた。

留藏等の一列が、加はつてからは、一段の强味を增して、連戰連勝の勢ひで進み、はやくも、誓内の本部へ、どツと襲ひかゝつたが、此時、ミスコナは、既に在らず、十數名の部下が、踏み留まつて奮鬪するのを、留藏等は、滅茶苦茶に、叩きしめてしまつた。

今は、一人の敵なく、殘るものは女子供と、家屋ばかりであつた。

『オイ、兄貴ツ』

『何だ』

『うまく行つたな』

『そこが日本人だ』

『莫迦に威張るぢやねえか』
『當りめえよ、こんな時に威張らなけりやア、威張る時はねえ』
『併し、アイヌも強い所があるぜ』
『一騎討になると、力盡ぢやア勝ねえ位ゐのが、いくらも居るやうだ』
『これから先きの事もあるから、お互に褌をしめて、かゝらうぜ』
『本統だ』
『船長は、どうしたらうな』
『こりやア、強いのだから、己れ達とは違つて、思ひ切り、やつて居るだらうよ』
『酋長の姿も、見えねえが、どうしたンだらう』
『今に、やつて來るだらうから、そんなことに構はずと、那の家へ、火を放けて、燒いてしまはうぢやアねえか』
『よからう』
『それぢやア、やツつけよう』
これから、火を放けにかゝつた。燃え草を集めて、いよ〳〵火を放けかけた時、ヘンリウクは、駈けつけて來た。
『待つて下さい』
『オー、酋長ツ』
『火を放けてはいけません。はやく消して下さい』
『ゑツ、火を放けちやア、いけねえのか』
『いけません』
『なぜかな』

『神樣の御心に背きます』
『へー』
『ハ、ハ、はやく、消して下さい』
何の事か、よく解らないが、とに角、火を消しにかゝる。家についた火は、やうやく消し留めたが、四邊の雜草に、火が散つて、それが風に煽られて、燃え上るのは、いかんとも爲ることが出來なかつた。
『酋長ツ』
『はア』
『家に放けた火は消したが、草へ廣がつてゆく火は、どうにもしやうがねえ』
『それは宜しい。家の火丈けは消さぬと、神樣の御心に背きます』
『こんなに、戰をやつて居乍ら、敵の家を燒いちやア、いけねえのかね』
『敵が、既に無いのに、家を燒くのは、罪の一つであります。殊に、マチやメノコには、何の怨みもありません。それを苦しめることは、神樣の御心に背くのです』
『なる程』
『けれども、此戰は、シヤモの力で勝ちました。有難うございます』
ヘンリウクの部下は、多くの捕虜を連れて來た。味方の死傷を調べると、十四五人であるが、敵の死傷は、それに二倍するだらう、との見込であつた。
ヘンリウクは、捕虜の一人、コトンリウといふものを、前へ連れ出させて、之れから、ミスコナの行方を、訊べるのであつた。
『酋長は、どこへ行つたか、知つて居るか』

『樣似へ引上げました。それは、よほど前のことであります』

『負けたから、見切をつけたのか』

『左樣です』

『ミスコナは、眞の剛勇である。これ位ゐの敗戰に逃げるやうな、弱い者ではない』

『戰には負けたが、シヤモの大將を射留めたので、會所へ屆ける爲めに、引上げたのだと聞きます』

『何ツ、シヤモの大將を、射留めた』

『ハイ』

ヘンリウクも驚いたが、留藏等の驚きは、一と通りでなかつた。

所へ、德內に從いて居た、アイヌが歸つて來たので、事情は判つた。

斯うなると、戰を爲るよりか、德內を、搜し出すのが第一だ。それに、ミスコナが、會所へ訴へた後のことも、想像すれば恐ろしい事にもなる。

ヘンリウクと、留藏とは、二た手に別れて、これから德內を、搜しに出かけた。會所の役人が、ミスコナの爲めに、どんなことを仕向て來るか、それを考へると、德內の生死が、此部落の存亡に關する譯だ。

戰には勝つたが、ヘンリウクは、悄れ返つて居る。留藏等の力落しは、それよりも、一だん深いのであつた。

快僧

呑海

一

日高の東北は、襟裳山脈に劃られ、隣りは十勝である。西北は、石狩と膽振の二國と連り、南方の一帶は、傾斜面をつくつて、海に面して居る。

沙流から、十勝の堺まで、海岸四十四里、全く南に向つて居るから、氣候も暖かく、北海の名物になつて居る、濛氣も、他と比べて、はやく晴れるから、太陽を仰ぐことが多い、日高の地名は、それから起つて居るのだ。

幌泉から南を、口蝦夷と稱し、北の方を、奥蝦夷と、呼んで居たのである。襟裳岬を隔てゝ、風土、人情、言語、すべてが異なり、口と奥の別は、判然として居た。

佐瑠は、蝦夷創業の地とされてある。アイヌの祖先ともいふ可き、女神の始めて、此地を開いた、といふことが、傳へられ、最も其民族の多く、古代から住んで居ることは、舊記にも載せられてある。

幌滿別川が流れて、海へ注ぐ所に、アホイ岬と、いふのが在る。

アイヌの能く使ふ、丸木舟に乘つて、漁に出て來た、二人連れ、月夜の漁に、多少の獲物があつて、今ま引上げて來たところである。

川底が、可成りの斜面になつて居るから、流れは疾い。二人は、淺瀨に下りて、舟には、長い綱をつけ、それを肩にかけて、川上へ、逆昇つて行く。

月は落ちて、夜は明けかけた、端も知れぬ、海の彼方には、赤味を帶びた、黃色い雲が、棚引いて居る。

舟底が、砂に吸付いて居るのか、それともに、何か引ツかゝつたのか、曳綱は、一ぱいに張られて、二人の力は、有る限り出して居るけれど、舟は、さらに動かない。

『オイ、お前、ちよいと見て來てくれ』

『へー』

一人のアイヌは、すぐ川へはいつて、舟へ近付いた。

『旦那ツ』

『何だ』

『人間が、引ツかゝつて居ます』

『ゑツ、それは大いことぢや』

『一人では、ちと無理ですから、旦那も、手傳つて下さい』

『よし、今行くから、まつて居れ』

忽ちに川へ、はいつた。

一人の力よりは、二人の力が強い。やうやくにして、溺れた人を引上げ、舟へ載せて、岸へ押して來た。

『お前は、足の方を持て、わしは、頭の方を持つから、よいか』

『へー』

生ひ茂つて居る、草を伏せて、その上へ寢かした。

『旦那、助かるでせうか』

『まア、待て……』

胸から腹へかけて、しきりに撫ぜて居たが、ニツコリ笑つた。

『大丈夫、助かるぞ』

『さうですか』

『この人は、シヤモぢやな』

『旦那と同じですか』

『うむ』

使はれて居るものは、アイヌであつたが、介抱して居る方は、日本人であつた。

斯うしたことに、經驗のある人らしく、しきりに胸から腹を、撫ぜて居るうちに、溺れた人は、水を吐いて、手足を動かしかけた。

『やツ、肩に矢が、立つて居るぞ』

と、いつて、すぐ引拔いたが、その痛さに感じたか、細く眼を開いて、びくツとしたが、また眠つてしまふ。

藥のやうなものを出して、口に入れ、水を掬つて飲ませた。別に、塗藥を出して、洗つた疵口へ、つけてやつた。

『此處では、どうすることも出來ぬ。とに角、歸ることにしようか』

『それが、よいでせう』

『お前は、この人を負ふてやれ』

『へー』

身輕でも、曳く舟の重い上に、また背中には、人を負ふたのであるから、アイヌの勞は、一と通りでなかつた。

『旦那、シヤモは、大丈夫ですか』

『お前が、さうして背負ふてやると、體の溫味で、その人が溫まるから、自然の療法になつて、家へゆくまでには、助かるのぢや』

『へー、さうですか』

『呼吸は、たしかぢやからな』

斯ういはれると、自分の爲めに、人の助かることは、正直なアイヌとして、どの位ゐ嬉しいか知れぬ。

そのうちに、一つの部落へ着いた。川に沿ふては居るが、二三丁は、離れて居る所で、少し高い丘であつた。

助けられたのは、德內である。

一一

德內を、助けた二人は、どういふ人であるか。旦那と呼ばれて居る方は、純な日本人で、それに使はれて居る方が、アイヌであることは、すべての動作や、容貌でも判る。只だ不思議とすべきは、日本語を、自由に使ひ得る、一事であつた。

狹い家ではあるが、二人住ゐには、充分であつた。それにしても、只ツた一室、四五人は、雜居し得るから、起居に不自由は、ないのである。

袈裟や黑衣が、釣下げてある上に、錫杖の如きものもあれば、鐵の如意もあつて、手造りの小さい箱には、佛像が納めてある。

萬死のうちに、一生を得て、此怪人物に、助けられた德內は、果して幸か不幸か。その正體の判らぬうちは、油斷のならぬ事ともいへる。

『シヤモの瘡は、大分良くなつて來ました』

『毒消しの藥は、わしのいふた通り、いくたびも、取り換へてやらねばならぬぞ。それ丈けは怠らずに、氣をつけてやつてくれ』

『へー』

『疵口を洗ふ、神の湯は、未だあるかな』

『これから、汲んでまゐります』

『それも、新らしいほど良いのぢやから、成可くは、朝夕に汲んで來て、貰ひ度い』

『へー』

『人の爲めは、やがて自分の爲めぢや』

『へー』

柔順なアイヌは、命ずる儘になつて居る。やがて神の湯を、汲んで來た。膏藥を脫つて、疵口を洗つてから、また膏藥を附けてやる。

それがすむと、藥を飲ませて、さらに食物を與へる。親切を盡した介抱である。四五日は、同じことを繰返して居た。

その間に、德內は、眼を開いて、四方の狀態を見た。また二人の顏も見たが、何もいはずに眠つてしまひ、二人も、强て話はしかけなかつた。

一日、德內は、大きい眼を開いて、二人の方を、ぢつと見て居た。

『痛みは、どうです』

『有難う。さらに痛みは感じませぬ』

『氣分も、はつきりしましたか』
『いろ〳〵と、御介抱に預つて、何とも御禮の述べやうも、ありませぬ』
『思つたより、疾く癒つて、此上もなき幸ひです』
『而て、足下は……』
『御覽になつた通りの人間ぢや』
『拙者は、最上德内と申して、奥蝦夷の探險に、まゐつたものであるが、不圖したことから負傷して、川へ落ち込み、すでに生命の無い所を、御助けに預つて、御禮の申しやうもない』
『それは、お互の事ぢや』
『足下は、日本人のやうで御座るが……』
『いかにも、日本人ぢや』
『そちらの御方は……』
『蝦夷人ぢや』
『どうして、御介抱をうけたのか、それが、不思議で御座る』
『あんたは、戰さを爲されたな』
『……』
『決して御心配はないから、明かに語つて下さい』
德内は、しばらく考へて居たが、
『イヤ、足下を疑ふ、といふ次第ではないが、敗戰の跡は、武士として語り度くなかつたのぢや』
『御尤とは思ふが、聞いて見たい』

『拙者は、松前藩の許しをうけて、奥蝦夷の探險をする爲めに、この海を、横切る途中、颶風に逢ふて、艪櫂へ折れつき、圖らずも、ヘンリウクといふ、アイヌの酋長と、親しく交り、それが緣の端となつて、ヘンリウクの敵、ミスコナと、鬪をはじめ、誓内の一戰には、慥かに打勝つたが、自分の不覺から、遠矢にかけられて、川へ落ち、流されてゆくうちに、意外の御助けをうけて、今日に至つた、次第で御座る』
『さては、想像いたした通り、開戰したのでしたか』
『左樣う』
『各所に起つた、火の手を見て、大概は、それと察したが、矢張りさうでしたか』
『ヘンリウクは、御承知で御座るか』
『よく知つて居る』
『ミスコナは……』
『それも、知つて居るが、ヘンリウクは、氣の毒な人、ミスコナは、心の良くない奴、わしの使つて居るのは、元ミスコナの配下に居た、アイヌぢや』
『ははア』
『併し、御心配は御無用ぢや。わしの使つて居る、アイヌは、善人ぢや』
之れ迄、話をつゞけて來ると、德内は、疲れたやうであるから、その日は、話を打切つて、德内を、しづかに眠らせた。

三

美濃國安八郡の生れで、幼い時から、佛門に入つて、難業苦行の功を積み、一寺の主僧となる、資格は有ち乍ら、

それを避けて、雲水の身となり、國から國、寺から寺へ、渡り歩いて、一切の物慾から、放れた身は、俗界の人に、知り得ぬ、安心の境遇には、立つて居るが、不圖した動機から、奥蝦夷の探險を、思ひ立ちて、未開不耗の地を跋渉しつゝ、國後の端までも究めて、その歸途に、足を停めたのが、天明元年の冬であつた。

僧名は、呑海と稱して居るが、本名は、何といふたか判らず。生れたのは、美濃の國でも、家系や素性は、一向に明かでない。

僧俗の別はあつても、蝦夷へ、ふみ込んだ心と動機は、恐らく德内と同じであらう。幌泉から樣似へかけて、アイヌの尊敬をうけて、駐錫三年、呑海を視ること、生神の如く、アイヌの歸依は、實に深いものがあつた。

樣似へ、小さい家をつくり、アイヌを集めて、しきりに文字を敎へ始めた。アイヌの性質が、あまりに單純すぎて、無智に近いのは、文字のない爲めである、と視て、先づ文字の敎化から、始めたのであつた。

松前藩の役人は、アイヌの人望が、呑海に、傾いて行くことを、甚だ不快に感じたので、種々に手段をめぐらして、アイヌと呑海を、引放すことに努めたが、さらに其效目はなく、日を逐ふて、呑海を慕ふものは、多くなつてゆくばかりであるから、之れには役人も、頗る弱つた。

會所の長は、松村長十郎といふものであつた。算勘のことには明るいけれども、武士の心得は、甚だ淺い方であつた。

虐げることには、拔目なく、殊には、女色を漁る癖があつて、數名の妾があり、みなアイヌの女であつた。そのうちには、既婚の女もあつた。

藩の威力を背景にして、威嚇、誘惑、あらゆる手段を盡して、アイヌの妻を奪ひ、之れを寵愛して居た。本夫は、それが爲めに、狂死してしまつた。

ミスコナは、初めヘンリウクの慰下であつたが、自分の嫉妬、恐怖へ逐つて、先づ其心を慰へ、徐ゝに勢力をつく

り、終にはヘンリウクを、樣似の部落から逐ひ出してしまつた。

呑海はそ、の內狀を、よく知つて居るので、苦々しいことに思つて居た。ヘンリウクに屬する、アイヌは、変るがにやつて來て、呑海へ、松村の虐政と、ミスコナの橫暴を訴へるのであつたが、いつも呑海は、一同を慰めて歸し、さらにどう、しようといふ容子もなかつた。

一日、會所から呑海へ、迎ひのものが來たので、呑海は、すぐ出て行つた。

松村は、薄氣味惡いほど、丁寧に迎へて、しきりに呑海の機嫌を、取るやうに爲る。

『貴僧の如き御方が、斯ういふ土地に居られるのは、泥海のうちに、夜光の珠玉の在るにひとしく、實に無益なことだ、と思ふが、松前の方へ、出て見られるつもりはありませぬか、若し其御心があるなら、萬事は御引受けいたして、御送り申すが、何と思はれるかな』

呑海は、笑つて答へなかつた。

『お前のやうなものは、對手にして話すも、厭だ』といつた態度で、松村のいふことを、一笑に附してしまつた。けれども、今日の機會を逸しては、再び松村を、責める時は、容易に來ないものと、呑海は、考へて居たのだ。

『松村さん、拙僧には、どう考へても、腑に落ちぬ事がありますよ』

『ははア、それは、どういふことですか』

『貴下と、松前の殿樣とは、主從の關係であると、思つて居るが、左樣でせうな』

と、意外の質問に、松村は、眼を大きくして、呑海の顏を、見詰めた。

『左樣でせうな』

『申す迄もありません』

『而て視ると、貴下は、殿樣へ、忠義の心を以て仕へるのが、貴下の眞の心といふものぢや。が併し、貴下の爲るこ

とは、一つも其心が現れて居らぬ。こりや、どう思はれるかな』

『……』

『藩の御方針は、アイヌを虐げる、といふのに在るか、アイヌを治める、といふのに在るか、拙僧には、その區別さへ判らぬのぢや。殿様の御心は、拙僧にも、よく解つて居るが、どうしても解らぬのは、貴下の心ばかりぢやよ、ハツハ、、、、、』

普通のものが、斯んなことをいへば、すぐにも、松村の刀は、鞘を走つて、血を見るのであろうが、呑海の豪膽と膂力のすぐれて居ることは、松村も、よく知つて居るから、迂濶に手出しは出來なかつた。

と、いふて、この位の侮辱はないのであるから、松村は、何ともいへぬ、不味面をして居た。

四

『松村さん。アイヌを、可愛がつて下さい。虐げたり弄んでは、いけませんよ。拙僧は、一々例を擧げて、いふことは止めますが、アイヌは、皆な貴下を、怨んで居りますぞ。貴下を、喜んで居るものは、ミスコナ位のものでせう。ミスコナの娘は、今、不自由なく暮して居るが、心には、決して喜んでは居りませんぞ。親の爲めの生贄と思つて、貴下の懷裡に、抱かれて居るが、何時か、貴下に背くでせう。否、心は今でも、背いて居りますぞ。貴下は、殿様に代つて、この地を治める爲めに、來て居られるのぢや。貴下が、アイヌを虐げたり、或は弄んだりすれば、その怨みは、やがて、殿様の御身にかゝつてゆくのぢや。不忠不義、此上もない人として、いつか、其罰は下るに極まつて居る。拙僧は、好きから斯んなことを、いふのではない。つまりをいへば……』

『黙らッしやい』

[illegible]

『いはせて置けば、よいことにして、何を吐かすか』

『イヤ、さう怒るものではない』

『だ、だ、黙れッ』

『何か、お氣に、さはつたかな』

呑海は、思ひの外に、すまして居た。

松村の顏は、朱をそゝいたか、と思はれるばかり、顏を赤くしたのみでなく、呼吸も、頗るせはしくなつて居た。

『貴様は、アイヌを集めて、文字を敎へて居るが、あれは、今日限り、差留めるから、左樣心得ろ』

『文字を敎へては、なぜ惡いかな』

『なぜか、と聞くのか』

『左樣う』

『それは說明せぬ。藩の方針と、思つて居れ』

『ハツハ、、、、、、面白い方針があつたものぢや』

『面白いとは、何だ』

『さう激しては、話も出來ぬ』

『聞くには、及ばぬ』

『聞かぬといふなら、强て話はせぬことにするが、心を靜かにして、よく考へて見なさい。拙僧のいふことは、決して、間違つては居らぬ。貴下も、何時か後悔することがあらう』

『もう、よい、歸れッ』

『拙僧を呼んだのは、貴下ぢやッた。歸れといふなら、歸ることにいたす』

『はやく、歸れッ』
『承知いたした』
呑海が立ちかけると、松村は、ぐッと、睨みつけ乍ら、
『樣似に居ることも差留めるから、すぐ立退け』
『どこへ行けば、よいのか』
『勝手な所へ、まゐれ』
『勝手な所といへば、樣似が一番好きぢやが、それは惡いといふのぢやな』
『左樣だ』
『それでは、ゆつくり考へる事にしよう』
『併し、此地は、すぐ立退くのだぞ』
『それは、承知いたした』
悠然として、立上る呑海、まことに落付いたものだ。
『どこへ、行く』
『天地の間を、うろついて居る』
『先づ、どこへ行く』
『さ、この足が、何と答へるか』
松村も、いさゝか呆れた。呑海は、挨拶もせずに歸つた。
翌日は、部落のものを集めて、呑海の敎へをうけることを、堅く禁じてしまつた。多くのアイヌは、呑海を取卷いて、祭場に集れなかつた。

『どこへ行つても、心は通じて居るから、決して力を落すことはない。抽僧は、必要に應じて、何時でも現れる。必要がなければ、何時までも、かくれて居る。進退隱現、只だ天の命ずる儘ぢや』
役人が、やつて來た。集まつて居るアイヌを、逐ひ散らしてしまつた。呑海は、飄々として、樣似を去つた。
どうしても離れず、尾いて來たアイヌが、只つた一人、ブツトキといふ男であつた。德內を助けた時、呑海の傍に居たのが、そのアイヌであつた。
疵が癒つて、生氣の出た德內は、身の上話をした。怪僧も、一切を打明けた。呑海の素性は、略ぼ判つたので、德內は、呑海の指導を、うけることに決めた。
神の湯を、ブツトキが、汲みに出かけると、そこには、既に人が來て居た。

五

ブツトキは、神の湯を汲取つて、瓶へ入れた。
自分が、厚く信仰して居る、呑海の命令といふばかりでなく、圖らずも、助けて來た、日本人の疵は、この神の湯に依つて、追々癒えて來ることの樂みが、ブツトキの心を勵まして、道程の遠いも厭はず、一日として、神泉の汲取りを、怠らなかつた。
大きい瓶を、背に負ふて、小さい瓶は、手に提て居る。道路らしい道路はなく、其所に、住んで居ればこそ、方角も間違へずに、往來はするやうなものゝ、どちらを見ても、鬱蒼たる森林と、雜草が長く生茂つて居るばかりで、丘陵と、河の流れに在つても、勝手の判らぬものには、進退の妨げをなして、さらに往來の目標にはならなかつた。
『オイ〳〵、未だ道路は、見付からねえか』
『道路らしいものは、藥にしたくもねえぜ』

『弱つたな』
『今日で、二日も歩いて居るが、人間らしいものに逢はねえのは、不思議だ』
『別に不思議といふことはあるめえ。人間の居ねえ所なら、逢はねえのが當前ぢやねえか』
『變な理窟を、いふなア止せよ』
『變な理窟は、いひたかねえが、斯う腹が減つちやア、やり切れねえ』
『船長は、どうしたらうな』
『那のくれえ偉くなると、却々死ぬもンぢやアねえから、それは安心だが、どこにどうして居なさるか、はやく逢ひてえな』
『毒矢にかけられた、といふのだから、死んでるかも知れねえぜ』
『莫迦な事を、いふもンぢやアねえ、そんなことをいふと、いひ當てるかも知れねえから、まア、いはねえこツた』
『それも、左様だな』
留藏、政右衞門、善吉、平太郎の四人は、例のアイヌを連れて、德内の在所を、捜しに來たのであるが、どうしても判らないから、弱り切つて居るのであつた。
少し高い丘があつた。樹木に掩はれて居るから、遠く展望するには、餘り便利ではないが、アイヌは、その丘へ登つて、しきりに四方を、眺めて居たが、思はず大きい聲を、張上げた。
『シヤモ、シヤモ、人が居ります』
丘の下に、草を敷いて、休んで居た連中の耳へは、天來の福音である。
『留ツ、何か居る、といつてるぜ』
『さア、行つて見よう』
『よからう』
一同は、丘の上へ、駈け昇つた。
アイヌが、見付けたのは、瓶を脊負つた、ブツトキの姿であつた。
之れを見ると、只だ嬉しさが、先きに立つて、何を考へる、といふ餘裕もなく、一同は、バラ〳〵駈け出した。
樹の枝を、押し除け、雜草を、ふみしだいて、やうやくに逐ひつくと、ブツトキの方でも驚いて足を停めた。
見馴れぬ、日本人の風態を視て、はツと思つたが、アイヌが附いて居るので、少しは胸の動悸もをさまり、ブツトキは、ぢツと一同の容子を、見て居た。
先づ話は、ヘンリウクと、ミスコナの戰ひから始まつて、德内の事に及んだ。
『斯ういふ譯で、吾人は、德内といふ人を、尋ねて居るのだが、お前は、それについて、何か聞いたことはないか』
『あります』
『ゑツ、あるのか』
『ハイ』
『どういふ事が、あつたか』
『わたしが、今ま背負つて居る、神の泉は、その人の疵を、洗ふ爲めに、汲んで來たのであります』
『へへー、それは有難い話だが、左様すると、德内といふ人は、お前の家に居るのだな』
『わたしの家ではない』
『どこの家だ』
『わたしの仕へて居る、有難い生神さまの家であります』

『その生神さま、といふのは……』
『呑海とおツしやる、御方であります』
『どこの人か……』
『シヤモであります』
『シヤモといやア、日本人だ』
『左様です』
『この一同は、德内といふ御方の家來だから、はやく連れて行つて、貰ひ度い』
『家來といふのは、何の事ですか』
『お前が、呑海といふ人に、仕へて居る通り、この一同は、德内先生に、仕へて居るのだ』
『解りました』
『解つたら、連れて行け』
『ハイ』
ブツトキは、一同を案内して、歸る事になつた。

六

德内の疵は、未だ全癒したとは、いへないが、既に毒は去られて、疵口も、癒合しかけて居るから、再び疵に、惱む恐れはなかつた。昨日からは、心氣も晴々しくなつて、今は、全く元の德内に、なつて居た。
呑海と對座して、しきりに話込んで居た所へ、ブツトキは、一同を案内して、歸つて來た。
留藏は、懲戒の葵が見るやゝ、愚拙な聲を出して、喋り上つて騒ぐのであつた。

『船長ッ』
『オー、留藏か』
『みんな、來ましたぜ』
その跡を見れば、みな揃つて居るから、德内も喜んだ。
『とんでもねえことに逢つて、さぞ困つたでせうな』
『この御方の情けで、助けられたのぢや』
留藏等は、呑海の前へ、手をついて頭を下げた。
『どうも、有難うごぜえやした』
詞は簡單でも、誠意は、溢れて居た。
『最上さんの疵も、存外に輕かつたので、斯う早く全快したのは、何よりの事であつた。それにしても、良く尋ねて來た』
『ずゐぶん骨が折れやした』
『左様であらう』
『那のブツトキ、といふ人に逢はなかつたら、判らずに引上てしまつたかも、知れなかつたのです』
『神佛の御加護といふものぢや』
『全く左様です』
德内は、留藏に向つて、その後の容子を尋ねた。ヘンリウクの部落のものは、どうなつたか、といふのが、第一の要點であつた。
『いくさは、初めのうち大勝利でしたが、ミスコナといふ奴が、船長を、毒矢にかけてから、といふものは、大した

勢ひで、いくさは盛返されて、終にヘンリウクの負けとなつた。一旦は、幌泉へ引上げたが、今度は、ミスコナへ會所の松村といふ、役人が加勢をしたので、トウ〳〵大負けとなつて、ヘンリウクは、どこかへ逃げてしまつて、その妻は、ミスコナの爲めに捕虜となつて、樣似の本陣へ、連れて行かれた。此事は、跡で聞いたのですが　今では幌泉へ、會所の番屋が出來て、ミスコナの酋下の奴が、詰めて居る、といふ事であるから、ヘンリウクの部下はどうなつたか、實に殘念とは思ふが、船長の行方が判らないので、我れ〳〵は、船長を尋ねて、食ふや食はずの苦勞をして、やうやくお眼に、掛れたのは嬉しいが、ヘンリウクは、可哀想なことをいたしました』

留藏等の物語つた大要は、斯ういふ事であつたが、德內は、聞く事毎に切齒して、ミスコナと松村の橫暴を、憤慨するのであつた。

『もう疵は癒つて、體も、元の通りになつたから、すぐに押出して、ヘンリウクの復讐をして遣はさう』

『どうか、さうして下さい』

『お前等には、もう一と働きして、貰はねばならぬ』

『一と働きでも、二た働きでもいたしやすから、やり直しのいくさを、やつて下せい』

德內は、呑海に向つて、

『お聞及びの通りで、これから復讐の爲めの一戰を、いたさうと考へるが、いかゞでせう』

『まア、待ちなまへ、わしには、少し考へがあるから、今すぐにはじめることは、控へた方がよからう』

『而て、その考へといふのは……』

『今夜のことに、いたしたい』

呑海には、何か深い考へが、あるらしく思はれた。けれども、此場合には、少し云ひかねるのだらう。德內にも、それは解つたから、相談は、打切つてしまつた。

夜に入つてから、呑海は、德內を誘ひ出して、一つの丘陵の上に出た。

『ミスコナの一族を懲らすばかりでなく、松村にも、嚴重な制裁を加へて、アイヌ民族に對する、藩の役人が、今迄に行つた、暴虐な政治を、根本から改めてやり度い。それを爲るには、此一擧に限る』

と、いふのが、呑海の意見であつた。德內は、一も二もなく、之れに同意した。

復讐の一戰

一

足利の天下が、殆んど混亂して、全國の統一を、失ふた時、津輕藤崎の安東貞季が、南部守行に逐はれて嘉吉三年に、始めて海を渡り、蝦夷へ、足をふみ入れた。それから、内地との聯絡も、明かに附いて、蝦夷は、全く日本の領地といふことが、歴史的にも、また地理的にも、定つた譯である。

其後ち、安東倒れて、若狹の人、武田信廣が、此地に入り、安東に代つた。歴史に謂ふ所の下國は、安東の事であるが、信廣の子、廣光の代になつて、福山へ移り、其曾孫慶廣に到つて、松前を姓とし、福山も、亦た松前と、改稱したのであつた。

蝦夷の一帶が、松前の、所領となつてから、アイヌ族の虐められたことは、實に酷しいものであつた。

松前の城下は、しばらく措いて、ずツと奥地へはいるほど、藩の小役人が、權威を揮つて、横暴の限りを行つた。

ヘンリウクと、ミスコナの爭ひも、要するに、會所役人の横暴が、その因をなしたのである。

德内といふ、俠骨の武士を、味方に得たので、一時は、ヘンリウクの兵は、頗る景氣よく鬪つたが、德内の行方が不明になつてから、形勢は逆轉して、ミスコナの有利となり、終に、ヘンリウクは敗走して、幌泉へ引上げた。

ミスコナは、さらに松村の應援を得て、幌泉へ攻めて來た。その默ひも、ヘンリウクの負けとなつて、部落のもの

は四散し、家は燒かれて、その妻は、ミスコナの手に、捕虜となつてしまつた。

ヘンリウクは、辛うじて敵の包圍から遁れ、一時は身をかくして、死は免れたけれど、今は如何とも爲ることが出來ない。妻子の身の上も心配にはなるが、それよりも悲しいのは、部落の全滅であつた。

アイヌ民族の名家として、僅に殘つたものが、斯かる始末で、全く滅びてしまつた、とあつては、祖先へ對しても、申譯がない。何とかして回復の一戰は、試み度く思ふが、頼みとしたシヤモのサムライは、敵の毒矢にかゝつて、行方知れずになつたばかりでなく、その配下のシヤモは、サムライの行方を、尋ねに出かけて、之れも消息は絶えてしまつた。假りに、サムライの行方は判つて、引上げて來た所で、燒かれた部落の跡を見ては、手も足も出まい。どう考へても、自分の一身は勿論、部落の滅びることは、もう定まつた運命として、あきらめる外はなからう、と、ヘンリウクは、自殺の覺悟までしたが、また思ひ返へした。

懷裡から取出した、金色の鍬先を、ぢつと見詰て、

『部落は滅びても、また、自分は死ぬにしても、この寶丈けは、誰れかに渡して、置き度い。たとへ、暴力を揮つて、一時は、大きな權力を握るものがあつても、この寶を、持つて居なければ、眞の權力者ではない。せめて之れ丈けは、何人かを見立てゝ、渡して置き、他日の回復は、自分の手に依つて爲されずとも、この寶を持つものゝ手に依つて、爲させ度いものである』

と、ヘンリウクは、深くも思案を定めて、自殺は、見合はせる事にした。

いづれにしても、戰ひのほとぼりを避けて、自分へ對する、詮索の手が、いくぶんでも寛かになつてからでなければ、うつかり出て歩くことも、危險である、と考へて、樣似の山へはいつて、幾日かをすごしたが、長く匿れて居ることは、自分の感情が、どうしても許さず、疲れた體を、無理に引起して、山を出かけた。

幌滿別川の流れに沿ふて、森林や雜草のうちに、身を忍ばせつゝ、アホイ岬近くまで、やつて來た時、遙かに人の

足音が、聞えるやうに思はれた。しづかに大地に俯して、その容子を、窺つて居ると、一人や二人の足音ではなく、近づいて來るに從ひ、草を分ける音までが、よく判るやうになつた。

雜草のうちに、身を俯して、よく視て居ると、それは、二人のアイヌを加へた、シヤモの一群であつた。

ヘンリウクは、思はず雜草のうちに、身を起して、大きい聲で叫んだ。

『ア、神樣は、われ等を救ふて下される。シヤモのサムライ、旦那さん、ヘンリウクであります』

と、いひ乍ら、不意に飛出した。

突然の事であるから、一群の日本人も、頗る驚いて、それ〴〵に、身構へた。

德內と、呑海は、少し遲れて來た。眞ツ先きには、留藏と平太郎が、ブツトキを案內にして、進んで居たのである。

『あゝ、ブツトキさん』

『おゝ、ヘンリウクさん』

兩人は、互に進んで、相抱いた儘ま、しばしは涙にくれた。

一

『オイ〳〵、冗談ぢやアねえぜ、どうしたんだ、髯ムチヤな大男が、抱合つて泣くなンて、何のこつた』

『あなたは、サムライ留藏さん』

『えツ』

德內の一列を、ヘンリウクは、みなサムライだ、と、思つて居たのだ。

『やツ、おめえは……』

『ヘンリウクあります』

『おめえは、無事であつたのか』

『サムライ旦那さんは……』

『今、跡から來るよ』

『毒矢にかけられても、死にませんか』

『大丈夫だ。平氣で居るよ』

『ふーむ』

『おめえは、ブツトキさんを、知つて居るのかね』

『元は、わたくしの部落に、居た人ですが、一時は、ミスコナの部落に、加はつて居ました。けれども、ブツトキさんは、まことに善い人であります』

『それぢやア、よく知つて居るのだな』

『はア、よく知つて居ります』

『左樣か、そりやア不思議な邂逅だ』

ブツトキも、進んで、

『ヘンリウクさんは、アイヌの仲間では第一の名家であります。わたくしの先祖も、長く部落を、一つにして居たのであります』

『よく、判つた。いくらでも泣きねえ』

平太郎は、手を拍つて、笑ひ出した。

『留ツ』

『なんだ』

『變なことをいふな』

『何故だ』

『いくらでも泣けは、をかしいぢやねえか』

『泣けツていふのに、をかしいツていふのは、なほ變ぢやねえか』

『左樣いはれりやア、そんなもンだ』

兩人には構はず、ヘンリウクと、ブツトキは、再び手を取つて、語りはじめた。

ブツトキは、ミスコナの心の惡いのに、愛想をつかして、その部落を脱けよう、として、いくら苦辛したか知れないが、その機會を得なかつたので、止むを得ず、附いて居るうちに、呑海の敎へをうけることになつて、心の安靜は得たが、會所の壓制と、ミスコナの横暴は、見るも厭になつた。幸ひにして、呑海が、松村と衝突して、樣似を、立退くことになつたから、呑海に附いて、一しよに立退き、それからは、二人住ひで、今日に至つたのである、といふ長物語をする。

ヘンリウクは、德內に逢ふた時から、今日迄の經緯を述べて、互の無事を祝した。

『サムライ旦那さん、もう來ますか』

『今、話をした偉い坊さんと、一しよに來ます。而かも、お前さん達の爲めに、いくさをして下さる、といふのです』

『シヤモのサムライは、義心に厚く、人情が深いから、わたくし等の爲め、これ迄に盡してくれる。實に有難い』

『今に、此所へ來られたら、よく御禮をいふが、よい』

留藏が、頓狂な聲を張上げて、

『船長が、來たぜ』

といふ、平太郎も、ブツトキも、一時に振返つた。ヘンリウクは、跪いた儘で、立上らうとしなかつた。

三組に分れて、最後の一と組が、德內と呑海、それに、政右衞門の三人であつた。

『船長ッ』

政右衞門は、前途の方を指さして、

『留藏が、駈けて來ますが、何かあつたのぢやアねえか。と、思ひやす』

『うむ、なる程』

所へ、留藏は、呼吸を切り乍ら、駈け寄つた。

『大したことに、なりましたぜ』

『いかゞいたした』

『いかゞどころのことぢやねえ、ヘンリウクさんが、居たンです』

『左樣うか』

『船長は、ひどく落付いて居るが、あッしは、驚きましたよ』

『戰ひに負けて、逃げて來たのか』

『その通りです。滅茶苦茶にやられた、といふこツてすが、ミスコナツて奴は、ヘンリウクの女房まで、かッ拂つて行つたさうです』

『それは、氣の毒な事ぢや』

『ヘンリウクさんと、ブツトキさんと、手を取合つて、泣いて居ますが、よッぽど變ですぜ』

『互ひに嬉しければ、その位の事はあらう』

『嬉し泣つて、譯ですね』

呑海は、留藏の無邪氣な容子を、ぢッと見て居たが、

『最上さん、行かうか』
と、いつて歩き出した。

二

ヘンリウクは、德内の顏を見ると、涙が先で、碌に、口も利けなかつた。
德内は、改めて、呑海を紹介した。ヘンリウクは、呑海の前に跪坐して、その救ひを求めた。
『拙僧に頼むよりは、最上さんに頼みなさい。拙僧には、お前達を、救ふ力はない。最上さんには、その力が、餘つて居る位ぢや。併し、拙僧も、手傳へる丈けは、手傳つて進ぜるから、安心なさい』
『どうぞ、お願ひいたします』
德内から、呑海へ、相談をかけたのは、此連中が落付く可き土地を、どこに選んだら可いか、といふことであつた。
『いよ〳〵となれば、樣似へ、攻め寄せることにならうから、それに、便宜の土地を選ぶのが、第一ぢや』
『拙者には、此邊の地理が、よく判らぬから、どの邊が良いか、といふ意見は御座らぬ。ひとへに、貴師の敎へに、待つ外はない』
『誓内に、近い所を、選ぶことにいたさう』
『萬事は宜しく、拙者は、御指圖通りにいたす』
『ブツトキを、案内者として、明日は、あの邊の地理を、よく視てまゐらう。その上で、部落をつくる所は、取り極めよう』
『會所の見廻りがあるから、よほど秘密にせぬと、邪魔をされませう』
『その惑れはある』

『それに對する策は、どうなさる』
『別に、策といふほどのことは要るまい。誓内に近く、而も、彼等の眼につかぬ所を選べば、それで可い。知れたら百年目ぢや、ハツハ、、、、、』
『其お覺悟さへ、承つて置けば、宜しい』
『今度の戰ひは、ミスコナばかりでなく、實は松村を、第一の敵として戰ふのぢやから、君の働きを頼むのぢや』
『ゑッ、松村を、第一の敵として……』
『うむ、禍の根を斷ち、併せて、今後の戒めになるやう。役人の心膽を寒からしめるのが、肝要である、と思ふ』
『御尤もぢや』
『アイヌの部落には、まことに良い風俗が、昔から傳はつて居たのぢやが、それを打毀してしまつたのが、ミスコナであるから、之れに對しては、思ひ切つた制裁を、加へて欲しい』
『承知いたした』
『我等の落付く土地が、いよ〳〵定まつたら、すぐにブツトキを、四方へ走らせて、ヘンリウク部落の殘徒を、集める事にしたい。君の連れて來た、アイヌを、その手傳ひに、つけてやり度いがどうぢやらう』
『拙者に、異存はありませぬ』
『君は、左樣でもあらうが、本人は、どうか判らぬ』
『彼れは、至極良いもので、決して拙者の命令には反かぬから、大丈夫で御座る』
『左樣か』
大體の相談は、それで終つた。
翌日は、呑海がブツトキを連れて、土地の檢分に出かけた。殘るものは、德内が指圖して、武器をつくりはじめる。

武器といふた所でどうせ大したものではない。手造の槍、火を放ける道具、或は木刀位のものであつた。

夜に入つて、呑海は、歸つて來た。

『最上さん』

『やア、おつかれでしたらう』

『よい所が、見付かりました』

『左樣ですか』

『家も、二軒ほどあつて、まことに地理も、よく此上もない好都合であつた』

『その家といふのは……』

『那アいふ所に、家のあるのは不思議ぢや、と思ふたら、ブツトキの說明で、すつかり判つたのぢや』

『どういふ家ですか』

『魔の住家ぢや、といふので、とうの昔から、住むものがないのぢやさうな』

『魔の住家、と申しますと』

『アイヌは、非常に迷信が深く、一たん左樣な風說があると、是も非もなく、それを信じてしまふ風があつて、那の家に住むものは、一命を失ふといふのぢやよ』

『そりや面白い。そんな家に住んで見たい、と思つて居たのぢやが、それは、頗る妙ぢや』

之れを、聞いて居た連中は、少し呆れた。

『且那、そんなところへ行つても、大丈夫でせうか』

『生きて居る魔を退治よう、とするものが、死んで居る魔を、恐れて何といたす』

『なるほど、左樣ですな』

呑海は、ブツトキに向つて、

『お前は、どう思ふか』

『佛を信じて居ります私には、魔の恐ろしいことは、解りませぬ』

『うむ、よし〳〵』

さらに、ヘンリウクに向つて、

『お前は……』

『わたくしの今は、魔の爲めに、苦しめられて居るのですから、この上の魔は、何とも思つて居りませぬ』

『存外、話せるな、ハツハ、、、、、』

斯うなつては、留藏も、弱い事がいへなかつた。

四

斯くて、部落とす可き、場所は定まつた。一同は、それ〳〵に手を分けて、先づ食物の用意にかゝり、家へ殘るものは、武器の製造をつゞけた。

ブツトキは、呑海に呼ばれて、その前へ出た。

『さア、お前の爲す可き、大きい役目がある。それは、外の事でもないが、ヘンリウクの部落に居たもので、先頃の一戰に、打負けた儘、行方をくらました人達を、尋ね出して、此處へ來るやうに、奔走して欲しいのぢや。先頃の戰ひには、何等の關係はなくとも、ミスコナに逐はれて、苦しんで居るものも、男女の別なく、すべて集まつて來るやうお前から、能く諭して貰ひ度い。强いものは强いものとして、使ひ道はある。弱いものでも使ひやうで、役に立つから、いづれにしても、會所の政治に、不滿を抱くものと、ミスコナに對して、怨みのあるものは總て集め

るのぢや。是れは、速いほど良いのであるから、懸命に奔走してくれ。お前の手傳には、松前から來た、アイヌを、附ける事にいたす。また萬一にも、見付けられて、難儀に及んだ時は、努めて逃げる事にいたせ』

『承知いたしました』

ブツトキは、充分に支度をして、例のアイヌを連れて、いよ〳〵出かける事になつた。

それからといふものは、毎日一人か二人のアイヌが、集まつて來る。ブツトキの遊說は、よほど順調に、運んで居るらしい。

十日餘りをすごすうちに、四五十人のアイヌが、集まつて來た。そのうちの半は、先般の戰ひに、關係のあるものであつたが、その他のものは、皆な會所の惡政に、家を失つたものと、ミスコナの爲めに、逐はれたものばかりであつた。

ブツトキは、歸つて來た。

『よく働いてくれた。さぞ疲れたであらうが、もう一と息、奔走してくれ』

『今度は、どういふことを致すので、御座いますか』

『今度こそ、お前に限ることぢや』

『拙僧も、一しよに行く』

『あツ、あなたさまも、一しよに……』

『……』

『うむ』

『へへー』

『一しよには行くが、拙僧は、かくれて居るのぢや。表面には、お前が一人で、來たやうに見せかけて、いよ〳〵と

いふ時になつて、拙僧が現れる、といふ事になるのぢやよ』

『行く先きは、どの邊で御座いますか』

『多くは、樣似と誓内に、近い所ぢや』

『ミスコナの部落で、御座いますか』

ブツトキは、眉を寄せて、考へて居る。

『別に、心配いたすことはない。斯ういふ風に、說いて廻るのぢや』

と、これから呑海は、ブツトキへ、秘策を敎へた。

『なる程、それは宜しいでせう』

『すぐに、取りかゝつて欲しい。その代り、この秘策が、うまく當れば、ミスコナの一族を逐ふて、ヘンリウクが、之れに代り、お前の家も、再興されることになるのぢやから、しつかりやつてくれ』

『有難う存じます。みんなの爲めですから、生命がけでやります』

樣似に近く、小さい漁村がある。

そこへ現はれたのは例のブツトキであつた。三四人の漁夫が、海岸から引上げて來た。ブツトキの姿を見ると、

『やア、ブツトキさんぢやないか』

と、聲をかけるものがあつた。

『うむ、ブツトキぢやよ』

『絕えて久しいことぢやが、どうしなすつたか』

『わしは、大い夢を見て來た』

『何ぢや、夢を見た』

『わしが、どこへ行つて居たか、それを知つて居るか』

『イヤ、そんなことは知らねえが、何でも鬼に、さらはれたのぢやアねえか、といつて　お前の事ばかり、その當座は、話合つて居たよ』

『わしは、神樣にさらはれたのだ』

『ゑッ、何ぢやツて……』

『わしが、此土地を捨てゝ今迄居たのは、それ、那の山奥ぢやよ』

遠く連なる、猿留山の方を、指さした。

『ふふーむ』

『まア、此處では話もなりかねる。どこかへ連れて行つて、貰ひ度い』

『それぢやア、わしの家へ來い』

『他にも、仲間のものが居やうから……』

五

ブツトキが、樣似を去る時、呑海の跡を逐ふて、行くことは、誰れにも語らなかつた。會所の松村と、はげしい衝突をして、それが爲めに去る、呑海を慕ふてゆく、といふやうなことが、萬一にも知れると、身の大事になるのであるから、唯だ何となく、立去つてしまつたのである。

妻子の無い身は、左樣いふ時に、頗る好都合であつた。ブツトキの家は、古い歴史を持つた、由緒のある舊家ではあつたが、一家に不幸がつゞいて、他人の庇護をうけるやうになつて、生活の苦しみは、言葉ではいひあらはせないのである。

獨身になつても、家丈けは持つて居たが、その家も、ミスコナの爲めに、奉ひ取られて、會所へ訴へるまで、爭つてはみたが、ミスコナの背後には、松村が、附いて居るので、その訴訟も負けとなつて、終には親しいものに賴み、日雇の人夫をして、稼ぐやうな身分になつてしまつた。

天を怨み、地を咀ひ、將た人を憎んで、復讐に燃ゆる心を、ぢつと堪へて居た所、呑海が、奥地の、歸途に、飄然として、樣似の部落に現れ、家毎に說いて、神佛の有難きことを、傳へた。

『人間には、衣食の外の生活がある。肉體は、米鹽の力に依つて、保つてゆくことが出來る。魚を食へば、肥太るとも出來るが、只だ其れ丈けの事では、人間の生活の眞の意義は、なして居らぬ。人間は、他の動物に、絶えて無いところの心靈といふものを、有つて居る。心靈の尊いことは、神佛を信仰して、始めて解る。只だ、食ふことに依つて、活きて居る、といふのみでは、人間に生れて來た甲斐は、さらに無いのである。心靈の生活を解して、茲に始めて、人間に生れて來た、有難いことが判る。それを知らう、とするには、神を拜し、佛を信ぜよ。この信仰に、生きる事が出來れば、何の爭鬪もなければ、恩怨もなく、曖かい天日に浴して、親しい骨肉と相擁して、安らかな生涯を、送ることが出來るばかりでなく、死後の苦しみも、忘れ得るのである』

と、說いて廻つた。

初めのうちは、この深遠な說法に、耳を傾けるものもなかつたが、呑海の熱心は、終に多くの信者をつくり、それからそれへと、說法し廻るので、呑海は、いつか知らず、生神として尊敬されるやうになつた。

信仰に依つて、心から歸依した、アイヌ等は、呑海の指示する道へ、深く〳〵進んでゆくのであつた。

ブツトキも、信者の一人となつたが、是れは又た家もなければ、妻子もない身であるから、呑海に從いて廻る所から一般の信者に比べて、その信仰も厚く、心靈の光明に接して、今迄の誤れる生活から、遁れ出ようとして、努めるやうになつた。

折柄、呑海は、松村に逐はれて、樣似を去ることになつたから、ブツトキは、人にかくれて、從いて行つたのである。

ブツトキの姿が、俄に見えなくなつた時、部落の人々は、いろ〳〵の噂さもしたが、結局は神隱しに會ふたものとして、行く先きを尋ねるものもなかつた。

呑海に、入れ智惠をされて、ブツトキは、どこまでも、神隱しに會ふた如く、僞りの宣傳をして廻つた。寧ろ痴鈍に近い、單純な性質のアイヌは、ブツトキの言を、深く信じた。

『今に、白髮の異人が現はれて、お前等に、幸福を授けてくれるから、その異人のいふ所には、絶對に服從するが、可い』

と、いふて、樣似に近い、部落のものを、悉く味方にしてしまつた。

獨身にして、系累のないものは、新らしい部落をつくつて居る、例の魔の家へ、送り込むやうにした。

魔の家を本據として、新らしい部落をつくり、德內は、酋長の格で、呑海は、顧問の如くなつて、多くのアイヌを撫育指導して居たが、本來の目的は、會所の松村を倒し、ミスコナの横暴を制して、樣似部落のアイヌを救ひ、ヘンリウクの復活を謀るにあつたことは、改めていふ迄もない。

會所の取締、松村長十郎の暴虐は、頭を抑へるものがないから、日に倍々、募りゆくばかりであつた。

松村の權力を利用して、ミスコナの威張ることは、さらに一段とはげしかつた。無智無力のアイヌは、松村と、ミスコナの間に狹まつて、ひどい眼に、逢つて居るが、それに反抗して、どうしようといふことは、別に考へても居ないらしく、只だ從順に、虐げられる儘に、なつて居た。

六

豪奢な生活、といふた處で、要が、蝦夷のことであるから、內地の其れに比べたら、大したことでもないだらうが松村の生活は、藩の家老位には、及んで居たといふのであるから、時代と土地の割合には、可成り豪奢を、極めて居たに違ひない。

未開の土地に、役人をして居るものが、第一の樂みとしては、女色である。酒には好き嫌ひがあつても、女色は、大概な人の好くもので、口に綺麗なことをいふものほど、却て汚ないものであることは、しば〳〵之れを視て居るが今も昔も、それに變りはあるまい。

交通の開けて、萬事に不自由なき、內地の都會でも、女色を貪るものは多く、人間唯一の樂みは、女色に在る、と考へて居るものも、少なくないやうであるが、邊鄙な土地へ行けば、殊にそれが、はげしくなるものである。

松村は、ミスコナの娘を、傍へ引付けて、長夜の宴を張ることは、殆んど連續的であつた。

その外にも、手をかけて居る女は、數人の多きに及んで居たが、ミスコナの娘には、殊に溺れて居たらしい。

『且那さま、酋長が、まゐりまして、お目にかゝり度い、といふて居ります』

『オー、左樣か』

『お父さまが、見えました』

『うむ可し。これへ通せ』

やがて、ミスコナは、その席へ通つた

『やア、ミスコナか』

『ハイ』

『さア、一ぱい飲れ』

大きい盃を献した。

アイヌは、すべて酒を好む。ミスコナは、大盃を、續けて受け乍ら、語りはじめた。

『旦那、ヘンリウクは、實に怪しからぬ奴であります』

『行方不明になつた筈ぢやが、また現れて來たか』

『どこに居るか、さらに判りませぬが、生きて居るには違ひない、と思ひます』

『たとへ、生きて居ても、今は、手も足も出し得まい』

『ナカ〳〵左樣でありません』

『少しは容子が、判つたか』

『シヤモのサムライが、尻押をして居るから、油斷を爲るな、といふ知らせがありました』

『ハツハ、、、、、シヤモのサムライが、それほど恐ろしいか』

『恐ろしいです』

『莫迦なツ、何が恐ろしい。殊に、そのサムライは、お前の矢にかゝつて、川に落ちた、といふではないか』

『どうも、助かつたらしいのです』

『ふふーむ、それは不思議ぢやな』

『確に手應はありましたが、生きて居る、といふ噂が、しきりに聞えるのです』

『那の川へ、落ち込んでは、普通でも助からぬ、といはれて居る上に、お前の毒矢をうけたのでは、助かる可き筈ない』

『それが、所かつて居る、と聞いては、少し恐ろしくなりました』

『なアに、恐れることはない。いよ〳〵となれば、拙者が出てゆくから、安心しろ』

『有難う存じます』

ミスコナは、ひどく德内を、恐れて居るらしいが、松村の權幕が強いので、いくぶんの安心はしたらしい。

『そのサムライといふのは、どういふ奴かな』

『殿樣の御許しをうけて、奥地へゆく人ださうです』

『拙者のところへは、まだ何とも御沙汰がないから、多分は僞りであらう』

『ヘンリウクを、はやく搜し出して、金の鍬先を、わたくしの物にしなければ、戰に勝つても、その甲斐はありませんから、どうか、旦那の御力を以て、一日も早く、金の鍬先が、手に入るやう、お願ひいたします』

『金の鍬先といふのは、それほど、大切なものか』

『アイヌの部落では、寶物の一つであります。之れを持つて居なければ、酋長になりましても權威のない譯であります』

ミスコナの娘は、口を入れた。

『お父さまの願ひを、どうぞ叶へてあげて下さいませ』

『よし〳〵、承知いたした』

夜は更けて、もう丑滿に近く、松村は、殆んど泥醉して、女の體に、倚りかゝつて居た。折柄、けたゝましい人の騷ぎが聞える。

『旦那さま、大變です』

『どういたした』

『火事が、はじまりました』

『莫迦ッ、火事が大變とは、何事ぢや』

『ヘンリウクの兵が、押寄せて來るのださうです』

『何ッ』

松村は、醉眼を開いて、立上らうとしたが、足元が定まらず、ヒヨロ〳〵とした。ミスコナは、すぐに駈け出した。

會所のうちは、混亂の態で、爭鬪はさかんにはじまつたらしい。

七

初めは、會所から離れた家に、火が起つて、部落のものは多く駈けつけた。そのうちに、又一ケ所、駈けつけたものゝ手は、二つに分れて、消防に努めた。

海岸へ、打寄せて來る、波は荒れて、風は、强く吹いて居た。竹や木を組合せて、家の形ちは成して居るが、いづれアイヌの住家であるから、固より大した建築物ではない。草を編んだ屋根は、火もうつり易く、一時に、ぱッと燃えあがる代りに、もみ消すことも、容易であつた。

白髮の異人が現れて、はやく立退く可きことを、諭して廻つた。

『家は燒かれても、事治まつた後は、さらに幸福が來るから、決して心配することはない。只だ、速に立退いて、身の安全を謀れ。家の道具は、持ち退ける丈け持つて、立去る事にいたせ。これは少ないが、元通りになる迄の手當ぢや』

と、いくらかの金を與へた。

かねて、ブツトキのいふて居た通り、白髮の異人は、俄に現はれて、こんなことをして廻つた。

アイヌが、立退いた家からは、忽ち火が燃え盛つて、部落の人足は、その方へ向けて、集中されてゆくのであつた。

會所の役人は、殆んど火事のある方へ、かけつけてしまつたから、會所へ詰めて居るものは、甚だ手薄であつた。

火事の叫びに、眼は覺めたが、酒の醉は、容易に醒めなかつた。それでも、松村は、さすがに武人であるから、長い刀を提げて、よろめく足を、ふみ締め乍ら、人騷ぎのする方へ、出て來た。

刹那に、一群の壯漢、それは、留藏を眞ッ先きに、平太郎、政右衞門、善吉等の數名であつた。

『何者かッ』

『手前は、誰れだ』

『拙者は、松村長十郎ぢやが、貴樣等は、何者か』

『何ッ、手前が、松村か』

應酬は、それ迄の事で、すぐに留藏は、松村へ、打つてかゝつた。その外のものも、留藏を援けて、ひとしく松村に向つた。

『さては、ヘンリウクへ味方する、奴輩ぢやな』

『知れた事だ』

松村は、二尺三寸もあらうといふ、業物を拔いて、斬り立てるので、留藏等は、一歩も進み得ず、次第々々に、後退りするばかりであつた。

所へ、飛鳥の如く、かけ來つたのは、德內であつた。

『留藏ッ』

『へー』

『其奴は、わしが引受けたから、退けッ』

『へー』

留藏等は、さツと退く。

『松村長十郎、よく聞け』

『何と』

『藩の威力を、笠に着て、横暴殘虐を極めた、汝に、天誅を加へるから、覺悟をいたせ』

『貴樣の名は、何と申す』

『無名の義人と知れ』

松村の醉は、すつかり醒めて居た。

德内を眼がけて、減茶苦茶に斬りかけた。相當に、腕の出來る奴が、死物狂ひの働きである。

右に左に、うけ流して居たが、德内の身は、閃く双の下を潛つて、松村の手前へ、つツと迫つた。

松村が、體を退かう、とした時、德内の拳は、松村の刀を打ち落した。

『これはツ』

と、驚く所を、また一歩せまつて、息を吐く間もあらせず、松村を投げつけた。

一と息入れ乍ら、控へて居た、留藏等は、一時に組み付いて、トウ〳〵縛りあげてしまつた。

『うまくやつたな』

『斯んな奴の一疋や二疋、へン、どんなもんです』

『ハツハ、、、、、』

『大層强くなつたな』

『ミスコナの奴は、どうしたでせう』

『うむ、さうどやー、慾張りを、懲してはならぬ』

『搜して見ませう』

『はやくしろ』

『へー』

『手に餘つたら、斬つてしまへ』

留藏等は、之れから、ミスコナを搜しにかゝつた。

會所へ、火を放けたが、それは納屋であつて、母家は、固より無事であつた。

松村の捕へられた、と聞いて、ミスコナは、娘と共に、火中へ身を投じてしまつた。

八

『留藏ッ』

『へー』

『はやく、火を消せ』

『もう消してもいゝのですか』

『左樣ぢや』

留藏等は、消火に努めた。

納屋へ放けた火であるから、捨てゝ置いても、大したことにはならぬ。丙地の町村のやうに、軒から軒へと、家が列んで居るのでもないから、いづれにしても、一軒燒けではあるが、部落の人に、長く心配させるでもない、と思つて、德内は、留藏等に命じて、火を消させた。

その間に、呑海は、松村の家へはいつた。宏壯の邸宅、といふほどの物ではないが、斯る邊鄙の土地には、贅澤す

ぎる建物である。

『最上さん』

『ハイ』

『何と、贅澤なものではないか』

『驚き入りました』

『要が、松前藩の小役人、どうして斯かる家を、建てたものか』

『アイヌを虐げて、不義の利を貪つて居たことは、之れを見ても、明かで御座る』

『實に怪しからぬことぢや』

留藏等は、火を消して、引上げて來た。

『船長、すツかり消して來ました』

『御苦勞々々、少し休みなさい』

『どうせ休むものなら、何も彼も、片付けてからにしてえもンです』

『何も彼も……』

と、德内が、つぶやくやうにいつて、考へて居る。

『例の奴を、どうかするンでせう』

『松村の事か』

『へー』

『左樣ぢやッたのう』

『忘れちゃッたンですか』

『忘れたのでもないが、彼れの處分は、跡廻しにしたのぢや』

『しよびいて、來ませうか』

德内は、呑海の意見を、問ふた。

『一と思ひに、處分した方が、後日の祟を除くことにもなつて、部落の人々の爲めにもならう』

『那アいふ奴は、助けて遣はしても、その恩に感じるやうなことはなく、却て仇に思ふものであるから、刀の錆にいたした方が、よいぢやらう』

『吾人に、仇を持つのは可い、として、無智のアイヌを、ひどい目に逢はせる恐れがあるから、一と思ひの處分をした方が、却て後日の爲めにならう』

兩人の考へは、全く一であつた。

德内に、いひ付けられて、留藏等は、繩付きの儘、松村を、引きづるやうにして、連れて來た。

長い間、アイヌを苦しめ、不義の快樂を、貪つて居た、天罰は免れ得ず、松村が、最期の時は、近づいて來た。

髮は亂れ、顏は青く、德内に、ひどく投げつけられた時、右の腕を挫いた上に、留藏等が、力にまかせて縛りあげたので、繩目は、皮肉へ喰ひ込み、その痛さに堪へかねて、恰で死人のやうに、なつて居た。

先づ呑海から、口を開いた。

『わしを、見覺えて居るかな』

聲をかけられて、松村は、顏を上げた。

『やツ、お前は……』

『呑海ぢやよ』

『……』

『わしのいふたことを、少しは思ひ當つたか』

『……』

『やがては、斯うなる可き運命であつた。それを敎へて、悔い改めさせよう、と思ふたのぢやが、お前は、それを聞かなかつたのぢや。もう今日に相成つては、いかんともいたし難い。多年の積惡に對して、その酬ゐが來たものと諦めて、最上さんの制配をうける、覺悟をいたすが、可い』

『拙者は、松前家の臣である。素浪人や賣僧の制配は、うけぬ』

『たとへ、何といふても無益の事ぢや。今は、釜中の魚も同然、男らしい覺悟をいたせ』

『斬るも、打つも、其方の隨意ぢや。我れから進んで、制配はうけぬ』

一身の自由を失ひ、この場に臨んでも、頑强に突つ張る所は、松村にも、武士らしい魂があつた。

此時、德內は、しづかに進んで、松村の繩を、解いてやつた。

『さア、いましめは解いて遣はした。潔よく切腹をいたせ』

『腹は切らぬ』

『然らば、斬るぞ』

『それは、其方の勝手ぢや』

『よし』

德內は、一刀を取つて、立ち上つた。

九

松村は、德內の爲めに、斬られてしまつた。惡惡の斃るとはいひ乍ら、哀れな最期であつた。

配下の役人は、いづれも慄へ上つて、誰れ一人として、手向ひしようとするものもなく、平生から貪慾の松村は、自分のみ樂んで、配下のものに惠まなかつたので、斯ういふ時に、自ら進んで、松村を救はう、とするものは、唯の一人もなかつた。

納屋の燒跡へ、松村の首は梟されて、その傍へ、制札が建てられた。

天來の神使、此に下つて、惡虐なる政道に苦しむ、アイヌの一族を救ふ

惡政の妖魔、松村某の屍を曝して、後の戒めとなす

斬魔道人

と、記した。

松前藩へ對しては、呑海の名を以て、顚末を悉した、屆書を認め、之れを、會所の役人へ、託して、藩へ屆けて貰ふことにした。

小役人を集めて、呑海から、將來を戒め、今後と雖も、アイヌを虐げるものがあれば、忽ち來つて、松村と同じやうに、制配を加へる、といふことを、申し聞かした。

一同は、これから、新しい部落へ、引擧げて來て、善後の始末を、篤と相談することになつた。魔の家へ、それ〴〵集まつて來たものは、數十人の多きに及んだ。

日本人は別として、アイヌばかりを招いて、呑海から相談をはじめたが、彼等には、何の意見もなく、只だ呑海の命ずる儘に爲る、といふのであつた。

『ヘンリウクさん』

『ハイ』

『お前は酋長の位から退いて、ブツトキに、金の鍬先を讓ることになさい。お前の娘は、ブツトキの妻として、長く

此部落に留まることに爲るがよい、と思ふ。お前の妻は、やうやく取戻すことを得たが、矢張り今迄の妻として、末永く同棲して欲しい。ミスコナに侵された部落は、元の持主へ復して、それ〴〵に酋長を置く事とし、成る可くは、從來の酋長が、その位地に就くことに定め、互ひに其れを侵さぬやうにしなければ、いかん。大體の事は、これでよいと思ふが、不服のあるものは遠慮なく、申出る事にしてくれ』

その裁きは、極めて公平である。

ヘンリウクも、ブツトキも、之れに、異存のある譯はない。只だブツトキが、少し故障をいふた。

『あなたの敎へをうけて、わたくしは、一切の物慾から離れて、心靈の生活に、入りたく思つて居るのですから、わたくしの代りに、誰れかを選んで欲しいのです』

『この部落の同胞の爲めぢやから、それは忍ぶがよい。たとへ、部落の人となつても、私慾の爲めに、他を侵さず、自からを愼んで、部落に盡したら、わしの敎へに背いた、といふことにはならぬ。人間といふものは、犧牲的に活きてゆく場合があり、また犧牲的に、死ぬ場合もある。いづれにしても、他の爲めに、自からを抑へて、犧牲になるといふことは、心靈の生活に入つたも、同じことぢや。惡いことは勸めぬから、わしのいふ通りに、なつて欲しい』

『左樣いふ譯なら、承知いたしませう』

此相談が、終つた翌日、德内は、改めて會所へ出かけた。

松村を、失つた小役人は、殆んど途方にくれて居た。その人々に逢ふて、德内からは、今後の事について、いろ〳〵と注意を與へてやつた。

奥地探險の許可證の如きものを、德内が示したので、小役人も、いくぶんの安心はした。

ミスコナと、ヘンリウクに代つて、ブツトキが、正式の留學になることも、くはしく話した。

濠廳への屆書は、德内が、草案を書いてやつた。役人等は、何も彼も、德内のいふ通りになつて、一切の事は、めでたく一段落となつた。

魔の家に、集まつて居る、アイヌは、元の部落へ歸つて、幸福の日は、めぐり來つた。

德内の奥地探險には、呑海が、新たに加はつて、道案内をする事になつた。海路を取らずに、陸からする事に變じて、これから用意にかゝつた。

ヘンリウクが、しきりに從いてゆき度い、といふのを、德内は拒んだ。それを聞いて居た呑海は、德内を說いて、ヘンリウクを、一行のうちへ、加へる事にした。

いよ〳〵用意、整ふて、人跡未踏、といれて居る、猿留の深山を、横斷することになつた。

快僧の死

一

松前を出る時は、海路を取つて、國後へ、直航のつもりであつたが、難風に遭ふて、圖らずも、幌泉へ上陸し、それから、ヘンリウクと、ミスコナの爭鬪に關係し、終には、會所の役人を、懲す爲めに、松村を殺す迄の活劇を演じて、存外に、日を費した。

萬事は、意の如く運んで、もう此處に、長く居る必要はなく、最初の目的通り、國後へ行くことになつた。

呑海が、一しよに行く、といひ出したので、德内も、頗る喜んで、相談は、忽ち決したが、海陸いづれの道を行くか、といふことについては、それ〴〵に意見もあらうから、ゆつくり相談しよう、となつて、その席へは、留藏等も、列なることになつた。

德内の意見は、

『多少の困難は伴ふであらうが、今度は陸行として、ぜひ山道を、行つて見たい』

と、いふのであつた。

『最上さんの希望は、拙僧も、御同意いたさう。此山道をゆくには、非常に困難であるが、拙僧は、國後から、引上げて來る時、やはり、この山道を、探險いたして居るから、案内の役目を勤めよう』

『それは、忝ない』

『奥蝦夷の探險は、山道をゆくに限る』

德内は、留藏等を顧て、

『お前達は、どう思ふか』

『へー』

『遠慮はないから、いふて見なさい』

『海で育つたものは、矢ツ張り海を、ゆきてえもンです』

『なる程、それも道理ぢや』

『けれども、船長が、どうしても、山をゆくといふなら、無理に、海をゆかうとはいひません』

『よし。外のものは、どう思ふか』

一同は、聲を揃へて、

『留兄いのいふ通りです』

『ヘンリウクさん。君は、どう考へるか』

今迄だまつて居た、ヘンリウクは、此に發言權を得て、膝を進めた。

『わたくしは、海をゆき度い、と思ひます』

『それや、どういふ理由か』

『この山道は、思つたより嶮岨でありますから、容易なことではありません。殊に、ヨニヌブリの嶮路もあれば、サロルの山道もありまして、歩行に惱むところも、却々に澤山あります』

『さういふところも、一度は通つて見なければ、この旅行の甲斐はない、といふものぢや』

『併し、途中には、猛獸も居りまして、却々危ないところであります』

『それが、面白い』

『ゑッ』

『それ丈けのことなら、ぜひ通つて見たい』

『熊が、出ます』

『殴ち殺して通るまでぢや。ハツハ、、、、、』

ヘンリウクは、眼を圓くして默つたが、呑海は、ニコ〳〵笑つて居た。

德內は、地圖を披いて、

『歌別、歌露、油駒、襟裳岬、小越、百人濱、アプチ川、トセツプ岬、サクバイ、ウエンヘ、猿留岬、猿留、斯うい ふ順路ぢやな、まア兎に角、歌別まで行つて、もう一度の相談ぢや。それ迄に、ヘンリウクさんも、よく考へて下 さい』

ヘンリウクは、輕く首肯いた。留藏等は、どうせ、德內のいふ通りにはなるのだ。

先づ、杖の用意をして、魚の骨で矢をつくり、それに毒を塗る。德內と、アイヌ二人は、弓を携へて、猛獸に對す る、備へをした。

辨天丸は、土地のアイヌに頼み、修繕をして置いて、貰ふことにした。燧石の袋は、各自に携へて、山道の夜に對 する注意は、よく勝手を、心得て居る、アイヌと、呑海が居るから、充分に出來た。

歌別は、オタベツと謂ふ。今では、幌泉へ、合併されて居るが、幌泉灣の南一里、襟裳岬へ通ずる、海岸の支道に 當る。

襟裳へ行くには、歌別から幌泉へ出て、山道を、西から東へ通るのであるが、その頃は、人跡稀なといはれたほど

で、可成り冒險の旅行であつた。

襟裳岬附近のことは、地誌に據ると、斯う書いてある。

『北緯四一度五五分、東經一四三度一六分に位する、多岩の斷崖角にして、內地の高山脈より伸出せる、臺地の南端 也。附近には、一も好上陸所なし。風向に依り、東側の小越村前、西側の油駒村の濱邊は、稍著舟し得可し。前者 は淺水、且暗礁多く、後者は磯浪あり。共に風波靜穩の時に非らざれば、著舟し難し。該岬の背後は、地勢漸次隆 起して、石山に達し、更に北方九浬にして、豐似嶽に達す。此邊、暴風の平均日數は、一ケ年百八十二日、六七の 兩月、最も小として、平均九日とす。降雪は、十一月初旬より、四月下旬迄也。濃霧最も多き六、七、八の三ケ 月は、咫尺を辨ぜざる日多く、根室と共に、濃霧最も多き所なりとす。襟裳岬より釧路に到る、約八十浬間の海岸 は、約北東に走り、其間一の港灣なし』

二

歌別までは何事もなく、此處には二泊して、更に山入の準備を整へた。

呑海が、一番の年長で、もう六十路に近いけれど、元氣のあることは大したもので、その健脚には、一行中及ぶも のがなく、坂道へかゝると、殊にはやかつた。

歌別を出て、油駒へ來た。アブラゴといふ魚が、多く漁れるので、何時か、土地の名に、轉訛した、と傳へられて 居るが、また一說には、シヤグシヤインの內亂が起つて、松前藩から、征伐の兵を、差向けた時、蠣崎九郎次の馬が 此處で斃れたのに因て、此名を附けたとも、傳へられてある。

アブラゴとは、內地でいふ珠鰤のことであるが、アイヌは、之れをシリポクと稱し、箱館の方言では、アラゴと呼 ぶ。

襟裳岬は、一般にいふ所の山岳ではないが、併し、此處を越えるには、森林の深い、嶮しい坂を、幾つも通らねばならぬ。それが、殆んど內地の山岳に異らぬので、その困難は一と通りでない。

岬の出端を、船で廻れば、思ひの外に樂ではあるが、冬は、風の強い恐れがあり、德內の目的は、陸を行くといふのであるから、いかに坂路が嶮しくとも、そんなことは考へて居らぬ。

油駒を出ると、すぐ襟裳岬である。海岸通りを、一里ほど來てから、坂路に入るのだ。松前藩の手に依つて、路らしいものはつくられてあるが、それは只だ、人の行く可き、方向を示されてあるに、過ぎない。

『さア、これからが、嶮しくなるのぢや』

と、いつて、呑海は、ずん〳〵登つてゆく。その足のはやいことは、恰で平地を、歩くのに異らぬ。

尤も、呑海と德內は、體には一物も、附けて居ないから、空身の輕いところから、足の運びもよい、といふ譯もめるが、留藏等は、それ〴〵に重い物を、一つ宛は、背負つて居る上に、坂道には、馴れて居らぬから、歩みは頗る遲く、息を喘ませ乍ら、杖を頼りに、辛うじて進むのであつた。

內地では、もう暖氣を覺える、三月の中旬だが、此邊は、未だ雪を見るほどで、とても、內地の人が、想像し得ぬ位に、寒さの度は、強い。

遂々、道にふみ迷ふて、深い森林のうちから、どうしても出ることが、出來なくなつてしまつた。

呑海は、足を停めて、考へて居る。

『どうしました』

『イヤ、實に弱つたよ』

『道は、判りませぬか』

『この邊は、熊笹から手を入れて、ほんの筋を、引いた位の道を、やうやく附けてあるので、それを、ふみ迷うた

ら、元の所へ出るには、ナカ〳〵むづかしいのぢや』

『貴僧は、馴れて居る譯ですが……』

『馴れて居る、といつた所で、たツた一度、通つた丈のことぢやから、ツイ目じるしを、見損つてしまつたのぢやよ』

『どうします』

『まア、よいわ』

と、いひ乍ら、雪で堅くなつて居る、道のない森林を、平氣で歩きはじめた。

『大丈夫ですか』

『大丈夫ぢや』

『時刻も、よほど經つたやうですが、少しも見當が、つきませんな』

『斯うして、歩いて居るうちには、どうにかなるぢやらうよ、ハツハ、、、、、』

何が面白いのか、呑海は、高笑ひをして居る。深くて寂しい森林、何の音一つせぬところで、高笑ひを爲るから、その反響も強く、人の心を、一だんと寂しくさせるばかりだ。

跡から、遲れ勝に、フラ〳〵し乍ら、歩つて來た、留藏等も、道にふみ迷ふた、といふことが判ると、頗る心細くなつて來た。

ヘンリウクと、もう一人のアイヌは、斯うした難儀には、時として逢ふこともあつて、多少の經驗がある丈に、留藏等の如く、ひどい恐れはないやうだが、それでも、幾分の不安は、あるらしい。

『船長ッ』

『何ぢや』

『どうなつたンです』

『道が、間違つたのぢや』
『どこを見たツて、眞ツ白で、道らしいものはないやうだが、これでも、道なンですか』
『人間の通る所は、すべて道ぢや』
『こりやア、驚いたな』
『まア、氣を落すな』
『海の上なら、どんなことがあつても、そんなに驚かねえが、陸に居たのぢやア、どっにもしようがねえ』
『呑海さんが、那れに待つて居られる』
『急ぎやせうか』

二

呑海は、大きい岩の雪を、丁寧に拂ひ除けて、その上に、携へて來た、莫蓙を敷き、ゆつたりと坐つて居る。
いかなる場合にも、狼狽るやうな人でないと、いふことは、みな知つて居るが、斯うした場合に、この落ち付きは、とても、普通の人には、視ることの出來ぬ、さすが佛門に入つて、眞に大悟して居る人は、格別なものである、と、一同は感心した。
『さア、留藏さん達は、その邊に、散つて居る、枯枝を、拾ひ集めて下さい』
『へー、承知しました』
これから一同は、枯枝を拾ひはじめた。
『可成く澤山集めて、それを四五ケ所へ分けて、うまく積み上げて下さい』
『へー』

『それから、休むのです』
德内は、呑海と並んで、一同の働くのを、見て居たが、
『焚火ですか……』
『大分、冷えて來たやうぢや』
『風も、少し出て來たやうです』
『今夜は、強く吹くぢやらう』
『風は、強くなりますか』
『よほど、強くならう』
斯うして居るうちに、暮色は、だん〳〵濃くなつて來るし、寒氣も、骨を刺すやうだ。
『和尚さん』
『何ぢや』
『枯枝は、どう爲るンですか』
『焚火に爲るのぢやから、そちこちへ、四五ケ所も、積み上げてくれ』
『焚火ですツて……』
『うむ』
『焚火なンかして居ねえで、もつと歩いたら、どうです』
『見當がつかぬから、今夜は泊りぢや』
『ゑツ。泊りですツて……』
『それで、焚火の用意を、爲るのぢやよ』

『こんな所へ、泊るとは驚いちやツた』
『今迄の部落と、大した違ひはない』
『四邊が、開けつ放しですな』
『うるさくないから、却てよからう』
『それぢやア、みんな泊るかな』
『厭だと思つたら、遠慮はないから先きへ行くさ』
『冗談いつちやア、いけません』
『何故か』
『何故かツて、行く先は、判つて居ても、道が判らねえぢや、ありませんか』
『左樣ぢや』
『左樣ぢやなンて、すまして居ちやア、困るな』
『まア、落ちついて居なさい。斯ういふ時は、焦るほど間違ふものぢやから、ゆツくり構へて居るに、限るよ』
『つまり、どういふことになるでせう』
『どうか、なるぢやらう』
『少し心細いな』
『死んだと思へば、心細いことはあるまい』
『死んだつもりで、泊る譯ですな』
『まづ、さう思つたら、心も平かになる』
『坊さんないてものは、呑氣なもンですね』

『うらやましいか、どうぢや』
平太郎や、政右衞門が、
『オイ〳〵、そんなことをいつて居ねえで、はやく焚き付けねえ、莫迦に、寒くなつて來たぜ』
『日も、すツかり暮れちまつた』
これから、焚火をはじめた。
各自に、莫蓙を敷いて、ぼんやり坐つて居る。
『お互ひに、寢る時は、體を、ピツタリ合せて、溫かくして寢るのぢや。必ず一人で、離れて眠つては、いかんよ』
『妙なことを、爲るのですな』
『一人で眠ると、死ぬかも知れぬから、それで、抱合つて寢ろ、といふのぢや』
『オヤ〳〵、とんでもねえことに、なつちやつた』
『政ツ』
『何だ』
『てめえと、一しよに寢るのだ』
『ひでえことに、なつたな』
『彼女と一しよなら、願つたり叶つたりだが、てめえと一しよぢや、どうにもならねえ、糞ツ』
『何が、糞だ』
『何だ』
之れを聞いて居た、德內は、
『これ〳〵、そんなことで喧嘩をしては、いかんよ』

『喧嘩ぢやア、ねえのです』
『お前達の話は、丸で喧嘩のやうぢや』
『左樣ですかね』
『さア、食事をはじめよう』
持つて來た、食物を出して、焚火に溫め乍ら、一同は食ひはじめた。

四

近年は、山遊びが旺んになつて來て、夏季に入ると、學生も紳士も、續々出かけるやうであるが、是れは寒に、良い傾向であつて、その大半は、流行物であるから、一度は、行つて見よう、といつて、見榮坊の人もあるやうであるが、それにしても、惡い事ではない。

小人閑居すれば、不善を爲す、といふてある通り、熱鬧と淫卑の外に、何の樂みもない、都會の地に居れば、どうせ、碌なことは考へず、安價なレストランに、化物の如き、モダンガールの尻を撫でたり、銀ブラをやつて、無意味の半夜を過す外、これといつて、爲ることもないのであるから、山へでも登つて、眞の人間らしい、生活の一と月位ゐは、行つて來るのも、可からう。

唯だ、少しく愼む可きことは、不用意の山登り丈けは、爲ぬやうにしなければ、いかん。山が深くなれば、氣溫や天候の變化が、非常にはげしいから、それに對しては、充分の注意を、有たなければならぬ。

動もすると、夏季の山遊びに、學生の災禍が傳へられるのは、全く此注意を、怠るからの事である。殊に、冬の山登りは、最も危險であつて、それに對しての注意は、夏の山登りよりは、一しほの注意を要する。況して、寒い國の山登りに至つては、眞に生命がけといふても、可い位だ。

呑海や德内の山越えは、物見遊山の樂み、といふ心で無く、人跡未踏の地を踏破して、後世に益するの考へから、この冒險を、敢て爲るのであるから、其心事は、實に立派なものであつて、決死の覺悟も、左樣した心から、湧いて來るのである。

それにしても、未だ雪の深い時分に、嶮しい山の森林に、道を失ふて、不安の一夜を、積雪の上に明かさう、といふのであるから、ずゐぶん思ひ切つた、遣方である。

食事のすんだ頃から、風が強くなつて來た。ピューツといふ音を立てゝ、老樹の梢をゆする。而かも、その風の冷たいことは、とても、名狀し得ぬほどで、一と吹き爲れると、體は勿論、魂までも凍るか、と思はれる。

『眠つては、いかんぞ』
と、呑海が、しきりに聲をかけて居る。
『動いて居ろ』
と、德内も叫ぶ。
『ひどい風ですな』
『うむ、強い力ぢや』
『寒い土地で、育つて來たのですから、寒いのには驚かねえ、といひ度いが、この寒さには、恐れ入つた』
一番に元氣な、留藏が、弱い音を吐く。
かねて、取つて置きの酒を、呑海が、一同に與へた。
『さア、一ぱいづゝ飲みなさい』
『こりやア、有難え』
『強い酒ぢやから、一ぱい飲めば、體は溫まろ』

各自に、口をつけて見て、びツくりした。

『何といふ酒か、莫迦に強いですな』

『これは、異人の酒ぢや』

『へー、異人の酒ですツて……』

『うむ』

『咽喉が、ヒリ〳〵しますぜ』

『量を、少なく用ひて、充分に醉へるのぢやから、その位の事はあらう』

『毒ぢやア、ありますまいね』

『拙僧が、お前達に、毒を飲ませる譯はない』

『左樣ですな』

『そんなことを考へずに、飲むがよい』

『へー』

一同は、チビリ〳〵嘗めるやうにして、いつか飲んでしまつた。胸が燒けるやうで、顏や手足が、ポカ〳〵して來た。

『どうも、よく利きます』

『醉ひ心地は、どうぢやな』

『何ともいへません』

『日本の酒とは違つて、醉ふた跡の心地が、まことによいものぢや』

『どうして、斯んなものが手にはいツたンですか』

『國後へ行つた時、オスモビアの異人に逢ふて、貰ふて來たのぢや』

『國後へ行けば、その異人が居るのですか』

『何時でも居る、といふのではない。丁度、來て居た時であつたから、貰ひうけたのぢや』

『はやく國後へ、行つて見てえな』

『異人が好きか』

『とんでもねえ』

『嫌ひか』

『へー』

ヘンリウクが、俄かに立つて、弓に矢をつがへた。

『熊ッ』

一同も、ひとしく立ち上つた。

五

『熊が出たのか』

『熊であります』

短刀を、杖に、はめ込み、手槍の代りにしてあるのを、德内は、かねて用意して置いた。

それを取つて、德内は、ヘンリウクと並んで、熊の來る方へ向つて、身構へをして居るのであつた。留藏等も、捻鉢卷で立上り、それ〴〵に、得物を持つて立つ。

斯うした騷ぎのうちも、呑海は、さらに動かず、平然として、坐つた儘である。

『お前達は、熊が見えても、手出しをしては、いけない。わしが、さア可し、といふ迄は、決して動いては、ならぬぞ』

『へー』

『ヘンリウクさん』

『ハイ』

『最初の一矢は、君に恃み度い』

『宜しう御座います』

『君が、一矢放つと、それを機會に、わしは、熊に向つて、突進する』

『危ない』

『何故か』

『一と矢では、斃れませぬ』

『斃れなくても、宜しい、君の一矢で澤山ぢや。跡は、わしが引受ける』

『一と矢、二た矢、三矢、それで熊は、少し弱ります。あなたは、それからに爲されては、いかゞでせう』

『それには及ぶまい。わしは、君の矢が飛ぶ、と同時に、突いてしまふつもりぢや』

そのうちに、熊の姿が見えた。

一同の心は、忽ち緊張して、ぐツと熊の姿を、見詰めた。熊の方でも、意外に、人間の數が多いので、少し恐れたらしく、ふみ留まつて、プーツと、息を吐いた。

ピユツと、ヘンリウクの矢が飛んだ。同時に、熊の體は、毛を逆立て、躍る。リンリウクが、二の矢をつがへた時、德内は、すツと進んで、熊に近づいた。

凄まじい、唸り聲、雪を蹴上げて、德内を目がけるや、熊は躍りかゝつた。

德内は、飛鳥の如く、體をかはした。熊は、空しく躍つて、雪の上に倒れる、刹那に、二の矢が飛んで、左の眼を射た。死物狂ひになつて、熊は、再び德内に向つた。

『ゑいツ』

と、德内は、氣合と共に、熊の咽喉輪へ、手槍を、突き刺した。ゴロリと、倒れ乍らも、熊は、手槍の柄に、しツかと取りついて、もがき乍ら、身を起さう、と爲る力の强さ。手槍の柄は、ぽきツと音をさせて、二つに折れた。

一同が、はツと思つた時、三の矢は飛んだ。

『よし、かゝれツ』

と、聲が掛かつた。

眞ツ先に、留藏が、馳け寄つて、一擊を加へたが、熊の爲めに、刎飛ばされた。

他のものが駈け寄つて、留藏を、助けて來た、爪にかけられた傷は、相當に大きく、出血がひどいので、呑海は、用意の藥を出して、之れを塗つてやると、幸ひに血は留まつた。

さすがに、猛り狂つた熊も、だん〳〵氣力が、衰へて來て、徒らに只だ、もがくのみであつて。平太郎、政右衞門、善吉等は、留藏の仇きを討つつもりで、しきりに打ち据ゑた。

德内は、留藏の傍へ寄つて、傷を、しらべて視た。

『留藏ッ』

『へー』

『傷は、淺いぞ』

『有難うござえやす』

『ひどい目に、逢つたなな』

『なアに、このくれえの事は……』

口には、強くいふて居るが、よほど弱つて居た。

熊は、七尺に近く、頗る大きい物であつた。ヘンリウクが、よくしらべて見れば、自分の射た外に、矢疵を負ふて居るから、

『この熊は、逐はれて來たのであります』

『ははア、どこから逐はれて來たのか』

『それは、よく判りませんが、わたくしの射た外に、矢疵をうけて居ります』

『左樣か』

所へ、四五の人影が見えた。

此時には、もう夜は、明け放れて、強く吹いた風も、ぱたりとやんで、朝日が、昇つて來た。

現れた人影が、アイヌの一群であつた。ヘンリウクが、そのうちの一人に逢ふて、話しかけた。

猿留の酋長、アイランゲといふのが、此熊を逐ふて來たのだ、といふ事が判つた。

六

熊に就ての傳說は、いろ〳〵殘つて居るが、とに角、アイヌと熊は、離れ難き緣故を、有つて居る。

體が大きくて、何となく恐ろしい、姿はして居るが、その顏は、一種の愛嬌を有つて居て、人にも馴染み易く、可愛らしい獸物である。

一たび怒れば、恐ろしい力を出して、何でも引裂いてしまふが、御機嫌にさへ觸れなければ、さまで恐ろしい奴ではない。殊に、小さいうちは愛らしく、犬や猫と同じやうに、家畜にして置いても、可い位であるが、大きくなると左樣もならぬ。

その爪と齒には、非常な威力を、有つて居るから、うつかりすると、引ツかけられることがあるから、小さいうちは格別、大きくなれば家畜として、之れを養ふことはむづかしく、矢張り山住みの動物だ。

性質は、利口に近く、石狩川へ、鮭取りに出る奴なぞは、その巧妙さ、實に驚き入る外はない。那の大きい手を以て、泳いで來る鮭を、ちよいと引ツかけては、陸へ積み上げ、もう充分といふ頃に、長い繩を、鮭の口から通して、咽喉の所へ貫き、それから、それと十數尾を列ねて、繩の一端を、咬え乍ら、住んで居る穴へ、引上げてゆくのであるが、いくら利口なやうでも、そこが動物の悲しさ、繩尻を結ばずに置いて、ズル〳〵引摺つてゆくうちに、鮭は、途中へ拔け落ちて、穴へ着く時分には、殘り少なになつて居るのだ。

また、人間に襲はれて、穴へ逃げ込むと、容易に出て來ない。人間の方から、穴へはいれば殺られてしまふから、穴の入口へ、太い木を横たへて、枯葉いぶしにかけると、烟りの爲めに苦しくなつて、熊は、穴から這出して來る。入口の丸太を、ぐいと押せば倒れるのを、押さずに抱へ込んで、引ツ張るから、穴の口につかへて、丸太の爲めに、這ひ出ることが出來なくなる、そこを、狙つてズドンとやつてしまふのである。

熊については、面白い話もあるが、今は略す事にする。

ヘンリウクの取り次ぎで、アイランゲの事は判つた。そこで、德內は、呑海に向つて、

『あなたは、アイランゲを、御承知ですか』

『イヤ、未だ知らぬ。併し、名は聞いて居る』

『アイヌのうちでは、相當のものでせうか』

『猿留の酋長ぢや』

『而て見ると、至極の好都合ですな。吾人も、これから猿留へ行くのですから、とに角、アイランゲに、逢ふて見ませう』

『それが、可からう』

獻内は、アイランゲと、話す事になつた。

『君が、アイランゲといはれるか』

『ハイ』

『この熊を、逐ふて來たのか』

『左樣です』

『幸ひ、われ〳〵が擊ち取りましたから、君に、此熊は進上いたさう』

『えツ、熊は下さるといふのですか』

『折角の御苦辛ぢやツたから、君に進上する事にしよう』

『それは、有難う存じます』

『その代り、猿留まで案内して下さい』

『承知いたしました』

アイランゲは、改めて、呑海にも挨拶した。

熊は、何しろ大きいのであるから、一同が協力して荷ふてゆく事になつた。

猿留は、十勝の國境に、近き所に在つて、アイヌの部落としては、可成り良いところであつた。

古い記錄に依れば、

此山中に、鶴多く住しが故に名づく。サルルンとは、鶴の事也、川筋は大木多く、別けて楓、榎、蔦等、秋季に至れば、淺瀨を照らし、往來人の面にも、映る許り也とか。

サルルエト(大岬)オンネトウブ岬と相對して、一の灣をなす。廻りて船を岸に寄す。此邊、昆布取りの小屋、一面に立並びたり。小石原は、十丁の長きに及ぶ。

昆布取りの樣子を聞くに、ホロイヅミ領の内にても、シヤマニ堺より、エリモ、ショウヤの濱邊を、文政年間、昆布百石目を、金廿五兩の時にも、わづか十兩位より十二三兩、近年八十兩位になつても、わづか十五兩位ならでは、會社元にて買上げぬ由。

それ故、如此昆布多く産して、家内三人もあれば、百石の昆布は取上るも、他所より移住するもの絶えて無し』と、斯う書いてある。

熊の爲に負傷したのは、留藏一人であるから、これは代る〴〵背負ふて、アイランゲの案内をうけ、一行は、無事に、猿留へ着いたが、部落のアイヌは、總出になつて一行を迎へた。

七

猿留へ着いて、アイランゲの世話を、受ける事になり、一行の爲めに、家を一軒貸してくれた。

その當時の事であるから、貸家なぞの在る譯もなく、アイヌ部落に、餘計な家の空いて居らぬは、特にいふ必要もないが、何しろ熊退治の一條があるので、一行に對する、アイヌの尊敬は、非常なものであつた。

酋長のアイランゲから、相談をうけた時、一人のアイヌは、快よく自分の家を明けて、一行の泊る所に、してくれたのである。

當分は、留藏の疵療治にかゝり、出立は、全治の上と、決めて居たが、すぐに手當をした爲めか、留藏の疵は、存

外に癒りもはやく、數日の後ちには、もう心配のない迄になつた。

德內は、附近の狀況を、少し調べて見たい、と思つて、呑海にも、その事を告げて、ぶらりと出かけた。

之れを見ると、外のものも一しよに行き度い、といふので、德內は、之れをゆるして、みな出かける事になつた。

呑海と留藏は、跡に殘つて、留守番することになつた。

『和尙さん』

『何かね』

『今度は、大い御世話になりました』

『疵の輕かつたのは、何よりの仕合せであつた。併し、一時は心配したよ』

『熊なンぞに、ひツかゝれたのは、わしも始めてなので、今度は、もう默目だ、と思ひましたが、みんなの手當をうけたので、すつかり良くなつて、こんな嬉しいことはありません』

『今日は、顏色も良くなつて、元氣も出たやうだから、遠からず出立することにもならう』

留藏は、急に聲をひそめた。

『此處の酋長は、どうも變ですぜ』

『ふーむ、どうしてか』

『何となく容子が變だ、と思つたのですが、和尙さんは、どう思ひますか』

『疑ふて視れば、いかなる人も疑はしくなるが、信じて視れば、疑はしいといふ人は、決して有る可きものでない』

『そンな、聖人のやうなことをいつても、默目ですよ』

『左樣かな』

『お前が、左樣思つたら、お前は、左樣思ふて居るのも可いが、人には、決して左樣いふことをいふては、不可よ』

『それは、よく心得て居ます』

『最上さんには、それを話したか』

『否、まだ何にもいひません』

『最上さんにも、話つては惡い』

『船長には、うツかりいへません』

『何故か』

『船頭は、元がお侍ですから、すぐに斬つてしまふかも、知れません』

『ハ、、、、、、最上さんが、いかにお侍でも、そう無造作に、人を斬るやうなことはあるまい』

『何とも、知れません』

『左樣思ふたら、猶更のことぢやから、口外いたしては相成らぬ』

『ヘー、それは、大丈夫です』

アイランゲに對する、留藏の疑ひは、どういふ所からか、それは判らないが、呑海は、さうしたことに觸れて、彼是れ騷ぎ立てることは、極めて嫌であつたから、留藏のいふて居る間も、聞き流しにして居た位であつた。

何時の間に、やつて來たのか、アイランゲの姿が、不意に現れて、門口から徐かに、はいつて來た。

留藏は、ぐるりと向きを變へて、急に橫になつて、寢た振をした。

『やア、アイランゲさんか』

『ハイ』

『さア、こちらへ、はいつて下さい』

『有難う』
『今、おいでたか』
『少し前から、まゐりましたが、何かお話のやうでしたから、控へて居りました』
『左樣かね』
『勇士は……』
德內の事を、勇士と呼んで居るのだ。
『近くへ、遊びに出ました』
アイランゲは、呑海と對座して、しきりに話込む。一行の所持品を見て、一々說明を求めるのであつた。
內地で使ふものは、アイヌの眼に珍らしく映るのであらう、呑海は、自分の持つて居るのを出して、くはしい說明をはじめた。アイランゲの眼が、異樣に光る。呑海は、殆んど無關心の容子であつたが、橫になつて居る、留藏は、じつとアイランゲの態度を、見詰めて居た。

八

それから、數日を過した。留藏の體は、やうやく舊の如くなつて、旅行に堪へ得るといふ見込もついたら、いよ〳〵出發する事になつた。
海を行くか、それとも陸を取るか、といふことが、復た問題になつた。此時には、海を行かうと、主張するものが多く居たけれど、アイランゲは、手を振つて、
『今からでは、とても船がありません。また一年のうちで、この邊は、昨今が一番に、風の强い時であるから、好んで冒險をやるにも、慎びますまい、若し、陸行について御心配があるなら、わたくしが、御案內をいたしませう』

と、いふのであつた。
それに對して、ヘンリウクは、
『ビタタマンゲ岬の嶮しいことは、今迄の襟裳岬や、トセップ岬よりも、よほどまさつて居るから、少し位ゐの日は遲れても、船の都合をつけて、海路を取る方が、安心である』
と、いつて、アイランゲの說に反對したが、さらにアイランゲは、陸行の利を、說くのであつた。
『その御心配は、一應御尤もと思ふが、わたくしは、あの邊の地理にもくはしいから、近道を案內しませう。その近道を行けば、割合に嶮しくもないから……』
德內は、兩人の押合を、聞いて居たが、それを裁く爲めに、口を開いた。
『アイランゲさんのいふ通りに、いたそう』
『陸行に、なさいますか』
『さういたさう』
『わたくしは、これから支度をしてまゐります』
『どうぞ、左樣して下さい』
一行のものが、何といふても、德內が、宜しいといへば、反對するものはない。呑海は、何時も、斯ういふ時は、沈默を守るのが、例であつた。
アイランゲの立去つた跡で、留藏は、德內の傍へ寄つた。
『船長が、那アいつて決めたのを、彼是れいふのは、よくねえが、どうも變ですぜ』
『何が、變ぢや』
『アイランゲといふ奴が……』

『ふふーむ』
『和尚さんが、だまつて居ろといつたから、わしは、がまんして居たのだが、無理に陸を行けといふのは、變ぢやアありませんか』
『親切に、いふてくれるのぢやから、それを疑うては、良くない』
『けれども、變ですぜ』
『どうしてか』
『ぜんてえ、彼奴の眼付がよくねえからな』
『ハツハ、、、、、、眼付がよくない、といへば、お前が、一番によくないぞ』
『冗談ぢやアねえ、わしは、本氣でいつて居るのだ』
『和尚さんも、船長と同じやうなことを、いつて居たが、どういふもンで、わしのいふことを、本氣にうけてくれねえのでせう』
『呑海さんにも、話したのか』
『へー』
そこで、德内は、呑海に向つて、
『お聞きでしたか』
『聞いた』
『話の筋は、どういふのでせう』
『人を疑ふては限りがないから、先づ信じて置いたら、よいぢやらう、といふても、留藏は、ナカ〳〵肯かないのだ』

『アイランゲの疑はしい、といふ理由は、どういふ點が、疑はしいのでせう』
『さ、それは、能く解らない』
『眼付きが悪いとか、鼻がどうなつて居るとか、つまり愚にもつかぬ事ですな』
之れを聞くと、留藏は、躍起となつて、しやべり出した。
『和尚さんが、いろ〳〵珍らしい物を出して、彼奴に、見せて居る時も、彼奴の眼は、變に光つて居ましたが、和尚さんは、氣が付かなかつたのです。どうも、彼奴は、良くない奴と思ふから、わしは、彼奴のいふことは、聞かねえ方が、いゝと思ふのです』
『お前は、そんなことをいふが、別に悪い人とは、思はれぬ』
『何を見ても、欲しさうな眼付きをして、ぢツと見詰めて居るのが、わしの氣に容らねえ』
『珍らしい物を見れば、誰れでも、欲しくなるには違ひないが、それぢやから、悪い人とはいへぬ』
『だけれど、わしは……』
『まア、待て』
留藏が、呑海と爭ひはじめる。平生の正直に似合はず、今日に限つて、ひどく反抗するのは、何か信ずる所があつて、さう思ふのではあらうが、まさかに、其れ丈けの感情で、人を疑ふのは、よくない、と、呑海も、德内も、留藏の、いふことには、深く注意も拂はなかつた。

九

意外にも、留藏のいふところは、決して誤まつてはゐなかつた。アイランゲを、深く信ずるの餘り、呑海の身に、容易ならぬ災厄の起らうとは、留藏の外に、何人も考へ及ばなかつた。

猿留を離れた一行は、それ〴〵に荷物を、分けて擔いだ。呑海と德内は、例に依つて、體一つである。

ピタタマンゲの岬を越えることが、此旅行に就て、幾分の不安もあり、留藏の注意を、輕く受け流してはしまつたが、いくぶんの氣懸りにもなつた。

案内者のアイランゲは、二三の部下を率ゐて、此一行に加はり、威勢よく、先きに立つて、嶮しい坂を越え、一歩一歩、奥深い森林へ入り、進むに從つて、道の嶮しさは、加はつて來る。

正午もすぎて、一行は、しばらく休息する事になり、食事の用意をはじめた。

附近を、ぶらついて居た、アイランゲの姿が見えなくなつたので、ヘンリウクは、捜しに出て行つたが、容易に、歸つて來る樣子もなく、時刻は、追々に過ぎるばかりであつた。

呑海は、すツと立上つて、

『留藏さん』

『へー』

『お前のいふたことが、當つたかも知れない』

『當りましたか』

『未だ判然はいへぬが、どうも、少し可怪しいやうだよ』

『左樣でせう。この眼で睨んだのですから、大概は間違ひはねえつもりです』

『油斷は、出來ぬぞ』

今迄、落付いて居たが、德内も、之れを聞くと、少し、疑を有つやうになつた。從いて居る連中も、それ〴〵に得物を取つて、萬一の變に備へる。

遙くの方から、人の叫びが聞えて來た。程遠は、陰の樹の根に立つて、四方へ眼を配りながら、時々聲の聞える方を、ぢツと見込んだ時、ピューといふ跳音がして、一本の矢が飛んで來た。

『失敗ツた』

と、呑海が叫んだ。

どツと、はげしい音をさせて、岩の上から落ちる。胸元には、毒矢が、刺さつて居た。德内は、すぐ駈け寄つて、呑海を、抱起すと同時に、その矢を拔いた。

先づ血留の藥をつけて、毒消しの藥も塗つた。留藏始め一同は、矢の飛んで來た方へ、バラ〴〵ツと駈け出した。

『しツかりなさい』

『うーむ、うーむ』

矢は、よほど深くはいつて、この疵は輕からぬ、といふことが判つた。

ピュツ、ピュツと、二の矢、三の矢が、飛んで來た。德内は、大地に伏して、ぢツと、容子を視て居る。

一同の駈けつけたのとは、全く反對の方向から、弓を抱へて、身を現はした、アイランゲは、四邊を見廻し乍ら、兩人の傍へ近寄つた。充分に近寄せて置いて、德内は、俄に立ち上つた。

アイランゲは、それを視ると、驚いて逃げよう、とした。

『うぬツ』

と、叫びつゝ拔打ちに、アイランゲを斬る。肩先きから胸へかけて、ざツくり割り付けた。

『きやツ』

と、一と聲あげて、その場へ倒れるのを、猶ほ跳りかゝつて、また斬りつけた。

六尺に餘る、大きい體格のアイヌが、太く長い棒を揮つて、德内へ、打つてかゝつた。右に左に、身を替して居たが、德内は、刀を抛つて、大手を擴げた。

アイヌは、無造作に、組みついて來た。引ツ外して置いて、泳ぐ所を、美事に投げつけた。氣の遠くなつて、ひるむ所を、繩にかけてしまふ。さすがに、早伎は、眼にも留まらなかつた。

所へ、ヘンリウクを先立ちにして、二三のものは、歸つて來た。アイランゲの血に染んで、倒れて居る狀を視、且つは、呑海の重傷、アイヌの縛られて居ること、眼に觸れるものは、すべて留藏の疑ふたのが、事實となつて、玆に證明されて居るのであつた。

呑海は、苦しさうに息を吐いて、德內の手を取つた。

『最上さん、拙僧は、もういけない』

『氣を落さずに、居て下さい』

『否、何といふても駄目ぢや。この重傷を負ふては、もはや再び起つことはむづかしい。拙僧の行李を、開いて下さい』

呼吸の容子から、出血のひどかつたことを思へば、呑海の覺悟は、當然であるかも、知れない。

いはるゝ儘に、行李を引寄せて、呑海の前に置いた。

『行李の底に、一枚の地圖があるから、それを最上さんへ、遺物として讓る。御受取り下さい』

一〇

呑海が、德內へ讓るといふ地圖は、今迄に歩いて來た、奧蝦夷の探險圖であつた。呑海が、自ら筆を取つて、一々解說を加へたものであるから、その詳しいことは、いふ迄もなく、松前藩から與へられた、地圖に比べて視ても、それ以上に、詳細のものであり、殊に、地理以外の人情風俗、さては土地の傳說までも、書き入れて、實に精細を究めたものである。

『あなたが、苦辛の結晶ともいふ可き、この地圖は、拙僧の身に取つて、此上もなき賜物である。拙僧の御厚志ゆゑ地圖は頂戴いたす。あなたの疵も、可成りに重くはあるが、まだ治療を遂げたら、全快せぬといふ事もあるまいから、兎に角、此處を引上げて、岬の東へ急ぐことにいたしたい』

『イヤ、それは無駄の事ぢや。この疵では、とても再起の見込はない。國後へ、渡つてからのことは、別の手帳を見て下さい。それには、くはしい日誌があるから、多少の參考にならう。

只だ、此場合に、お願みいたして置き度い事は、アイヌの存續である。强いものは勝つて、弱いものは亡びゆく、といふのが、人間社會の常事ではあらうが、强いものが弱いものを扶け勞はつてやる、といふ事も、人間の歩む可べき、道の一つである。此事については、君のやうな理解ある武士に、頼む外はないのぢや。

アイヌは、智慧もなく、力も弱い。けれども、人間としては純なものであるから、決して憎む可き民族ではない。若し之れを、上手に導いてゆけば、北地の堅めをする上にも、少なからぬ利はあらう。

それであるから、アイヌを愛することは、やがて、日本人を愛することであつて、一視同仁といふ事は、世界の人を、ひとしく愛することで、神も佛も、みな之れを、欲へて居るほどぢや。

君が、これから、奧地へ進んでゆくほど、日本の國の危機は、眼の前に、迫つて來て居ることが、判らう。オスモビヤのことについても、日誌のうちに、一と通りは書いてある。よく視て下されば、君の爲めに損はあるまい、と思ふ。

拙僧の生涯も、ナカ〳〵に長いものであつた。六十路の今日まで、多くの罪をつくつたが、多少の德も、布いて居る。皇國の爲めと、人間の爲めには、相當に盡したつもりぢやが、今は、その役も終つて、死の道につくのぢや。併し、之れからの方が、拙僧の努める、道は長く、爲す可き仕事は、無限ぢや。生きて大したことも、爲し得なかつた、拙僧は、却つて死後に於て、神佛の前に、之れから又、一と働きいたすか、と思へば、樂しくもあり、喜ば

しくもある。

最上さん、拙僧の仕殘したことは、君の力で、爲し遂げて下さい。草葉の蔭から、祈つて居ります。外の人々も、最上さんを信じて、よく働いて下さい。

さらば、之れでお別れをいたす』

臨終の雄辯、苦しい息を吐き乍ら、呑海は、いひたい丈けのことをいふて、獨り快然として、眼を閉ぢてしまつた。

德內は、しばらく、呑海を抱いた儘、涙にくれて居た。

振返つて見ると、人數が揃つて居らぬ。

『留藏は、何といたしたかな』

『未だ歸つて來ません』

『その外にも、歸らぬものがあるやうぢやが、搜して來てくれ』

『承知いたしました』

これから、留藏等を、搜しに出かけた。

その跡で、呑海の死骸を、丁寧に始末して、一同の歸るを待つことにした。

『大變です〳〵』

『いかゞいたしたのか』

『留藏さん達は、陷穽に落ちて居るのです。今引上げにかゝつて居りますが、どうぞ、おいでを願ひ度い』

之れを聞いて、德內は、すぐにやつて來た。一丈餘りの陷穽に、落ち込んで、しきりに救ひを求めて居るのであつた。

やうやくにして、落ちた連中を引上げた。留藏は、死骸の脇に、ぢつと、坐つて、動いてゐない。

『どうしたのか』

『そんなことをしては、いけない。死んで居るものに、手を加へるのは、よろしくない』

『けれども、この畜生が……』

『まア、宜しい』

『あれ丈けに、わしがいふたのを、肯かねえから、こんなことになつてしまつた。何といふ情けねえことだらう』

『今更いふても、返らぬことぢや』

しきりに昂奮して、立騷ぐ留藏を制して、呑海を、火葬に附した。

その骨を、埋めた上へ、新しい墓木を建て、德內が、筆を取つて、記念の文字を認めた。

大日本美濃國禪僧呑海

國後探險ノ途次此處ニ死ス

墓銘は、極めて簡單であるが、北太平洋に臨んだ、斷崖の上に、今も猶ほ殘る、ビタタマンゲのシヤモの墓といふが、之れである。

火打山の怪異

一

海岸を沿ふて、幾つもの山と、岬を越えたが、格別の物語も無く、德内の一行は、長い間の望みを果して、いよ〳〵根室へ着いた。

海上僅かに二十八哩、國後は、指呼の裡に在る。幸ひに便船があるといふので、すぐに、乘込んだ。ケラムヰ岬を右に視て、左へ廻れば、泊である。

同じアイヌの部落にしても、此處まで來ると、すべての風俗が、全く變つて、今迄に見聞せぬことを、多く知り得たから、德内は、頗る喜んだ。

呑海の日誌には、細かに此方面の事を、見聞するに從つて、書き入れてあるから、それに依つて、少なからぬ便宜を得た。

數日の間は、附近の視察に忙しく、一行のものには休養を與へて、ゆつくり休ませてやつた。

ヘンリウクは、存外に、此の方面の事情にも、通じて居る所から、此男丈けは、案内者として同行した。

呑海の日誌に、依れば、

『非常に嶮しい山で、怪奇の事多く、容易に探險は、爲し難い。

けれども、國後へ來て、此山に入らざれば、國後へ來た甲斐はなく、一度は、必ず搜る可き値打のある、山である。神秘的の傳說が、多く殘されてある、山丈けに、一たび踏破し得れば、快謂ふ可からず。後ちの人、若し此山に入りて、充分の探險を、爲し遂げたるものあらば、そは、山と共に、萬世に傳へられる、人物であらう』

と、いふことが、書いてあつた。

『ヘンリウクさん』

『ハイ』

『火打山は、よほど深い山かね』

『わたくしは、未だはいつたことが、ありませんから、詳しい事は語れませぬが、恐ろしい山だ、と、聞いて居ります』

『恐ろしいといふのは、どういふことが恐ろしいのか』

『この山を、侵すものがあると、イルクルミの神樣が、お怒り遊ばして、山が荒れるのださうです』

『ハツハ、、、、、、それは可笑しいことぢや。神樣といふものは、人を救ふて下さるもので、人を苦しめるものではない。山に這入つたからといふて、神樣が怒るなぞとは、とても、信ずることが出來ぬ』

『あなたは、左樣いふことを仰しやつても、どこの山にも、必ず神靈はあるものでありますから、それは侵さぬやうに爲るのがよい、と思ひます』

『人間の居る所に、山が在る。この山は、人間の爲めに、神樣がつくつて下されたものであるから、人間がはいつて惡いといふ、道理はない。若し人間がはいつて惡いならば、人間の居らぬ所に、山は在る可き筈だ。

然るに、何の意味もなく、山にはいつたから、といふ丈けで、人間に祟りがある、とすれば、それは、惡魔外道の神であつて、眞の神樣ではない。

惡魔外道の神は、人間の力を以て、速かに退治してしまふに、限る』

ヘンリウクは、之れを聞いて、驚きの眼を睜るばかりで、強て爭ふことはしなかつたが、心のうちには、非常に恐れをなして、居るらしかつた。

附近の視察も、略ぼ終つた。火打山の探險が、未だ殘されてあつた。

『今日は、皆のものにも相談があるから、揃つて貰ひ度い』

改めて、斯ういひ出したので、德内の顏を見乍ら、留藏等は、ずらりと列んだ。

『少し相談があつて、集まつて貰つたのだが、それは、外の事でもない。

那の向ふに見える、山へ、これから登つて見たい、と思ふのぢやが、お前等のうちで、同行したいと思ふものがあるなら、名乘つて出て欲しい。併し、那の山は、ナカ〳〵けはしいといふことであるから、豫め困難は覺悟してゆかぬと、跡で、後悔することにならうから、よく考へてから、返事をしてくれ。

さればとて、無理に行け、とはいはぬ。また、厭なものは遠慮なく、厭といふて宜しい。わしは、誰れ一人行かずとも、自分丈けは、登つて見る覺悟ぢやから……』

しばらくの間は、誰れも答へるものはなかつた。松前から從いて來た、アイヌは、恐る〳〵進み出て、

『わたくしは、お供をいたしません』

と、答へた。

『何故か』

『先祖から、傳へられて居ります。恐ろしい祟りのある、山へは、どうしてもまゐれません。行つて見て、祟りが無いかも知れませんが、先祖からのいひ傳へには背けませぬから、御勘辨下さい』

『可し、解つた。外のものはどうぢや』

ヘンリウクも、同じ樣に、

『わたくしも、まゐりません』

『それも可し。留藏等は、どういたすつもりか』

と、いはれて、留藏等は、モヂ〳〵して居たが、

『船長、一しよに行きませう』

と、先づ留藏から、口を切つた。

二

誰れにしても厭なものは厭だ。恐ろしい祟のある、と、傳へられて居る、山へ、强て行かう、と爲る、德内の了見が、解らなかつたのだ。假りに、德内には、深い考へがあつて爲る、としても、それは、何んな考へか、少しも解らない。殊には、二人のアイヌは、御免蒙る、といひ出したほどであるから、いかに威勢のよい、日本人でも、二の足をふむのは、決して無理でなかつた。

何時も、斯うした時に、先づ判然と、自分の覺悟を示すものは、例の留藏であつた。内地から、渡つて來た稼人で今の所謂、勞働者なるものであるが、實に立派な人間であつた。

眼に、一丁字もなければ、智慧も無い男ではあるが、その氣分には、極めて明るい所があつて、犧牲的精神にも、富んで居たのは、斯かる境遇に、働いて居る人には、よく覩る所であるにしても、留藏ほどに、その精神の强いものは、多く無いのである。

火打山に、どういふ恐ろしい事があらうと、今日まで、死生を共にして來た、德内が、たとへ單身になつてもゆくとの一言を聞いては、留藏の氣性として、尻込みの出來る譯はなく、外のものには相談せずに、先づ自分が、覺悟を

示したのは、どこ迄も、意氣一つで立つ、男らしい所があつた。

左樣いふ事になると、政右衞門も、善吉も、平太郎も、同じやうに進み出て、一しよにゆくと、いひ出した。

於此、德內は、すぐに支度をはじめた。ヘンリウクは、事此に及んでは、いたし方なし、と思つて、

『あなたが、それ迄に、御覺悟をなされた上は、もはや、御留めはいたしませんが、ずゐぶん御氣を付けて下さい』

『お前等が、引留めてくれたのは、わしに對する親切からで、決して惡くは思はぬ。出來る丈けの注意はして、無事に歸つて來るから、心配せずと待ちうけてくれ』

『イルクルミの神樣に、祈つて居ります』

『どうぞ、賴む』

德內は、いよ／＼山へ登る。途中までは、ヘンリウクも、その他の從者と共に、見送つて來た。

內地では、今が彌生の花の春、都の人は、櫻狩に、日を送るの頃であつたが、山の中にはいれば、全く冬の最中。亭々として天を衝く、蝦夷松の森林は、晝猶ほ暗く、ふむ足元の積雪は、白銀の如くで、その寒氣は、まさに慄凜以上であつた。

谷地タモの木は、姿勢閑雅にして、綠葉打ち重なり、天狗の羽團扇に似た、刺楸の葉は、風に戰ぎて、見る眼に面白く、名も知れぬ大樹小樹は、到る處に森々として、深山の寂しさを、今始めて、味ひ得た思ひをなしつゝ、德內等は、嶮しい山路を、進みゆくのであつた。

『船長ツ、どうも變ですぜ』

『何が、變ぢや』

『天氣が、變つて來ますぜ』

『これは、深山の常で、別に不思議ではない』

『左樣ですか』

天は、俄かに暗くなつて、風は、大樹の梢を拂つて物凄い音を爲せて、耳は聾し、胸も塞がる。

『霧が、下りて來ました』

と、留藏が、叫ぶ間もなく、山は、全く濃霧に掩はれた。

『皆な、よくつながツて居れ、放れ／＼になつては、不可ぞ』

『合點です』

『互ひに、名を呼び合ふて、一歩々々、進むやうにして居れ』

『留兄イ』

『なんだ』

『政やい』

『平太郎は、居るか』

『善吉やい』

德內に敎へられて、互ひに名を呼んで、ほぐれぬやうに、爲るのであつた。

驟雨の如く、一時にざツと降り出して來た。

寒氣は、ます／＼ひどくなつて來て、體は凍えるかと、思ふばかりだ。雨は竭んでも、霧は、いよ／＼深くなる。

『船長ツ』

『何ぢや』

『ずゐぶんひどうごぜえやすが、大丈夫ですかね』

『大丈夫々々々、しツかりして居れ』

『今度は、雷のやうですぜ』
『雷鳴には似て居るが、左樣ではあるまい』
『何でせう』
『水の音が、ひどいで來るのぢや』
『ゑッ、水の音ですか』
『うむ』
『少し休ませて下せゑ』
『疲れたか』
『へー』
留藏は、聲を張上げて
『やーい、みんな集つて來いやーい』
人跡の全く無い所、森林のうちを手搜りするやうにして、進みゆく一同は、非常に疲れて居た。
留藏の叫び聲を便りに、追々集まつて來た。幸ひに落伍者は一人も無かつた。

二

雨が竭んで、霧も晴れた。
此時は、既う夜であつた。春の月は、森林を照して、梢の上に、幽艶な姿を、現して居た。雲の搖曳は、可成りにはげしく、月の姿の隱現する狀が、何ともいへぬ風趣を添へて、今迄の苦しみは、すつかり忘れてしまつた。
雷鳴の如く聞えたのは、德內のいふた通り、鹿角千丈の大瀑布であつた。

『船長ッ、矢ッ張り滝でした』
『一寸先きの判らぬ、深い霧の中に居たのでは、雷鳴と聞いたのも、無理はない』
『船長は、船長丈けで、那れを聞き分けたのは、大いもんだ』
と、しきりに感心する。
『ずゐぶん、强い雨であつたから、一時は心配もいたしたが、斯うして晴れて見ると、心氣は、自ら爽快を覺えて、何ともいひやうのない、氣分ぢや』
『本統に、一時は、どうなるかと思ひやしたが、斯んなことですめば、結構ですな』
『併し、未だ安心は出來ぬぞ』
『何か、ありますか』
『何がある、といふことは、判然いへぬが、先づ何かあるものとして、覺悟して置くに限る』
留藏等は、身を顫はして、
『大層寒くなつて來たが、焚火でもおこしやせうか』
『うむ、それが可からう』
これから、枯枝や、落葉を集めて、焚火をはじめたが、德內は、かねて用意の酒を、一同へ分けてやつた。
焚火の暖かみと、酒の力で、體が、ポカ〳〵して來たので、元氣が出た。それを見て、德內は
『その勢ひで、一と眠りするが、よい』
『へー、それぢやア、一と眠入りする、と、いたしやせう』
家も無ければ、寢道具といふほどの物もなく、石の上に、莫蓙を布いて、うたた寢を爲るのだ。互ひに、抱合つて横になると、疲れがあるから、直ぐ眠りに入る。しばらくして、德內は、不圖、眼をさました。

春月は、何時か、姿を隱して、空は、一面の雪雲になつて、居た。寒氣は、刻一刻強くなつて來た。

『オイ、起きろ』

と、聲をかけられて、一同は、眼をさました。

『今度は、雪ぢや』

『ゑッ、雪ですッて……』

『下山の支度をしろ』

『降りるのですか』

『雪に逢つては、とても堪らぬ』

『ぢきに、止むでせう』

『イヤ、さうはゆかぬぞ』

『ひどく、降るでせうか』

『此處で降られては、防ぎがつかぬ』

『それぢやア、支度をしやせう』

『どうか、さうしてくれ』

流石に、德內ほどの人も、此山中で、雪責に逢ふては堪まらぬ、と考へたのだらう。

そのうちに、雪は降りはじめた。今迄止んで居た、風が、强く吹き出して、森林を、搖り動かす音の物凄さ。

下山の支度は整ふて、いよ／＼歸途に着いた。登つて來る時、德內の注意で、目標は、立木の下枝へ、それ／＼附けて置いたから、下山の便りには、なる筈であつた。

然るに、突然の大雨で、その目標は、多く脫れてしまつたから、頗る苦んだ。雪が、降り積むに從つて、足跡も、

全く見出し難くなつた。內地の雪と違つて、北地の雪は、とても、形容の出來ぬほどに、降り出したら、はげしいものである。

風は、いよ／＼强くなつて降る雪を、吹き飛すから、今は、咫尺を辨ぜざるの大吹雪となつて、進退ともに困難に陷り、一息に一歩、恰で這ふやうにして行くのだが、啻に、道を求むるに困難なばかりでなく、體は、寒氣の爲めに知覺を失ひ、手足の自由も利かなくなり、一番に元氣のよい、留藏が、先づ倒れてしまつた。

それにつゞいて、二人倒れ、三人倒れ、終には、德內までが、雪の裡に身を沒して、生死も判らずなつた。

冬の山登りは、全く危險である。況して、雪の深い、北地の山登りは、殊に、危險の伴ふものである。

昨今に至つても、山登りした學生が、吹雪や、濛氣の爲めに、行方を失ふて、大騷ぎを爲ることは、往々にしてあるほどだが、昔は、今のやうに、新聞や通信の機關もなく、それが爲めに、何時死んだともなく、死んでしまつたものが、多くあつたに違ひない。

德內一行の安否、それは何うなるか、恐らく神の外に、知るものはなからう。

四

泊の部落には、數人の酋長が居て、それ／＼に、勢力を張つて居たが、そのうちに於て、最も勢力のあるものを、コタンヒルと謂つて、ヘンリウクとは、豫て交りがあつたので、ヘンリウクは、德內の山登りを見送つて、その足をコタンヒルの部落へ、向けた。

二軒、三軒、或は離れて一軒、アイヌの家が、或は丘を負ひ、或は川に臨んで、數十軒の多きに達して居た。

この邊では、第一に大きい部落で、その酋長として、コタンヒルの勢力には、どの酋長も、遠く及ばなかつた。

『コタンヒルさん、お宅ですか』

といつて、ヘンリウクは、一軒の家へ、はいつた。

『ヘンリウクさんか、よく來てくれましたね。さア、おはいり下さい』

アイヌの思想は、極めて單純であるから、よく人を信ずる。その代り、感情も單純であるから、一たび信じて交ると容易に、疑惑を有たぬ。

ヘンリウクと、コタンヒルの交情は、可成り深くあつた。前からの知合ひで、どちらも、アイヌ族のうちでは、一二を爭ふ名家であつたから、互に尊敬し合ふて、居たのである。

『今日は、一人ですか』

『はア』

『伴れのシヤモは、どうしましたか』

『山へ登りに、行きました』

『ゑツ、山へ……』

『火打山へ、登りました』

コタンヒルは、稍や顏の色を變へて、

『山へは、どういふ用事で登りましたか』

『山の奥を探る、といふて、行つたのです』

『ふふーむ』

『いろ〳〵と、留めたのでしたが、どうしても肯かずに、登つて行きました』

『那の山へ登るのは、頗る危險ですが、あなたは、その注意を與へましたか』

『よく話したのでしたが、何としても肯かないのです』

『大膽な、人達ですな』

『シヤモのサムライは、大膽ですからね』

『先日、あなたに紹介された、サムライは、どういふ人ですか』

『最上德内といふて、偉い人です』

これから、ヘンリウクは、德内のことを詳しく物語つた。

それを聞いて、コタンヒルは、ひどく感にうたれたらしく、

『ラメトクコロ、グルナ』

と、いふ詞を、いくたびもくり返した。

此詞は、アイヌの方でいふと、勇者といふことに當り、其人を尊敬した場合でなければ、容易にいはぬ詞である。

『最上さんは、非常な勇者ではあるが、此登山を企てたのは、惡い思ひ付きでありました。何事か、異變が起らなければ、よいが、わたしは、心配でなりません。シヤモのサムライは、强い心を、有つて居るから、一度いひ出したら、いくら留めても肯きません。何とかして、救ふ事は出來ますまいか』

『イルクルミの神樣に、祈りをあげる外はあるまい』

『それでは、兩人で祈りませうか』

コタンヒルが、先きに立つて、ヘンリウクは、跡から出た。

『これは、大變です』

と、いつて、コタンヒルは火打山の方を眺めて、しきりに太い息を、吐いて居た。

『どうしたのです』

『山が、鳴つて居ます。那の雲が出ると、雪になります。これは、猶豫しては居られません』

すぐに、部落へ觸を出して、これから、アイヌが總出になつて、祈禱をはじめた。

それが濟むと、全員を、四手に分けて、山へ登りはじめた。一列は八人として、それが、四手に分れた。

初めは、強い風、それが凪ると、今度は、深い霧になつて、さらに大雨が降り出した。コタンヒルと、ヘンリウクは、一同を勵まして、山林のうちへ、ふみ込んだ。

雨が止み、霧が散じて、月が出て來た。疲れたものを、休めて居るうちにも、兩人は、しきりに德内等の行方を、搜して居た。

天明の頃から、大雪が、降り出した。

『ヘンリウクさん、もういけません』

『いけませんか』

『この雪では、とても搜し出せますまい』

『困りましたな』

けれども、兩人は、全員を勵まして、猶ほ森林深く、進んで行つた。

『やツ、最上さん……』

と、ヘンリウクが、叫んだ。

雪中に、德内の倒れて居るのを、見付けたのであつた。

五

半死の狀態にある、德内は、コタンヒルが、介抱を引受けた。ヘンリウクは、連れて來た、アイヌを指揮して、留蘇等を、搜しにかゝつた。

吹雪の裡に、倒れて居るのを、漸次に見付けて、一つ所へ、搬いて來た。德内と同じやうに、それ〴〵介抱をしたが、辛うじて息を吹返したのは、平太郎と政右衞門の兩人のみで、元氣者の留藏と、老年の善吉とは、どうしても蘇生しなかつた。

アイヌは、盛んに焚火をはじめて、遠くから體を溫めたけれど、德内が、稍や生氣づいた丈けで、平太郎と政右衞門は、只だ息が通つて居る、といふばかりで、未だ充分に助かる、見込みはついて居ない。

いづれにしても、山を下りて、本統の介抱をしないと、折角に蘇生したものも、また、いけなくなる、といふので、死者も、生者も、ひとしくアイヌが、背負うて下山することになつた。

何しろ、酷い吹雪であつたから、大きい樹の下か、または、岩石の蔭か、多く雪の積らぬ處へ、倒れたものは助かつたが、吹雪が溜つた所に倒れたものは、全身を、雪に埋めて、息が絶えて居たのである。

コタンヒルの家へ、運び込まれてから、德内は、だん〴〵生氣を回復して、言語を、發し得るやうになつた。

平太郎と政右衞門は、生命丈けを、取り留めたが、凍傷の甚しい爲めに、當分は、起きられる見込なく、疲れも可成りひどかつた。

『最上さん、もう大丈夫ですから、氣をしつかり、持つて下さい』

と、ヘンリウクは、心配さうにして言ふた。

『種々と、厄介ぢやツたらう、君等の親切な介抱は、深く感謝する』

『神樣のお怒りも、この位ですみますれば、先づ仕合せといふものです』

『神樣は、吾々を、よく守つて下さる。今度の災難は、神樣のお怒りに、ふれたのではない。氣候と天氣の變化で、いかんともいたし方がなかつた』

德内は、どこ迄も、之れを神の祟りとは、視て居なかつた。

此時、コタンヒルは、膝を進めて、

『あなたの勇氣には、わたくしも、感心いたしましたが、すべて土地のものが惡いといふことには、從ふのがよい、と思ひます。これから先は、猶ほひどい所があるのですから、勇氣に誇ることは、いけません。シヤモのサムライはみな、强いが、その强いのを、賴む風があつて、何時も、失敗いたして居ります。わたくしは、あなたの御身を案じて、遠慮のない考へを、申上げましたのです』

『有難う。その忠告は、謹んでうける』

强氣の德內も、珍らしくやさしいことを、いふた。

『留藏等は、どうなつたか』

ヘンリウクは、すぐに答へ得なかつた。コタンヒルも、俯目になつて涙ぐんだ。

『留藏の聲が聞えない、どうしたか』

『留藏さんは、亡くなりました』

『えツ、留藏は死んだ』

『ハイ』

『跡のものは、どういたした』

『平太郎さんと、政右衞門さんが、助かつたばかりで善吉さんも、亡くなりました』

之れを聞くと、德內は、ひどく氣を落して、

『左樣か。留藏は、死んだか』

『いろ〳〵介抱はしたのですが、五尺ほども雪の中に、埋まつて居たのですから、掘出した時は、氷のやうになつて居ました』

『わしが、惡かつた』

『惜しいことを、いたしました』

『留藏といふ奴は、下司に似合はぬ、義氣に富んで居た、男であつた。無事に、松前へ引上げたら、藩の方へも申上げて、何とか賞表して貰はう、と思ふて居たが、今は、其れも水の泡になつた。つまりは、わしが、殺したも同じぢや。善吉も、可哀さうなことを、いたした』

德內の詞は、實に悲痛の叫びであつた。

十數日を過した。

德內の體は、すつかり癒つた。多少の疲勞はあつても、凍傷に罹らなかつたので、存外に、早く外出が出來るやうに、なつた。

戶外が、俄に、さわがしくなつて、人の駈ける足音が、はげしく聞える。

『何事が、起つたのか』

傍に從いて居る、アイヌは、すぐ答へた。

『エトロフから、船が着いたといふので、みな駈け出してゆきました』

『エトロフから……』

『オスモピヤ人に攻められて、逃げて來たのだ、といふて居りました』

『お前は、船の人に、逢ふて來たのか』

『ハイ、一番はやく見付けて來て、みなに知らせて、やつたのでした』

ケレトフセ事件

一

千島列島は、吾々の身に取つては思ひ出の多い、土地である。

明治になつてからの事をいふて觀れば、樺太の所領爭ひから、辛うじて繼ぎ留たもので、樺太を失ふて、千島を得た、といふことが、餘りに不釣合な、交換條約として、當時の志士は、斷腸の想ひをしたほどに、口惜がつた、歷史附きの、列島である。

我が親友の山田勇治が、横川勇治といふた頃、東京朝日の記者として、群司大尉の一行に加はり、東京灣を發して千島列島までの短艇旅行に、幾多の苦辛を重ね、雪の越年を試みたが、多くの犧牲者を出したのみで、豫期の目的を果し得なかつたことは、今でも、記憶して居る人があらう。

群司も、横川も、今は故人となつて、空しく傳說の上に、その壯圖を、語られる位のものであるが、千島は、其昔樺太と交換された、列島である、といふことが、日本人の頭に、深く刻み込まれて居た丈けあつて、此壯圖は、當時の日本人をして、血を湧かさせるほどに熱狂させたものであつたが、今は殆んど、それを知るものすら、少なくなつた。

群司は、幸田露伴の兄であり、横川は、後に名を省三と改めて、日露の役、クロパトキンの陣中で、銃殺された、

殉國の志士である。

北海道誌には、斯う書いてある。

『千島の國たる、古來、我松前氏の領地たり。寛政十年、之を幕府に收め、文政四年、松前藩に復し、安政二年、又幕府に收め、六年九月、仙臺藩松平陸奥守に假賜す。但し、擇捉の內、紗那のみ、之を幕府に直隷す、(此時、國後に會所一、番屋七、擇捉に會所一、番屋八あり)明治二年、併せて、千島國と爲し、國後、擇捉、紗那、蘂取、振別、の五郡を置く。四年、開拓使に隷し、五年九月、根室支廳の管轄とす。其擇捉以北、久里留十八島は、八年、露西亞交換の新地にして、得撫、新知、占守の三郡を置く。此得撫以北は、島民二種あり。一は、久里留固有の人種にして、北海道土人と異るなし。唯言語名物大同小異あるのみ。一は、アレウート人種にして、露國の移せる所なり。然るに、兩種混居せず、アレウート人は、得撫、新知に居り、久里留人は、占守、溫禰、舍子に住す、皆穴居して漁獵を業とし、農業の事を知らず。其風俗は、露人を模擬すと雖も、猶土蠻の習を脫せず。

初め島民、毛皮を以て、露國に貢す。後、露國諸島の事を、商社に委任す、我場所請負の如し、故に島夷は、露商と貿易し、以て衣食に給するのみ。

按ふに、國後より勘察加に至る、皆蝦夷にして、實に我舊職方に屬す。今、露西亞蠶食の始めを原ぬるに、元祿中(西歷一六九〇年)露人、勘察加地方を歷涉し、始めて其地あるを知る。正德三年(一七一三年)露人先づ極北の島嶼を服從す。明和安永年間より、頻りに諸島を經略し、擇捉、國後の如きも、併呑の勢ひあり、松前氏禦ぐ能はず、天明六年、最上常矩、幕府の命を奉じて、初めて擇捉國後を巡視し、露人を逐ふ。寛政文化の間、幕府兵を遣つて國後擇捉を守らしめ、僅かに其呑噬を免るを得たり。嘉永六年、北邊警戒の議起り、積年決せず、明治八年、占守

以南再び職方に入れり。

明治八年、クリル群嶼回復の頃、榎本露國欽差は、特に千島疆界考を著し、本群嶼は、從來、松前氏の領有にあらざりし由を論じ、以て樺太讓與の代償に足る可きことを主張せり。その文中に曰、擇捉の如き、土酋あり自立せしが、明和二年(一七六五年)俄國イルコツク鎭臺、私に人を遣はし、得撫を收め吏を置き、更に擇捉を併す、松前の漁民之を探知し、歸りて本國に報ず、俄冠の警始めて興る。今千島とは、根室より勘察加に連なれる、二十有餘嶼の惣名なれど、我古所謂、蝦夷の千島と云者、果して此群島をのみ指したる哉、今審らかにし難し、恐らくは是れ往時、北海道を汎稱して、かく行へる者なるべし。何となれば則ち、本邦の史乘にも、洋國の書籍にも、本邦人が嘗て本島を領知し、若しくは居住往來せし證跡ある無し云々。是れ掩耳竊鈴の狡歟、大に非なり。松前氏の領有內附、元祿の牒狀に照しても明かなり、恐らくは尙、其以前數十年より然らん。得撫以北一百五十里、海上連珠の諸島は、勘察加に至る迄、土人は布加と號し、久留牟世種の部落する所にして、畢竟蝦夷の一種なるのみ。而も此蝦夷は、日本國民の一部分のみならず、榎本氏は、蝦夷を以て、外國と誤り、アイヌ亦政治上の日本國民たることを知らず、漫りに千島は、日本の領土に非ず、と云ふ、失考亡狀甚し、天明中の蝦夷草紙に、日本人種類の蝦夷住居の島は、皆日本の境內たること疑ひなし、と曰へるに諦得せよ。千島とは、もと蝦夷諸島の汎稱なれど、後世殊に東北火山列島の特稱に轉じたるも、故無きに非ず。元祿の一目玉鉾に、蝦夷島の屬部の一として、千島の長さ百三十里、橫十五里、是より北、高麗へ十八里など、荒唐の語なれど、玩索す可し。林(子平)氏の三國通覽に至りて、明かに千島といふを、東北三十餘島の總名としたり。遂に明治二年に至り、國名に特定せらるゝことゝなる』

一一

根室のノツカマツプには、松前藩の運上役所が、在つた。

その向ふ岸が、すぐ千島で、泊へ行くには、最も近い所である。松前藩の治績が、存外に擧らない、といふて、一時は、幕府の手に、蝦夷を收めたことはあるが、兎に角、蝦夷の行留りともいふ可き、ノツカマツプの邊に迄、役人を送つて、運上所の設けたのであるから、藩としての努力は、相當にあつたものと、視る可きである。

『役人の頭をして居たのが、正木孝之助と謂ふて、文武の嗜みも相當に有り、例の松村等とは、頗る異つて居た』

『お訴へ申します』

『大變で、御座います』

『オスモピヤ人が、まゐりました』

と、名自に叫び乍ら、アイヌが、訴へて來た。

『左樣騷いでは、よく判らぬから、一人づゝ代り合つて、申して見ろ』

『オスモピヤ人が、渡つてまゐりましたのです』

『それが、何といたしたか』

『恐ろしう、御座います』

『亂暴でも、働いたのか』

『これから、はじめるのでせう』

『未だ誰れも、ひどい目には逢はぬのか』

『ヘイ』

所へ、見張の下役人が、駈けて來た。

『ハツ、申上げます』

『何ぢや』

『オスモピヤ人が、帆前船に乘りまして、只今着さました所で、すでに上陸の支度をいたして居ります』

正木は、この報告を聞くと、すぐに部下のものを集め、自ら率ゐて、出張することになつた。

露西亞政府の保護をうけて、遠く本國を離れ、此邊へ來て居るものは、いづれも、度胸の有る、腕力にすぐれたものばかりで、一歩々々、ふみ込んでゆく所は、直に自分等の勢力範圍として、誰れ憚からず、自儘の振舞を、爲るのであつた。

今、此處へやつて來たのは、ケレトフセといふ奴で、何の目的で來たかと、いふことは、さらに判らないが、どうせ、侵略の爲めの來航であらう、と、正木は、疾くも想像して、部下のものには、充分の覺悟を、爲せて來た。

此談判は、日本語と、アイヌ語と、ロシア語の取交であつたから、要領を得るまでには、可成り面倒であつた。

『君等は、どういふ事情で、此處へ上陸したのであるか』

『日本の役人に逢ふて、相談したいことがある』

『拙者は、日本の役人である』

『氏名は、何といふのですか』

『君の氏名は、何といふか』

『わたくしは、ケレトフセといふものだ』

『拙者は、正木孝之助と申すものである』

『何役して居りますか』

『根室と千島の取締をいたして居る』

『何ッ、千島……』

『左樣う』

『千島は、ロシア政府の領土あります』

『それは違ふ。日本の領土である』

ケレトフセは、碧い眼を丸くした。

『千島は、日本の領土ありません。ロシアの領土あります』

『その爭ひは後ちとして、君等の相談したいと、いふのは、いかなる事か』

『交易を許して、貰ひ度いのです』

『それは、ならぬ』

『ロシア政府と、日本政府の交際を、希望する爲めに、來たのであります』

『交際は、斷じて御斷わりいたす』

『何政、いけませんか』

『外國と交際せぬのは、日本國の方針である』

『、、、どこの國とも、交際いたしませんか』

『左樣う』

『支那と交際して居るのは、どういふ、理由ありますか』

『……』

『オランダと、交易して居るのは、どういふ理由ありますか』

『……』

急所へ、一本突ッ込まれて、正木も、少し困つた。

『それは、德川幕府が、特別にゆるしてあるので、いたし方がない』
『支那は、どうありますか』
『これは、古い昔からで今更に之れを論ずるのは、莫迦らしき事である』
『國の方針、幾つありますか』
流石に、ケレトフセは、巧い事をいふた。
正木は、いよ〳〵究した。
『過ぎ去つたことは、我等の關せざる所である。君等の要求には應ぜられぬ』
『宜しい、よく解りました』
『解つたら、直ぐ引取りなさい』
『引取ります。その代り、ヱトロフの日本人も、すぐ立退かせて下さい』
『ヱトロフは、日本の領土である。そこに、日本人の居ることは、差支へない』
『千島は、ロシアの領土であります。ヱトロフに、日本人の居ること不都合あります、すぐ立退かせて下さい。それともに國交許しますか』
さア、問題は、頗る面倒になつて來た。

二

外國と交際せぬのを、見榮のやうに心得て居た國民、それを楯に取つて、鎖國令を布いた幕府、今から、之れを顧るならば、實に可笑しなものであるが、昔は、日本の國是として、長い間、實行されて居たのだから、思へば、不思議の至りである。

鎖國の夢が破れて、やうやく七八十年、昨今の日本を視れば、あまりに西洋化、してゆくことのはげしいので、また一驚を喫する。一も西洋、二も外國、何でも、彼でも、西洋臭いことでなければ、承知が出來ぬ、といふやうになつた。

物質的文化の侵入は、延いて精神の上に迄、深く泌み込んでゆく西洋臭、これから先の日本は、果してどうなるのか、考へて視るほど、心細くなる。

いくら何といふても、この風潮は、容易に防ぎ得まい。今更に、その原因を論じて、徒らに憤慨することの無益であるのは、改めて、いふにも及ぶまいが、せめては、建國の精神を、忘れぬやうに、心懸けて欲しい。

日本人が、いかに奮發しても、毛唐人と、對立してゆくことは、至難しいのである。日本人は、日本人らしくして居て、初めて日本人としての眞價もあるが、毛唐人の眞似をしたとて、それが爲めに、日本人の本質が、よくなる譯でもなく、眞似は、どれほど巧みにやつても、本質的に、眞價のあるものではない。

物質的文化と、科學的發明は、どうしても、西洋の方が、偉いのであるが、獨り精神的には、日本の長所があり、その長所さへ、堅く守つてゆけば、決して恐るゝ所はないのである。

要するに、學ぶ可きは學び、守る可きは守る、といふのでなければ、日本は、立つてゆけぬのであるから、其處に目覺めて、今のうちに根本から、建直しをやらなければ、折角の國柄も、メチヤ〳〵になるであらう。

モダンガールといふ、變なものが湧いて出て、淫蕩な生活を、西洋式の如く心得、モダンボーイと稱する、不思議な動物も、出て來たが、本家本元のアメリカへ行くと、頭からヂヤツブと貶されて、男も、女も、すべて結婚の權利はないのだ。

日本の女が、アメリカの男に、弄ばれることはあつても、結婚はゆるされない。日本の男が、アメリカの女に、野合いても、良人になることは出來ぬ。それは、アメリカ人が、日本人に對する、一種の侮辱から、來て居るのだ。ア

メリカに居る、日本人は、それでさへ、屈從して居るのである。

然るに、日本に居る女は、毛唐人に弄ばれることを、無上の光榮と心得て居る如く、丸で化物のやうな風をして、モダンガールと稱し、大手を振つて、歩いて居るばかりでなく、片ツ端から攫み喰ひをして、それを、西洋式と思つて居るのだから、情けなくなるではないか。

之れに比べると、昔の攘夷の方が、遙かにまさつて居た。一切の西洋人を、夷狄禽獸と稱へて、爪彈して居たのが羨やましくもなつて來る。

ケレトフセの談判は、いかにも巧みであつた。正木が、國交拒絶の理由は、一たまりもなく、いひ破られてしまつたが、斯うなれば、正木も、一生懸命である。

『たとへ、君等が何といふても、拙者は、上司の命ずる所に依つて、斯く申すのであるから、此上の論議は無益であるから、速かに此地を、立去るがよい』

『エトロフの日本人は、どうしますか』

『エトロフは、日本の領土であるから、其處に居る日本人は、敢て立退く必要はない』

『それは違ひます。エトロフは、ロシア政府が、支配して居る所であります』

『默れッ』

正木の聲は、破れ鐘の如く、ケレトフセの耳に響いた。殊に、正木の手は、刀の柄にかゝつて居るので、それには頗る驚いたらしい。

『宜しい。立退きます』

『はやく、行け』

『エトロフの日本人も、皆な立退かせます』

『それは、相成らぬ』

『併し、立退かせます』

『左樣なことをいたせば、嚴重に掛合ひを開くから、豫め承知いたして居れ』

と、互に勝手なことをいふて、談判は何ともつかず、物別れになつてしまつた。

ケレトフセの船が、いよ〳〵出帆する迄、正木は、海岸に立つて、監視を怠らなかつた。

斯くて、船は、千島へ引返したが、その儘に、エトロフへ直航すれば、何事も起らずに、すんだかも知れないが、ノツプといふ所へ上陸したので、一つの間違ひを、引起すことになつた。

四

ノツプの酋長、ヤラウルの小屋では、今ひツくり返るやうな、騒ぎをやつて居る。

ヤラウルの一人娘が、神匿しにでも逢つたやうに、煙の如く、消えてしまつた、といふので、配下のアイヌは、殆んど總動員で、捜しに出よう、といふ所だ。

アイヌが、メノコを、大切にすることは、内地人が、娘を可愛がる程度のものでなく、丸で寶物を、扱ふやうにして居る。殊に、酋長の娘は、その部落に於ける、女神の如きものであつて、親が可愛がるばかりでなく、部落のものは、更に大切に思つて、美しいメノコは、他の部落へ對する、唯一の誇りともなるのであるから、ヤラウルの娘が居なくなつたことは、部落の寶物が、失せたと同じことで、それが爲めに、部落の沸き返るほどに騒ぐのは、當然の事であつた。

『酋長、酋長』

と、叫び乍ら、駈け込んで來たのは、ヤラウルの命令で、メノコを、捜しに出て居た、アイヌの一人であつた。

『オー、お前は、どこへ行つて居たのか』
『メノコは、オスモピア人に、攫はれたのであります』
『えツ、オスモピア人に、攫はれたといふのか』
『ハイ』
『それが、どうして判つた』
『見て來ました』
『莫迦ツ』
酋長に大喝されて、一と縮みになつた。
『そんなところを見て、なぜ救はなかつたのか』
『わたし一人では、どうにも手の出しやうが、ありませんでした』
『對手は、幾人ほど居た』
『五六人は、居りましたらう』
『どツちの方へ、行つたか』
『海岸の方へ、行きました』
『さては、船だな』
『無論、さうでせう』
ヤラウルは、すぐに立ち上つて、
『さア、みな來い』
と、いつて、弓矢を携へ、非常な勢ひで、駈け出した。

部下のものも、それに尾いて、駈け出したが、いづれも、武器を持つて居た。
却說、ノツカマツプで、正木から、交際を拒絶されて、ケレトフセは、止むを得ず、船へ戻つたが、もし襲撃でもされる、と、事が面倒になるから、一と先づエトロフへ、引上げるつもりであつたが、風の都合や、糧食の關係で、ノツプへ、船を着けた。
三四人の水夫を連れて、これから糧食を求めた、此處の部落を尋ねよう、とした途中、圖らずも、美しい娘を見付けたので、それを奪ふ氣に、なつたのである。
食に餓ゑて居ても、女を見ると、變な氣になるのが、劣等な人間の常性である。況して、ケレトフセは、未だ餓ゑて居る、といふほどではなく、幾分の不足を補充して、エトロフへ歸る迄、食物の安全を期さう、とした丈けのことであるから、そんな氣にも、なつたのだ。
それにしても、甚だ良くない事である。使はれて居る水夫は、船長の心次第で、どうにでも動くのであるから、船長が、獸慾を充たさう、と爲る、手傳ひ位は、何とも思つて居なかつた。
岸邊に繫いである、小舟へ、今やメノコを、搶ぎ込まう、とした所へ、ヤラウルの一群が、駈けつけて來た。
メノコは、必死の力を出して、船に乘るまいとして、暴れ狂つて見たが、屈强な男に、しつかり抑へつけられて、手足も自由ならず、全く力盡きて、その爲すに、まかす外なかつた。
けれども、悲痛な泣聲は、斷續的に聞える。それが耳にはいるほど、部落のものは勇氣を出して、駈け出すのであつた。
親のヤラウルは勿論、一生懸命になつて居るが、その小舟までは、二三十間の距離があるから、駈けつけるうちには、小舟が出てしまふであらう。
もはや、一寸の猶豫もならぬ場合だ。弓に矢をかけて、ヒユツと放つた。これ丈けは、彼等の練磨で、實に巧いも

のである。

『あツ』

と、叫んで、一人の奴は倒れた。

それにつゞいて、二の矢、三の矢が、ヒユツ、ヒユツと、放たれた。斯うなつては、自分の生命が大切であるから、メノコを、捨てる外はない。

ケレトフセは、第一に小舟の中へ、ひれ伏してしまつた。その他の奴も、ひとしく小舟へ飛込み、板を揭げたり、上着を脱いで、之れを楯の代りにしながら、小舟を漕ぎはじめた。

メノコは、辛うじてヤラウルの手に、取り返し得た。

五

ケレトフセの方に、武器の用意があつたら、斯う容易は、メノコを、取戻し得なかつたであらう。

その頃の鐵砲は、今の物ほどに、精良でないことは、いふ迄もないが、それにしても、弓矢には、まさつて居たから、鐵砲の一挺も、彼等の手に有つたら、とても此爭ひは、ヤラウルの勝利には、ならなかつたのであるが、幸ひにして、彼等は、その用意をして居なかつたから、ヤラウルの爲めには、極めて好都合であつた。

メノコは、ヤラウルの懷裡へ、抱き込まれるやうにし乍ら、猶ほシク〳〵泣いて居た。餘りの恐怖に襲はれたのとひどく抵抗したのと、この二つで、メノコの顏は、眞ツ青になつて居た。

『もう宜しい。さう泣くものではない』

『お父さま。わたしは、口惜しくてなりませぬ』

『道理だ。けれども、無事に取戻してやつたから、もういふことはなからう』

『憎らしいのは、オスモピア人であります。どうか仇討をして下さい』

『お前さへ、無事に取戻せば、この上に、恨みを持つには及ばぬ』

『わたしは、女であります。たとへ汚されずとも、斯ういふ眼に逢はされたのは、汚されたも同じ事であります』

『さう、理窟をいふてはいけない。體に、手をかけられた丈けの事で、汚されては居ないのだから、決して嘆くことはないだらう』

『體に、手をかけられたのは、汚されたも同じ事ですから、わたしは、もう女としては、廢物になつたも同樣であります』

アイヌの習慣として、斯うした事があると、良い所へ、嫁ぐことは出來ないのであるから、メノコは、それを嘆くのであつた。

ヤラウルは、種々になだめすかして、やうやく部落へ、引上げて來た。母も、限りなく喜んで、娘と抱き合つて、嬉し涙にくれた。部落のものも、喜びの詞を述べて、一と先づ引取つた。

その夜、深更に及んで、部落に火事が起つて、再び大騒ぎになつた。ヤラウルは、武裝して飛出すと、鐵砲の音が聞えた。

『酋長ッ』

『火事だな』

『火を、放けられたのです』

『エツ、火を放けられた』

『オスモピア人が、復讐に來たのです』

『ふーむ』

『那の鐵砲の音は、それであります』
『部落のものは、どうした』
『男は、みな出て、戰つて居ります』
『女は、どうした』
『逃してしまつたから、心配はありません』
『可矣。戰はう』

ヤラウルは、火の燃えさかる方へ、駈けてゆく。

ケレトフセは、晝の復讐に、押かけて來たのだ。今度は、充分の用意をして來たから、人數は少なくても、勇敢によく戰ひつゝ攻めかけた。火を放つて置いて、鐵砲を、うちかけるのであつた。

いかに、アイヌが、必死に爭ふても、火と鐵砲には勝てない。見る〳〵うちに部落は、すべて火に包まれ、多くのものは、枕を並べて倒れた。

ヤラウルは、もはや獸目、と見て、妻と娘を、辛うじて連れ出し、海岸に沿ふて、一心に走つたが、尾いて來たものは、僅に七人にすぎなかつた。

漁に出る時、常に用ひる丸木舟が、小さな入江に繫いである。はやくも、其れへ乘つて、沖の方へ、漕ぎ出した。

陸の方を、振返つて見ると、部落は、すべて火になつて居る。長い間、住馴れて居た、部落を燒かれる、火の手を見ては、斷腸の思ひであつた。

暴風と、いふほどではないが、可成り、強い風が起つて、丸木舟は、高浪に弄ばれ、同舟七人は、生きた心地もなく、舟のうちに相擁して、死せるが如く、なつてしまつた。

最上德內は、すつかり體も良くなつて、元氣も回復した。然前を出て以來、艱難を共にした、留蹴と善吉を亡くしたのは、殘念で堪まらぬが、今は、いかんともいたし方なく、自分の無謀を、悔ゆるの外なかつた。

ヤラウルの丸木舟は、風に吹きつけられて、泊へ着いた。

それを發見したものは、すぐに救助にかゝつたが、幸ひにして、一人の死者もなく、すべて生氣づいたから、コタンヒルの小屋へ、連れて來て、その事情を聞いて見ると、前の通りの事が、すつかり判つたので、コタンヒルは、德內を訪ねて、之れを報告した。

其處で、德內は、ヤラウルを呼んで、さらに事情を聞くことになつた。

六

國後は、周廻百里餘あつて、名山奇石に富んだ、島である。

セセキには、海中から溫泉が、湧き出て居る。クサクチには、自然の方石、幅六七寸位あつて、長一丈から一丈半ほどのものが、疊々として折重なり、恰も鎧の草摺の如くなつたものがあり、その傍らには、甲形の石が在る。又、其附近の山上には、方石の長さ二三尺もあるのが、井桁に組まれて、六七ケ所も在る。

土人の傳說には、甲冑の如き石は、義經の甲冑が、化石したものだといはれ、井桁は、熊を畜ふた所とされてある。

イエンシコマへ行くと、紫黑色の角石が、二町餘も列なつて、屛風の形をなし、之れが、海水に映じて居る美しさは、畫の如くである。

オタチブと稱する、砂山がある。盛夏の候、二三尺も砂を掘ると、雪が出て來る。これも土人は、義經の船が、砂山に化したのだ、といふて居る。

チヤチヤナブリは、四里ほどもある高山で、絕頂には、一つの湖水があり、さらに其湖中に、高い山が在る。之れ

に登ると、メナシ、エトロフは、一眸のうちに集まる。

この湖水から流れるものを、ランネベツ川と稱して居る。

德內の目的は、國後と擇捉の探險であるが、國後までは、やつて來て、火打山の災厄に遭ふて、泊に居る日が、存外に長くなつたので、少し心が焦立つて居た、時であつた。

コタンヒルの案內で、ヤラウルが、やつて來て、擇捉の事情を、くはしく述べた。露人の亂暴を聞いて、頗る憤慨した。

『コタンヒルさん、この事は、どうしても、聞き流しにならぬ。殊に、君等の同胞が、これほどの凌虐を、うけて居るのであるから、一と奮發なさい。わしも、大いに力を添へて、エトロフは、君等の物と、いふことにしてやらう』

コタンヒルは、德內の義氣に感じたが、少し心配になることは、その健康であつた、オスモビア人を對手にして、はげしい戰が出來るか、どうかといふことを、考へて視ると、幾多の疑ひも出て來る。

されば、といふて、それと明言して、『大丈夫ですか』ともいへぬので、答へが淀んだ。

『久振りの腕試しに、相撲を取つて見よう。誰れか、對手にならないか』

と、德內が、不意に斯んなことを、いひ出した。

それから、話が榮えて、部落の若い者が、追々に集まつて來て、力自慢の連中は、皆な喜んで、相撲をはじめた。最後に、德內が現はれて、片ツ端から取つて投げた。德內の武勇には、かねて恐れ入つて居るが、相撲ならば、といふ考へで、代るゝ、向つては見たが、誰一人として勝つものはなく、二人がかりから、三人がかりで、立向つて見ても、總に投げ飛ばされて、德內を負かすことはどうしても出來なかつた。

ヤラウルは、只だ驚いて、見て居たが、コタンヒルは、だれで、潔く、突心が出來た。

屈强な、壯丁を選んで、五十人餘りを、集めた。船の用意も出來て、武器も整ふた。船の中央には、八幡大武神と認めた、大旗を押樹て、その下に、威容嚴として、控へた德內、今度こそは、ロシア人を對手に、本式の戰ひを爲る覺悟であるから、今迄とは異つて、眞綿を縫ひ込んだ肌衣には、鐵の鎖網が掩ふてある、ぶツ裂羽織に、野袴を着けて、大小を帶し、鉢鐵の用意までもしてあるのは、松前を出てから、初めての武裝であつた。

一同は、この容子を見て、心からの尊敬を拂ひ、互に語り合ふて、この大勇士の爲めには、いかなる働きも辭せぬ、といふ意氣を示した。

ヤラウルは、先導の役目を引受け、部下のものは、ヤラウルを警護することになつた。泊から、新に加はつたものは、すべて德內の直屬で、これは主として、戰鬪に從ふのである。

コタンヒルと、ヘンリウクは、德內の傍に、ついて居る。ヘンリウクは、日和を、察する知識があつて、陰晴を、はやく知り、風位の事が判る。出帆の日は、ヘンリウクの指圖を、待つことになつた。

策戰の第一としては、敵に知られぬやう、こツそりと、島へ渡ることであつた。少し波は荒いが、島尾を廻つて、アトイヤへ出た。それからは、直徑五六里にすぎなかつた。

斯くて、ノツプへ着いたのは、夜半の頃であつたから、敵に覺られなかつた。ヤラウルは、土地に居たものであるから、附近の地理は、よく知つて居た。

山奥へ、逃げ込んだ、アイヌの一人に邂逅して、その後の狀況を聞くと、二三のメノコは、生捕られて行つた、といふことで、ヤラウルの憤慨は、固よりいふ迄もなく、德內も、之れを聞いて、露人の暴虐に切齒した。

ヤラウルの配下が、追々に集まつて來て、十數名に及んだから、之れを斥候に使つて、敵狀を搜ることにした。

七

斥候の報告に依れば、ケレトフセは、現に上陸して居るといふことであつた。

アイヌを、常に對手にして居たので、いくぶんか、侮る心もあつて、ケレトフセは、存外に、少數の部下のみを從へ、上陸して居るのであつた。

その隙に乘じよう、とするのが、德内の策戰であつた。全隊を三分して、その一部は、ヤラウルが率ゐて、僅に二十人で、正面から攻めてかゝる。左翼は、ヘンリウクとコタンヒルが、これも二十人を率ゐて、ヤラウルを扶ける事とし、德内は、自ら殘つたものを率ゐ、草深き所に潛伏して、敵の侵出して來るのを、待ちうける事にして、すツかり手順は定いた。

夜に入るを待つて、ヤラウルの一隊は、海岸の方面へ、徐かに進んで行つた。

ケレトフセの方にも、さらに油斷はなかつた。はやくも、ヤラウルの一隊が、攻め寄せることを知つて、部下の水夫、十數名を指揮し乍ら、討つてかゝつた。

しばらく、鬪つて居るうちに、ヤラウルの一隊は、次第に浮足立つて、逐ひ捲くられた。その機を外さず、ケレトフセの方では、息も吐かせずに、攻め立てた。

一段高い丘を繞つて、人の丈はどに生ひ茂る、草叢のうちには、德内が、十數名の壯丁を連れて、こツそりと、潛んで居た。應援のコタンヒルとヘンリウクは、ヤラウルを、ほどよく扶けて之れも敗走しつゝ、その草叢の前まで來た。

所へ、ヤラウルの一隊は、先きを爭ふて、逃げて來る。ケレトフセは、逃ぐるを逐ふて、はげしく攻め寄せた。

時機こそ來れりと、德内は、草叢のうちから、討つて出た。俄かに、伏兵が起つて、側面から討つてかゝつたので、ケレトフセも、茲に始めて、敵の策に乘つたことを悟り、急に退却しようとしたが、いかに小人數でも、斯うなつては、思ふやうにならず、右往左往に敗れ立つ。北海の平太郎、歌石衞門は、眦に目覺しい働きをして、獨り暴

れ廻つた。

德内は、初めから、敵の首魁を、狙ひ討ちに、仕留めようと考へて、自分は、列を放れて、しづかに敵の背後へ、出る考へで、草叢のうちを這ふやうにして、進んでゆく時、それと覺しき一人が、鐵砲を構へて、狙ひをつけて居るのを見付けて、矢庭に躍りかゝつた勢ひが、いかにも鋭かつたので、これはと驚きつゝ、疾風の如く、逃げ出した。

德内は、其奴に跳りかゝつた。

間一髪、ズドンといふ響き、と共に、其奴が『あツ』と叫んで倒れた。この傍らには、德内が、血刀提げて、立つて居た。

逸早く駈けつけたのが、平太郎であつた。太い棍棒を揮つて、其奴に、一擊を加へる。擊たれたのは、ケレトフセであつた。

『平太郎、待てッ』

と、聲をかけ乍ら、德内は、二度目の棍棒を支へた。

ケレトフセの右腕は、すでに切落されてあつた。その上に、棒の一擊をうけたので、殆んど絶息しかけて居た。

德内は、それを引起して、傷口に布を卷き、氣附藥を與へて、しきりに介抱をはじめた。

『船長、どう爲るンです』

『まア、待つて居れ』

『其奴が、敵の大將ですぜ』

『よし、それは判つて居る』

『はやく、殺しちまつたら、どうです』

『此奴を殺しては、談判の材料が無くなる』

『へー』

さすがに德内は、このはげしい鬪ひのうちにも、よく考へて居た。

所へ、ヘンリウクが、駈けつけた。引つゞいて、コタンヒルもやつて來た。最後に、ヤラウルが來て、

『おツ、ケレトフセです』

と、思はず叫んだ。

德内は、微笑を浮べて、

『此奴が、お前等の部落に、火を放けたのぢやな』

『左樣であります』

『話のあつた、船の頭ぢやな』

『左樣であります』

『それで、可し』

『今の一發で、わたくしの部下が斃されました』

『一人か』

『ハイ』

『そのものは、どういたした』

『今、此處へ連れてまゐります』

『未だ死には、せぬか』

『股を擊たれました』

『股では死なぬが、はやく手當をいたしてやる。すぐ連れて來い』

『ハイ』

やがて、負傷者を連れて來た。德内は、すぐに手當をしてやつた。

八

德内方の喜びに引換へて、船の方では、容易ならぬ騷ぎになつた。船長のケレトフセが、負傷した上、捕虜になつた、といふのだから、船員の騷ぐのは、固よりいふ迄もないが、副船長のステツパンは、殊に、弱り込んで居た。

ケレトフセの船は、ロシア政府が、保護を與へて居るのであつた。大きい方を、カムチヤツカ號といひ、小さい方を、ストツク號と、名づけてあつた。

双方の船員、併せて百名に近く、舊式ながらも、武器の用意があり、漁具は、一と通り備へてある。

ロシア政府が、極東へ、その勢力を延さうとして、しきりに、焦つて居た時代であるから、斯うした船に對しては相當の保護を與へるのは、當然の事で、ケレトフセは、それを頼みにして、千島と樺太の近海には、可成り暴威を、振つて居たのだ。

今迄に、アイヌを、苦しめて居たことは一と通りでなく、或は物を掠め、或は女を犯し、それは〳〵、暴虐の振舞を、遠慮もなく行つて居たのであるが、このたびの如き、失敗を遂げたのは、初めての事である。それ丈けに、ケレトフセの無念は、實に非常であつた。

從つて、ステツパンも、水夫の報告を聞いて、初めのうちは、半信半疑であつたが、いよ〳〵報告の通り、ケレトフセの捕へられたことが、判つた時は、さすがに、ステツパンも、太い息を吐いたほどであつた。

ケレトフセは、德内の手當をうけ、生氣づいてから、考へた。

『何しろ、負傷は重いし、斯く捕へられて居たのでは、何事も思ふやうにならず、いづれ談判も開かれるであらう

が、とに角、自分が、船に居なければ、萬事の駈引に影響して、甚だ不利であるから、多少の犧牲は拂つても、船へ戻ることが、第一である。それにつけても、不思議でならぬのは、日本人の加はつて居る事だ。而かも、その强さといつたら、今迄に、知り得なかつたほどであるが、全體、どうした人物か、、、、どうせ、談判の場合にも、那のサムライが、その衝に當るのであらうが、これは、餘程氣をつけてかゝらぬと、再び失敗するかも知れぬ。いづれにしても、はやく本船へ戻れるやうに、話し合つて見よう』

と、ケレトフセの心は、茲に決して、德內へ、面會を求めた。

『わたくしを、本船へ、戻してくれませんか』

『全然戻されぬ、とはいはぬが、君の戻るについて、此方にも求むる事がある』

『それは、どういふ事ですか』

『先きに捕へた、メノコを、すぐ戻してくれるか』

『それは、戻します』

『幾人、居るか』

『三人、居る』

『凌辱は、加へて居まいな』

『……』

『その點は、どうであるか』

『わたくしは、未だ左樣な事をして居らぬ』

『然らば、何の目的で捕へたか』

『人質であります』

『何の爲めの人質か』

『ノップの事件について……』

『ノップの事件は、君の方で、起した事ではないか』

『……』

『君等は、力弱きものを虐げて、それで、滿足して居るのか』

『……』

『その事については、いづれ談判する、といたしても、今の場合、君と、メノコの引換へは、どういふ風にするつもりか』

『わたくしが、手紙を書いて、メノコを、連れて來るやうにいたさう』

『宜しい。然らば、左樣にしてくれ』

ケレトフセは、左の手で、鉛筆を執つた。

『捕虜にした、アイヌの娘を連れて來て、余と、引換へにしてくれ』

と、いふ意味の事を書いて、德內へ渡した。その名宛は、副船長のステツパンに、なつて居た。

此手紙を見て、副船長の居ることを、德內は、初めて知つたのである。

却說、船の方では、ステツパン初め一同が、甲板へ集まつて、いろ〳〵と、相談して居る時であつた。この手紙を受取つたので、取敢ず水夫長が、三人のメノコを連れて、數名の水夫と共に、上陸した。

跡は、どういふことにならうと、先づ船長を、取戻したいの一心から、少し輕卒だ、とは思つたが、ステツパンの計らひで、斯ういふことにしたのである。

萬事は、德內の考へに、はまつてゆくので、德內は、心ひそかに、喜んで居た。

九

カムチヤツカ號の水夫長が、會ひに來た、といふことを、平太郎が、知らせて來た。

すぐに、德内は、水夫長に會つた。

『船長からの手紙を見て、メノコを、連れて來ました。船長に、會はせて下さい』

『承知いたした』

『船長は、どこに、居りますか』

『今、來るから待つて居れ。連れて來たメノコに、先づ會はう』

『船長は……』

『それは、承知して居るから、決して心配するに及ばぬ。メノコを、連れて來なさい』

『水夫が守つて、あちらに居ります』

『これへ、連れて來てくれ』

『はア……』

水夫長は、德内の前を退つて、しばらくすると、メノコを、連れて來た。

德内は、メノコに向つて、

『お前達は、ひどい目に逢はされたか』

『……』

德内のいふことが、よく解らないらしい。そこで、德内は、コタンヒルを呼んだ。

メノコ等は、コタンヒルを見ると、一時に聲をあげて、泣き出した。

『シヤモのサムライが、救つて下さるのだから、先づ禮をいひなさい』

メノコは、ひとしく立つて、最敬禮をした。

コタンヒルの通譯で、捕へられてからの事情を、いろ〳〵訊いて見たが、幸ひにして辱めは、うけて居ない、といふことが、判つた。

いくたびか、辱めをうけやうとしたが、みな死を以て防いだ、と聞いて、德内は、ひどく感心した。

『コタンヒルさん。君は、メノコを、連れて行つて、宜しい』

『有難う存じます』

『オイ、平太郎』

『ヘー』

『メノコを、よく守つてやれ』

『ヘー』

『皆な、あちらへ行つて、宜しい』

一同は、メノコを連れて引退つた。

之れを見て、水夫長は、少し狼狽氣味になつた。

『船長を、渡して下さい』

『メノコを、連れて來た以上、船長は、引渡してやるが、副船長に、迎ひに來い、といふてくれ』

『それは、いけません』

『何故、いけないか』

『約束が、違ひます』

『約束は、違つて居らぬ』
『イヤ、違ひます。メノコを渡しましたから、船長を、渡して下さい』
『副船長をよこせば、それで判る』
『約束、違ひます』
『メノコを渡す、といふから、メノコは、たしかに受取つた。約束に違つては居らぬ』
『船長と、引換へにする約束あります』
『誰が、そんな約束をいたしたか』
『船長の手紙に、さう書いてありました』
『わしの名が、書いてあつたか』
『……』
『わしの名が、副署してないのは、約束したことのないといふ證據ぢや。若し約束したものならば、わしの名が、列なつて居る筈ではないか』
『……』
『また、船長の引渡しを、水夫長位なものを對手にして、すますことは出來ぬ』
『メノコを、返して下さい』
『それは、ならぬ』
『あなたは、わたくしを欺きました』
『黙れッ』
『イヤ、欺きました』

『日本のサムライは、人を欺かぬ』
『船長を、渡して下さい』
『お前は、實に判らぬ奴ぢやな。副船長をよこせば、船長は引渡す、といふて居るでは、ないか』
『それは、いけません』
德内は、すつと立上つた。
『わしのいふことは、之れ丈ぢや。お前等は、どこへでも行け』
と、いつて、その場を立去りさうであるから、水夫長も立上つて、德内の袖を、捉へた。
『おまちなさい』
『何か』
『船長は……』
『莫迦ッ』
と、一喝を加へて、横ッ面を、厭といふほど毆りつけた。
水夫長は、之れに驚いて、手を放した。
德内は、恐ろしい顏をして、刀の柄に、手をかけた。水夫長は、膽を冷して、這々の體で、逃げ出した。

一〇

水夫長から、報告を聞いて、ステツパンは、非常に怒つたが、肝腎の船長を、抑へられてゐるから、どうにもしやうがなかつた。
この取扱ひは、下手に出ると、船長を、殺されるかも、知れない。それが、ステツパン等に取つて、一番の苦痛で